# 二人の狐の聖杯戦記

チェーザレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の狐の聖杯戦記

【Ｎコード】

Ｎ３０４５Ｘ

【作者名】

チェーザレ

【あらすじ】

突然の死を経験した彼は、目の前の天使（自称）に転生の話を持ちかけられ……これを受けた。そして転生先で自分の人生を歩んでいた彼は、前世でも知る、とある戦い……第四次聖杯戦争に招かれる。初投稿です。どうか暖かく見守ってください。

## 第一話　とある吸血鬼狩りにて（前書き）

初投稿です。
アニメＦａｔｅ／Ｚｅｒｏに刺激されて書いちゃいました。
どうかよろしくお願いします。

## 第一話　とある吸血鬼狩りにて

この世界には吸血鬼というものが存在する。

最もそれらは、世間一般に言われている『吸血鬼』とは違う部分もある。

この世界の吸血鬼たちは霧や蝙蝠に姿を変えたりすることは出来ず、その能力もあり方も個体によって多種多様すぎており、中にはその『存在』そのものがおよそそういうものたちとは明らかに違いすぎる者もいる。

だがやはり、多少の例外はあってもほとんどの吸血鬼は吸血鬼であって、日光が苦手で、聖なるものが天敵で、傷はすぐ治り、桁外れの力を持ち、何よりも……自らのために『血を吸う』。

ここフランスの片田舎の闇に身を潜めているこの男も吸血鬼。その中でも自身の存在の維持のために人の血を吸う、いわゆる『死徒』という部類の吸血鬼だった。

そして今、この死徒は夜にまぎれて一人の男を尾行している。

理由は単純……「吸血」のためだ。

目的の男は、今も結んだ黒髪の長髪をたなびかせ歩いている。

なぜこの男を狙うのかというと、理由は至極単純……町で見かけたこの青年の血が、

えもいわれぬいい香りだったからだ。

もちろんこの男が血を流したわけではない。
だが死徒のすぐれた嗅覚を使えば、対象の血の匂いぐらいは皮膚の上からでもかぎわけられる。

そして尾行している男の血の香りは、死徒としてそれなりの経験を積んできたこの男にしても、
今まで全く経験したことのないほど素晴らしい……まるで極上のワインのような
芳醇(ほうじゅん)な香りがした。

何としてもこの男の吸血をしようと、尾行をし続けて八時間。
運の良いことに、何故か件(くだん)のターゲットは人気(ひとけ)のない森の方…しかも夜に
一人で歩いていった。かなり不自然な行動だが、血の香りに惑わされてトリップ状態の
この死徒にとっては関係ない。

ただ、ようやくチャンスがきたと喜ぶのみだ。

そして今……襲うのに最高の状況と判断した死徒は、一瞬のうちに獲物に飛びかかった。

……が、その姿が突如消える。

そして気づいた瞬間には、自身の急所の一つである心臓を貫き、
胸から飛び出した白銀の刃が視界に入った。

「なッ！？……ガアアァァァーーーーッッッ！！！」

凄まじい痛みに死徒は絶叫を上げる。急所の心臓を、
しかも……長年の経験でなんとかわかったが、自分たちにとって
絶大な効力を持つ『聖性』が……それもとびきり強力なものが
この刃に宿っていることをこの死徒は理解した。

だがそれだけ……。
数秒後には、その体は跡形もなく消滅していた。

「ふう……予想よりもあっさり片付いたな。
Aランクだからもっと手こずると思っていたが」

そう言って”先程尾行されていた男”は、「目標」を貫いた自身の
獲物を拭(ぬぐ)うと
懐から携帯を取り出し、自分の情報提供者に報告を始める。

「もしもしニック……いや、今はジョンか。
ああ、報告だよ。目標の撃破に成功した。
証拠として奴の魔力がこもった血を送るぞ」

「フォックスか？　了解。報酬の情報は『例の日本の拠点』に送る
ぞ。
しかしAランクを瞬殺とは、相変わらず化け物じみてるなぁ」

「否定はしないが今回は運もあるぞ。正直あそこまで『香り』に
やられてるとは思ってなかった」

「本当にお前の特異体質は反則だよな。まぁ仕事をこなしてくれれば
それが何より。『結果よければ全て良し』だ」

「理解があって助かるよ。それと『例の戦争のこと』でなにか追加の情報は
入ったか？墓参りが済んだらすぐにたって準備しなきゃならなくなるからな。
何かあれば今のうちに教えて欲しい」

「あぁ、もうそんな時期になるんだな……。早いもんだな八年て……」

「ジョン……師匠の思い出にひたってくれるのは素直にありがたいけど
一応『急ぎ』だからな……。正直俺もあまり時間がなくて……」

「っと！すまんすまん、つい知り合いの弟子の成長が嬉しくてな。
『例の戦争』についてだが、追加情報は入ってる。
どうやら”間桐”からも参加者がでるらしい」

「”間桐”から？あそこは今回は見送るんじゃなかったのか？
あと二ヶ月で始まるのに、今まで誰も参加者を立ててなかったんだろう？」

「そのはずだが、去年に家を出奔していた現当主の弟を呼び戻して、
鍛えていたらしい。今回は、ソイツをマスターとして参加させるようだ」

「今まで魔術師でもなかった男をたった一年で”マスターに鍛える”？
御三家も随分と無茶をするな……」

「それについては大いに同感だ。まぁこれで、参加するマスターはお前を含めて6人になったわけだ。あと一人についてはいまだに不明だが、
有力なのは例のロード＝エルメロイの聖遺物を盗んだという奴だろうと
俺は踏んでる。現在判明している情報はこれぐらいだな」

「分かった、情報感謝する。じゃあ俺は、そろそろ墓参りに行くよ。……これでしばらく『死徒狩り』は休業だな」

「”第四次聖杯戦争”か……まぁ、とりあえず死なないよう気をつけろよ。
健闘を祈ってる」

「了解」

最早話すことは終わったと携帯をしまい、半年前に右手に宿った”令呪”を見つめる。

この世界に転生してから既に三十年近く……色々と前世では味あわないであろう
経験を積み続けてきたが、この”シルバー・フォックス”という、
とある有名な
アメコミヒーローの恋人の名前を持つ男にとっては、これから始まる戦争は、
転生してからの彼にとって最大と言える一世一代と言える大事（おおごと）だった。

しばらくしてから令呪を見つめることをやめると、フォックスはこの世界に来てから

最も世話になった女性の眠る場所に歩き始めていた。

……第四次聖杯戦争まで……あと二月(ふたつき)……。

## 第二話　夢と飛行機とアインツベルンにて（前書き）

二話目です。
がんばります！！

## 第二話　夢と飛行機とアインツベルンにて

『それでは転生するにあたって欲しい能力を言ってください。
あ、でも世界のバランス崩すようなのはダメですよ。
例えばドラゴンボールとか、悪魔の実の能力全部とか』

目の前の天使（自称）が尋ねる。
さすがにそんなのを貰うつもりはないが、
もし何か能力が手に入るならやはり今の自分が望むのはこれだろう。

『それなら……そうだな、再生能力をくれ。
具体的には、Ｘ－ＭＥＮのウルヴァリンの肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）が欲しい』

『これはまた……珍しいのを選びますね。出来ますけど、どうしてそれを』

『どんな能力持ってても人間て弱いからな。頭や心臓が傷つけばすぐ死ぬし、
毒や病気、空腹や疲労でも死ぬ。俺みたいにトラックではねられたりしたら
いわずもがなだ。二度目の人生でまでそんなふうになりたくないからな』

これは今の自分の率直な気持ちだ。
どうも、一度人生を強制的に終わらせられて死ぬのがずいぶん怖くなっているらしい。
一度経験した『死』は、かなり自分に影響を与えたようだ。

『能力が発動するのは転生してしばらく後……そうだな……少なく

とも
俺が自立してからにしてくれ。
生まれた時から超速再生能力なんて持ってたら絶対ろくな扱い受けないから』

『わかりました、手配しておきますね。じゃあそろそろ行きましょうか』

『よろしくたのむ。あと、ありがとう』

『いえ、じゃあ二度目の人生頑張ってくださいね』

そう言って彼女が腕を掲げると自身の足元に
魔法陣のようなものが現れたことに気づく。
いよいよらしい……果たして二度目の人生とはどんなものだろう。
そう考えていると、ふっと俺の意識は闇に沈んだ。

ふっとフォックスは目を覚ます。同時に意識もすぐに鮮明になる。
”肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）”。この能力は常に彼の体を
最良の状態に保ち続けるが、それは精神面も例外ではない。
およそ寝起きが悪いという事とは無縁で、起きたらゴルゴ１３のように一瞬で覚醒状態になれるのだ。

「……あの天使（自称）……また何か起きるな」

少し溜め息まじりにつぶやくと、フォックスは旅客機の窓から外の景色を眺める。
既にフランスを飛び立って三時間経つが、目的の地に着くのはまだ

まだ先だ。

……転生の夢。
彼がこの世界でこの夢を見たのは今回で三度目になる。そして今までの二回には、
共通して夢のあとに”転生したこと”と関係の深いことが起きた。

まず一度目の時には、夢を見てから数日後に新たな故郷であるイギリスの村が
死徒に襲われ、逃げた森で出会った———当時『死徒』だった師匠に吸血され、
そのショックで肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）が目覚めた。

二度目は師匠に引き取られてからのことで、十五歳のクリスマスだった。
翌朝にあの天使（自称）から”サービス”と称して今の彼の愛刀である
最硬剣（アダマン・ブレード）が、ご丁寧に説明書と共に枕元に置いてあったのだ。

彼が転生者であることを明かしたのは師匠であるアマリアだけだったので、
事情を知っている彼女から「クリスマスに武器を送るサンタなんてはじめてみたわよ」
とからかわれたのはいい思い出だ。

そして三度目の今回……。
これから何が起きるのかはわからないが、おそらく今回も”何か”が起きるのだろう。
そしてそれは、ほぼ確実にこれから始まる聖杯戦争絡みだろう。

思考を続ける……日本に着いてからのことを頭の中で一通り確認し終えると
フォックスは再び眠りについた。肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）は
能力の持ち主である彼に人間をはるかに凌駕する体力を維持させ続けるが、限界はある。
能力を酷使し続ければ、いずれ再生がきかなくなってくるのだ。
だが、定期的に休息をとっていればそんなことはまず起きない。
よって休めるときに休んでおこうとフォックスはアイマスクをつけた……。

---

……とある北欧の、吹雪が吹き荒れるこの土地。
外部からは完全に隔絶されたこの地の森の中にその”城”はあった。
そのまま文化遺産に登録されてもおかしくない
歴史と威厳を感じさせる古城……だがこの城には今でもしっかりと人が住んでいた。

その城の一室で”男”は作業を進めていた。使っているのは
パソコンにＦＡＸと、現代においては特に使っていてもおかしくない電子機器だが
正真正銘、由緒正しき北欧貴族のこの城のなかでは、あまりにも異端に見えた。

その部屋でカタカタとキーボードを叩いている男の名は衛宮切嗣。

九年ほど前、この城の主である、千年続く歴史を持つ魔導の名家アインツベルンに
今回の”マスター”として招かれた、かつて『魔術師殺し』と恐れられた魔術師である。

「切嗣、ご苦労さま」

彼に声をかけた女性…宝石のような赤の瞳と汚れ一つない、まるで雪を思わせる
白銀の髪をたたえた切嗣の妻……アイリスフィール・フォン・アインツベルンは、黙々と
作業を続ける自身の最愛の夫に笑顔を向けた。

「ああ、おはようアイリ」

「もう、時計を見て切嗣」

苦笑混じりで言う妻の言葉に切嗣は慌てて
パソコンの画面の隅っこに表示される時計を見る。
……もう朝とは言えない……完全に昼間と言える時間を指していた。

「参ったな、また作業に没頭しすぎたみたいだ」

「頑張ってくれるのは頼もしいけど、無理して体を壊したりしないでね。
聖杯戦争まであと一月(ひとつき)ちょっとなんだから」

心配そうに語りかけるアイリスフィール。ここの所、彼女はいよいよ戦争直前となって
最後の仕上げとばかりに戦いの準備を続ける切嗣が心配だった。

荒事は素人である自分たちに代わり、勝利のために頑張ってくれてはいるが
最近は今日みたいに夜から昼までぶっとうしで作業をし続けることもよくあったのだ。

その理由は、ノルマを早く終えて娘のイリヤスフィールと遊んであげる
時間を作ってあげるためなのだが…ゆっくり休んで欲しいという思いもあった。

「追加の情報が入ってね。例の不明だった
二人のマスターの内、一人が日本に入ったようだ……見なよ」

そう言って切嗣が促したパソコンの画面をアイリスフィールは覗く。
映っているのは、ややハネた長い黒髪を後ろでまとめた
まだ二十歳そこそこに見える青年。顔立ちから見るにおそらくヨーロッパ系だろう。

「”シルバー・フォックス”
八年前から活動を始めたフリーのヴァンパイアハンターで魔術師だ。
これまでに単独でおよそ３００以上の死徒を葬っている。そのうち
二十二体は
危険度Ａランク相当の死徒で、なかには二十七祖に匹敵する死徒も
討伐している。
……強敵だよ」

その内容にアイリスフィールは驚く。彼女も詳しくはないが、死徒
のことは
ある程度知っているし、二十七祖クラスともなれば正真正銘の化け
物だ。

少なくともフリーランスが一人で挑むような相手ではない。
この若者がそれだけの力を秘めているというのだろうか。
そんな妻の気持ちを察したのか、切嗣は説明を続ける。
「見た目どうりの年齢ではないよ。どういう手段を
使っているのかは不明だが……これまでの写真を見る限り何年も外
見が変わってない。
多分何らかの方法で老化を抑えているんだろう。
……言峰綺礼とは別の意味で危険だろうな。
おそらくこの男は”マスター”という弱点には成り得ない」
聖杯戦争における基本的な戦術のひとつとして
”サーヴァントではなくマスターを狙う”というものがある。
クラスや英霊としての格の差はあれど、いすれも歴史に名を残す英
雄である
サーヴァントたちは、大抵実力が横並びとなるため簡単に打倒する
ことはできない。
そこで狙われるのがサーヴァントに現界のための魔力を供給してい
るマスターである。
超常の存在であるサーヴァントと違い、マスターはただの人間であ
るため
仕留めるのはサーヴァントと比較すると遥かに容易なのだ。
また、マスターをつとめる魔術師という生き物は

基本的に学者肌の者ばかりで、一部の例外を除き殺し合いの経験などない。

そしてこの衛宮切嗣という男も、その”例外”に属する男であり、同時にマスターである魔術師を仕留めるエキスパートでもあった。

『魔術師殺し』

多くの魔術師をその魔術師らしからぬ方法で裏を掻き、葬り続けてきた実績をかわれ
アインツベルンに招かれた切嗣は、今回の聖杯戦争でも暗殺者としての自身の
スキルを生かし、敵のマスターを闇へと葬り去ることを戦術に取り入れていた。
……が、自身と同様戦いのプロが参加するなら話は違ってくる。

これは言峰綺礼にも言えることだが、このシルバー・フォックスという男には
”暗殺”というのはかなり難しいだろう。この男が倒してきた『死徒』…その中でも
二十七祖に匹敵するという死徒はすなわちサーヴァントにも迫る力を有していたということだ。

それを狩りとったこの男もそれだけの戦闘力をそなえているのだろう。

それだけの実力があるのなら戦闘でサーヴァントの足でまといになるということはまずないだろうし、敵のサーヴァントを自身のサーヴァントで足止めして、
対峙している敵マスターを狙ったりすれば簡単に仕留めることが可

能だろう。

「戦略の練り直しが必要だな……アイリ、おそらく今回の聖杯戦争はかつてないほどに激しくなる。伝説の騎士王を呼び出せたとしても、決して油断はできないだろう……」

そう言うと切嗣は再びキーボードを叩き始めた。これまでに判明している
マスターたちも十分強敵と呼べる者たちばかりだが、
この男も他のマスターと同等以上に厄介な敵となるだろう。

僅かに険しい表情で作業を続ける切嗣だが、突如その顔が沈痛なものへと変わり、
横で見守るアイリスフィールに向けられる。

「アイリ……その……イリヤに謝っておいてくれないか？
しばらく遊んでやれないって……」

辛そうに声を絞り出した切嗣を、アイリスフィールは優しく抱きしめた。

「大丈夫よ切嗣……イリヤはいい子だからちゃんと待っててくれるわ。
でも、私からもお願い。ちゃんと体を休めてね……」

その言葉と共に、切嗣は最愛の妻を抱き返す。
常に雪で閉ざされたこの地の城のなかで、その温もりは
何よりも心地よく感じられた……。

……第四次聖杯戦争まで……あと一月（ひとつき）……

## 登場人物・設定一覧（前書き）

設定っていいですね。
ちょっと主人公チート過ぎたかな……。

## 登場人物・設定一覧

シルバー・フォックス

身長：１８０ｃｍ

体重：７６ｋｇ

血液型：Ｂ

生年月日：３月１３日

趣味：鍛錬、文化遺産巡り

好きなもの：フライドポテト、酒（過去）

苦手なもの：極端、死ぬこと、煙草

略歴：主人公。元は一般的な日本人の青年だったが、交通事故により死亡する。
天使を名乗る存在によってＴＹＰＥ－ＭＯＯＮの世界へ転生。その際下手に死なないようＸ－ＭＥＮのウルヴァリンの肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）を貰い、新たにイギリスで生を受けた。転生先の名前はウルヴァリンの恋人の名であるシルバー・フォックス。
１０歳の時に故郷の村が死徒に襲われ、家族と友人を失い、彼自身も何とか逃げ延びるも当時死徒だったアマリアに襲われ吸血されてしまう。その際肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）が目覚め、吸血を跳ね除け、常に肉体が最良の状態を保つようになった。その後、彼の血により奇跡的に

死徒化が解けたアマリアに引き取られ、弟子として戦闘技術と魔術を受け継いだ。
アマリアいわく「血がいい匂いがする」らしく、非常に死徒に狙われやすかったため、襲ってくる死徒を返り討ちにし続ける毎日を送るようになり、アマリアの死後は、死徒との相性の良さからフリーのヴァンパイアハンターとなり多くの死徒を討伐し、聖堂教会やハンターからは衛宮切嗣のかつての異名をもじって『死徒殺し』と呼ばれるようになった。
ＴＹＰＥ－ＭＯＯＮの知識はＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔとＦａｔｅ／Ｚｅｒｏの設定をある程度覚えているだが、令呪が宿ったことで、四次の聖杯戦争で起きた冬木の大災害と聖杯そのものの異常を思い出し、調査と阻止を兼ねて聖杯戦争に参加。自身のサーヴァントであるキャスターが白兵戦が苦手なため、代わりに前衛を担当する。

容姿：外見は２１、２歳の青年。ハネ気味の黒髪を背中の半ばまでのばし、首の上でまとめている（四次のスーツ姿のセイバーの髪型と同じ）。目つきはやや鋭く、瞳の色は灰色。肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）で老化が止まっている。

性格：一度死んで人一倍死にたくなくなったが、アマリアに異端と関わることになることを指摘され、自分の納得できる死に方ができるよう、強くなることを目的の一つとしている。柔軟と冷静を好み、出来るだけ礼儀には礼儀で返す主義。ややお人好しでノリに流される部分もあり、苦手なのは話が通じない相手。前世では酒が好きだったが、肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）によって酔えなくなったため、飲まなくなった。ウルヴァリンと違って大の嫌煙家で、服は黒系を好む。

戦闘方法：総合的な戦闘力は、魔術の強化もあれば白兵戦で四次のセイバーやランサーとも渡り合えるほどで、特に反射神経や五感の

鋭さはサーヴァントをも上回り、銃弾の嵐もリアルタイムで見切って対応可能。当初の戦闘方法は肉体のスペックと両手首の爪を生かした格闘術だったが、十五歳のクリスマスにアダマンチウムの刀を天使（自称）から送られてからは、スピード特化の高速剣術に切り替えた。また、銃火器などの近代兵器についても一通り学んである（使用はしない）。

魔術については、自身の能力である『再生』が起源となっており、攻撃系の魔術は一切使えないが、治癒・修復などの支援系魔術の腕は最高クラス。肉体や物質の強化も得意。属性は『水』と『土』の二重属性。某人間ミサイルランチャーとは真逆の特化型である。魔術回路の数は十五本と少なめ（平均的な魔術師は二十本）だが、肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）により常に魔力が回復し続けるため、事実上再生が続く限り半永久的に魔術を行使することが出来る。

能力：肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）

ウルヴァリンの有名な能力。単に傷をふさぐだけでなく、魔力・体力・精神力をも回復し続け、副次効果として身体能力や感覚も大幅に強化するチート能力。手首の爪も健在。害となるものを身体から駆逐する効果もあり、毒、暗示、死徒化、果ては呪いの類も完全に無効化する。吸血種の再生能力とは違い、宝具や教会の武装でも回復を阻害することが出来ず、フォックスが酒を飲まなくなった原因でもある。とはいえ、さすがに首をはねられたら即死する。

武器：最硬剣（アダマン・ブレード）

天使（自称）が送ってきたアダマンチウム製の刀。破壊不可能の金属で出来ているため、宝具と打ち合っても刃こぼれ一つしない強力な概念武装。柄の部分に聖印が刻まれているため、カマイタチを含めた全ての攻撃に聖性がつき、吸血種などには非常に有効。唯一の弱点は超高熱で溶かされることだが、フォックスがかけた術式により熱を吸収するよう改良されている。

アマリア・アルヌール
フォックスの女師匠。フランス人。元は協会の魔術師だったが、ある日故郷が死徒によって滅ぼされたのを機に協会を脱退。以後はフリーランスで死徒狩りに明け暮れていたが、ある死徒を倒して消耗した隙を別の死徒に突かれ吸血され、死徒となってしまう。その数日後、フォックスの血の匂いに惹かれ、思わず見つけた彼の血を吸ってしまうが、肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）の効果で死徒としての自分を破壊され、奇跡的に人間に戻った。強制的に死徒化が解けた衝撃で肉体にダメージを負ったため、償いも兼ねて死ぬまでにフォックスに自身の技術と魔術の秘伝を伝えることを決意。その後十年の歳月をかけてフォックスを鍛え上げ、さらに一年後息をひきとった。享年３８歳。フォックスが転生者であることを明かした唯一の人間でもある。封印指定ではないが基本に忠実で、その分無駄のない強力な魔術の使い手だった。ちなみに愛煙家で、酒は嫌いだった。

ジョン
フォックスとは十年近い付き合いがある情報屋。アマリアがフリーランス時代に世話になっていた情報屋で、彼女の紹介で知り合った。よく名前を変えて活動しているため、覚えるのが大変。ちなみに、一つ前の名前はニック。
令呪が宿ったフォックスの依頼を受け、今回の聖杯戦争の他のマスターの情報などを調べていた。

## 第三話　準備と召喚にて（前書き）

三話です。
龍之介と青髭の旦那は出ません……ごめんなさい。

## 第三話　準備と召喚にて

シルバー・フォックスがこの世界がＴＹＰＥ－ＭＯＯＮの世界だと知ったのは、故郷の村を死徒に襲われてからだった。

自分に戦いと魔術を教えてくれたアマリアに世界を聞かされる内にそのことに気づき、彼女に自分の正体を明かしたのはそれから一週間後だった。

幸いなことにアマリアはそんな自分を笑って受け入れてくれたし、同時にその事実の危険性も言い聞かせてくれた。

前世のＴＹＰＥ－ＭＯＯＮ知識で覚えていたのは、Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔとＦａｔｅ／Ｚｅｒｏのおおまかな設定と流れ程度だったので、アマリアの下で修練に打ち込み、ハンターとして死徒と戦ってきた自分には、いつしかそれらの知識はほとんど無用の長物となっていた。

そんなフォックスにとって転換期となったのが八ヶ月前……突如右手に”令呪”が宿った時だった。

それからとにかく悩んだ。ひとまず情報は集めておくべきと、ジョンに”今回の聖杯戦争”に付いて調べてもらいながら、一週間程このコロシアイをどうするか考え続けた。

……結論は参加に決まった。一週間の内に今回が何度目の戦いなのか調べがつき、Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏで起きた悲劇も…聖杯の正体も思い出した。自身という異物（イレギュラー）が混じった以上、原作知識がどの程度役に立つかは不明だったが……それでも、あの凄惨な結末を……あ

の聖杯による地獄が前世の故国で起きることを見過ごす道理もない。何よりこうしてマスターの資格を得た以上、もう無関係ではないのだ。

こうして聖杯戦争への参加を決意したフォックスだったが、早速最初の難問にぶち当たった。

まず問題だったのが準備期間の短さ。そもそも令呪が宿るまで、聖杯戦争の存在自体忘れていたため、アインツベルンなど何年も前から参加が決定していた他のマスターに比べると、情報を集める作業だけでも時間がかかった。

結果として召還に用いる英霊の触媒は用意できなかったが、戦いの方針は決まったため、次は戦いの舞台となる冬木での拠点確保に移ったが、ここでも問題が起きた。冬木中を見張っていたアサシンの存在である。

詳しくは覚えていなかったが、たしか今回のアサシンはスキルか宝具の力で何十体にも分裂する能力を持ち、その特性で常に情報収集を行なっていたということを思い出したのだ。

そのことは冬木の調査中に、気づかれぬようアサシンの一体を罠にはめ、姿を確認したことで証明されたが、これはかえって戦いの準備の足かせになった。

なまじアサシンの存在を知っていただけに、冬木での準備作業では必要以上に神経を使うハメになり、
霊脈の調査さえ遅れることになったのだ。

……それでもギリギリで準備はできた。そして今夜、サーヴァント

を召喚する……。

――――――――――――――――――――――――――――――

冬木に人知れず存在するとある寂れた神社。

半ば地元民からも忘れられたこの場所は、一級とまでは行かなくとも十分な霊脈が存在する、フォックスが召還のために見つけた隠れ重霊地だった。

触媒は使わない……。用意する時間が無かったのもあるが、聖杯を手に入れる気がない以上、下手に無理して願望のある英霊を召喚するよりも、降霊の儀式そのものに全力を注いで、自身と相性のいい英霊を呼び出す方を選んだのだ。

そのために、呼び出すための魔法陣は全て自分の血で描いた。使われた血は、普通の人間なら失血死するほどの量だが、肉体再生能力(ヒーリング・ファクター)のおかげで身体にはなんの影響もない。また、自身の魔力を最大限込めた血で描かれたこの魔法陣は、呼び出すサーヴァントの力の底上げにも役立つはずだ。

「告げる――」

周囲に厳かな空気が満ち、召還の詠唱が紡がれる。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ―」

体内の十五本の魔術回路をフルスロットルで稼働させ、詠唱を続ける。

触媒を使わない以上、自身と相性のいい英霊が出てくることは決まっている。

……ならば自分に出来ることは、他のマスターには真似できない……この再生し続ける肉体を酷使して、出てくる英霊の力を上げることだけだ。

「―誓いを此処(ここ)に。我は常世総(とこよ)ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷(し)く者―」

全身の神経が悲鳴を上げる。
通常の魔術師なら自殺行為……体内の魔術回路を断裂させる程に動かし、破壊された回路を肉体再生能力(ヒーリング・ファクター)が片っ端から修復し続ける。

「――汝三大の言霊(ことだま)を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り

手よ――！！」

詠唱の終わりと共に眩い光と風圧が辺りに叩きつけられた――

……手応えあり！！

儀式は成功した……。

虚勢でも負け惜しみでもない……。それは何年も掛けて積み上げてきた魔術師としての経験が自身にもたらした、まぎれもない”確信”だった。

そして光が収まると共に”それ”は姿を現す。

共にこの戦いを生き抜く（パートナー）サーヴァントが……。

「暫（しばら）く、暫（しばら）くぅ〜〜〜！！」

……は？

「謂われはなくとも即参上！？
サーヴァント『キャスター』。軒猿陵墓（けんえんりょうぼ）から、良妻狐のデリバリーにやってきました～！！
え～と、あなたが私のご主人（マスター）様でいいんですよね？」

……マズイ！？何か間違えたかも！？

## サーヴァント・設定一覧（ネタバレ含む）（前書き）

サーヴァントステータスです。
何度か随時更新していきます。

## サーヴァント・設定一覧（ネタバレ含む）

【ＣＬＡＳＳ】キャスター

【マスター】シルバー・フォックス

【真名】玉藻の前

【性別】女性

【身長・体重】不明

【属性】不明

【ステータス】筋力Ｄ　耐久Ｄ　敏捷Ｂ　魔力Ａ＋＋　幸運Ｂ　宝具ＥＸ

【クラス別スキル】

陣地作成：Ｂ
魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。
“工房”の作成が可能。
故郷に召喚されたため、ランクが上がっている。
ただし、性格的に向いていないらしい。

道具作成：Ｂ
魔力を帯びた器具を作成できる。

【保有スキル】

呪術：ＥＸ
ダキニ天法。地位や財産を得る法（男性用）、権力者の寵愛を得る法（女性用）といった権力を得る秘術や、死期を悟る法がある。
ただし、キャスターの場合は過去に懲りたのか、あまり使いたがらない。

変化：Ａ
変身が可能。また、玉藻の前と同一視される中国の千年狐狸精の使用した借体成形も出来る。
ただし、キャスターの場合は過去に懲りたのか、あまり使いたがらない。

信仰：Ａ
故国に召喚された恩恵。神の特権として、信仰に縁のある土地の霊脈や氏神を優先的に使役できる。
アマテラスの一人格であるキャスターの信仰は最高クラス。

【宝具】
『水天日光天照八野鎮石（すいてんにっこうあまてらすやのしずいし）』
ランク：ＥＸ　種別：対軍宝具　レンジ：１～９９　最大補足：１０００人
神宝「玉藻鎮石（たまもしずいし）」。
アマテラスの神体であり八咫鏡（やたのかがみ）の原型としての能力を一時的に開放し、対象の魂と生命力を活性化させることが出来る。　本来は大軍のサポートに使うのが正しいやり方。
本来なら死者さえも蘇らせる冥界の大神宝だが、サーヴァント化している彼女では、そこまでの権限は持てない。　ただし、令呪などの強力なバックアップがあればその限りではない。

略歴：みんな大好きキャス狐。詳細は「Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ」を参照。真名はかの鳥羽上皇に仕えた日本三大化生の一人「玉藻（たまも）の前」だが、実際は人間に興味を持ち、アマテラスから分かれた御魂のひとつ。本来神霊であるところを英霊として召喚されたため、かなり弱体化しているが、故郷である日本に召還されたため「ＥＸＴＲＡ」の時に比べてパワーアップしている。マスターであるフォックスとの相性の良さ（フォックス＝狐、膨大な魔力供給）もあり、本気を出せばかなりの力を出せるが、彼女自身は過去のトラウマから力の行使を嫌っている。天敵はセイバーとランサー。故郷の国に召還されたからかテンションも上がり気味で、ご主人様絶対主義も健在。フォックスのことは『ご主人様』と書いて『マスター』と呼ぶ（たまにそのまんま『ご主人様』とも呼ぶ）。「ＥＸＴＲＡ」同様『幸せな良妻狐』を目指して頑張る。

## 第四話　これからのことと緒戦にて（前書き）

四話です！
この小説のキャス狐ですが、日本に召喚されて機嫌がいいので毒のある部分は割となりを潜めてます。小物や気に入らない相手には容赦ないようですが……

## 第四話　これからのことと緒戦にて

Ｓｉｄｅ．フォックス

……沈黙。
この場における状況を説明するのなら、まずこの言葉より適したモノはないだろう。

「え～っと……あなたが私のご主人様（マスター）なんです……よね？ちゃんとパスもつながってますし……あの？」

目の前のエキゾチックな格好のナニか（サーヴァント）の言葉でハッと我に帰る。
……どうやらあまりに予想の斜め上をいく展開にショックを受けていたらしい。

「その……君が俺のサーヴァント……でいいのかな？」

「はい！サーヴァント『キャスター』。軒猿陵墓から、良妻狐のデリバリーにやってまいりました！！」

そう言って目の前のキツネ耳＋尻尾の少女は、まるで花のように素敵に笑った。
これが平時なら思わずドキッとしそうなものだが、今は混乱で頭がまわらない……。というかリョウサイギツネ？デリバリー？

「ここに契約は成立しました！　よろしくお願いしますねご主人様（マスター）。
何を隠そうこのタ――いえ、このワタクシ、ご主人様のような人のサーヴァントになりたいってずっと思っていたのです！　ああ、し

かもこうして故郷に呼び出してくれるなんて！？今回は本気でアタリみたいですね～ウフフフ……」

どんどん一人でハイテンションになっていく自身のサーヴァントの様子に唖然とするが、今聞捨てならない単語が出なかったか？”故郷”……？

改めて目の前のサーヴァントを見る。まず印象的なのは、頭部にある明らかにヒトの器官の”ソレ”とは別のモノだろうキツネ耳。時々ピコピコと動いているから、おそらく本物だろう。……というか飾りであんなモノ着ける英霊なんていないハズ……そう信じたい。

次に印象的なのは、前から見てもその存在を確認できる、彼女の腰部から生えた一本の巨大な尻尾。頭のキツネ耳同様、こちらもしっかりと生物的に動いている。……ということは、このサーヴァントの正体は、狐の化身か何かだろうか……。

そして彼女の服装。

一応紺を基調とした和服……のように見えるが、主に胸元や腰辺りの露出度がかなり高い。……正直目のやり場に困る。一方髪の色は綺麗なピンク色で、日本人には見えない。

だがこのコスプレイヤーのような格好の少女から感じられる濃密な魔力は、明らかに人のものではない……。それこそ比べるのが失礼なほどの圧倒的な密度……。

これが———英霊！？

「あ、あの～ご主人様？　そんなに見つめられたら……さすがに私も恥ずかしいです……」

目の前でもじもじと身をよじるサーヴァントの言葉に再び我に帰る。

そうだ！召喚に成功した以上、次にやるべきことは決まっている、まずは……。

「自己紹介が遅れてすまなかった。いかにも、俺が君のマスター、シルバー・フォックスだ。今回の聖杯戦争、共によろしく頼むキャスター」

自己紹介の挨拶。これから共に戦っていくのだから、できるだけの礼儀と気持ちを込めて言う。

「こちらこそよろしくお願いしますご主人様。不肖このキャスター、ひとたびこの身を捧げたのなら、六道輪廻の果ての果て、主の魂魄が尽きるまで精一杯仕えさせていただきます。」

先程までのノリの軽さとは似ても似つかない、真面目な忠誠の言葉に少し面食らう。その動作もまるで流れるような美しさを伴っていた。

「身に余る忠誠の言葉……嬉しいよキャスター。とりあえず用意した拠点に移ろう。今の召喚の魔力を他のマスターが嗅ぎつけるかもしれない、ついてきてくれ」

「わかりました！　ご主人様！」

嬉しそうに付き従う自らのサーヴァントと共に、拠点のひとつに向

かう。…ひとまず落ち着いた場所で情報交換もしたいからな。

……まあ、上手くやっていくことは出来そうだ……多分。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

冬木市新都の東側にある、とあるアパート――――――

近代都市開発の波に乗って建てられたこの大型のアパートは、まだ築二年にも達していない。今回フォックスは、次々とここに入居してくる人々の流れに混じって、その一室を冬木における本拠とは別に用意した、いくつかのアジトの一つとして借り受けていた。戻ったフォックスは、キャスターと詳しい自己紹介と能力の確認を終えると、自身の”事情”と今回の聖杯戦争の知識を明かした。

「……と、いうわけでな。これが俺の前世の記憶で覚えている、第四次聖杯戦争の全てだ」

「……」

リビングで互いに向かい合う主従一組。

重苦しい空気の中で話を聞き終えたキャスターは驚愕と混乱に言葉

を失っていた。

……転生者という事実、創作物として描かれた世界、自分たちを呼び出した聖杯の異常とそれによって起きた災厄。どれも真実だとしたら危険すぎることばかりだった。

「もちろん俺の知識とこの世界という”現実”は別のものだ……。俺という異物がまぎれている時点でな。だから聖杯の汚染の話も、違うものであればよかったんだが……どうやら前世の記憶通りらしい……」

フォックスは令呪が宿ってから、戦いの準備と共に前回の聖杯戦争のことも調べた。前世の記憶から聖杯の汚染が、第三次でアインツベルンが呼び出した反英雄のサーヴァントが原因であることは覚えていたためだが、結果は記憶の通り。調査と共に、他のマスターも原作知識通りであることも判明し、十中八九放っておけば冬木の大災害が再現される可能性が出てきたのだ。

「もちろん聖杯が汚染されているのをこの目で見たわけじゃない。だから俺はこの戦いを通じて調査を進めて、確証をつかむ。その上で聖杯を破壊して、この戦争を解体するつもりだ。だからキャスター……俺に協力して欲しい」

「……事情はわかりましたご主人様（マスター）、もちろん協力させていただきます。私の願いは良妻としてご主人様（マスター）に仕えることだけですからね。

でも危なかったですね～、たまたま私が聖杯に願うことがなかったから良かったようなものの、他のサーヴァントだったら反旗を翻しましたよきっと」

それについてはフォックスも同意である。
聖杯戦争で呼び出されるサーヴァントの多くは聖杯への願いがある。第五次と四次のランサーのように願いがない例外もいるが、それらは少数派だ。触媒を使わず、相性のいい英霊を狙って召喚したのはどうやら間違いではなかったらしい。

……最も後で聞いたところ、召喚したあの神社そのものが彼女の触媒…とまではいかなくとも、キッカケになるぐらいの効力を発揮したらしいが。

「よろしく頼むよキャスター。大体の指針は決まっているけど、正直キミの能力の高さを考えると、予定よりも容易に計画を進められそうだ」

そう…フォックスにとって、呼び出したこの魔術師の英霊の能力(チカラ)は、いい意味で誤算だった。

彼女の真名は「玉藻(たまも)の前」。有名な日本三代化生の白面金毛(はくめんこんもう)九尾の狐である。本来は妖怪ではなく、天照大神から分かれた文字通り『神』の眷属であるらしいが、その彼女をサーヴァントとして呼び出せた事実はかなりのイレギュラーだった。

最初キャスターの正体を聞いたとき、フォックスは僅かに不安を感じた。なにしろ第三次聖杯戦争でアインツベルンが神霊クラスの霊を無理やりサーヴァントとして呼び出そうとして失敗し、真っ先にぶち殺されたという事実があったのだから慌てるのも無理はない。

だが、目の前のサーヴァントには、そんな心配は杞憂で終わりそうだった。もちろん彼女とて本来英霊ではないところをサーヴァントとして召喚されたためかなり弱体化してはいる。尻尾も一本だけだ。

これが神霊や悪霊の類で呼び出されたならさぞかし強力だっただろうが、彼に不満はない。

なにしろ弱体化を差し引いてもキャスターのスペックはかなりのものだ。さすがに肉弾戦のパラメータは低いが、そこはキャスターのクラスなのだから仕方ない。だが最も重要な魔力、スキル、宝具の力はキャスターのクラスとして見ても極めて高いものだった。

加えて注目すべき点は、彼女が日本の英霊であるところである。

本来冬木の聖杯が呼び出せるのは西洋の英霊のみ。もちろん第五次のアーチャーや侍アサシンのように日本出身の無銘の英霊が呼び出されるような例外がないこともないのだが、キャスターの場合は『知名度』という点から見ると、この二人とは意味合いが大きく違ってくる。

サーヴァントには”知名度補正”というものがあり、召喚された土地で高い知名度をもつサーヴァントには、能力が増大したり、スキルや宝具が追加されるといった恩恵があるのだ。

そしてキャスターの正体は、日本人なら知らぬものなどまずいないであろう”九尾の狐”（実際は違うらしいが）。

加えて日本でも有名な天照大神の一柱である彼女は、おそらく今回のサーヴァントの中で最も力を発揮できるだろう。

これなら大幅な計画の前倒しが可能だろうと内心喜びながら、フォックスはキャスターにこれからの動きを話し始めた……。

えっ、何？早速千年後の日本料理を食べさせてくれ？
仕方がない、たしか『赤いきつね』が台所にあったな……。うん、きっと喜ぶだろう。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

冬木の海浜公園の西側に隣接する倉庫街。
夜になり完全に人気がなくなった区画の大通りの真ん中で、その男は待っていた。長身にクセのある髪をオールバックにした美貌の顔立ち。その両手には、呪符で巻かれた二本の槍が握られていた。さらに男から発せられる膨大な魔力は、明らかに人のものではない。
その男に近づく二人の人影。片や輝く銀髪に見事な赤の瞳を持つ美貌の白人女性、そしてもう一人は漆黒のダークスーツに身を包んだ、金髪碧眼の清純な美少年のような雰囲気を醸し出す少女。……アイリスフィール・フォン・アインツベルンと、彼女の夫…衛宮切嗣のサーヴァント「セイバー」だった。
手持ち無沙汰に”獲物”が来るのを待ち続けていた男は「ようやく

か……」と呟くと、二人に視線を向ける。

「よくぞ来た。今日一日、この街を練り歩いて過ごしたものの、どいつもこいつも穴熊を決め込む腰抜けばかり。……俺の誘いに応じた猛者(もさ)は、お前だけだ」

そう低く朗らかな声で讃える男――――ランサーのサーヴァントは、あくまで自然体で目の前のサーヴァントに問う。

「その清澄な闘気……セイバーとお見受けしたが、如何に？」

「その通り。そういうお前はランサーに相違ないな？」

涼やかで…それでいて意思の強い声でセイバーも問い返す。

「いかにも。――フン、これより死合おうという相手と尋常に名乗りを交わすこともままならぬとは。興の乗らぬ縛りがあったものだ」

その言葉にセイバーも僅かに表情を弛緩させる。どうやら同意見らしい。

「是非もあるまい。もとより我等自身の栄誉を競う戦いではない。お前とて、この時代の主のためにその槍を捧げたのであろう？」

「ふむ、違いない」

苦笑するランサー。これから殺し合いをするとは思えない空気だ。

「我が主に勝利を捧げるべく、こうして好敵手が来るのを待っていたが、招きに応じたのが最優と名高き剣の英霊とは僥倖だった」

「ほう、尋常な勝負を所望であったか。誇り高い英霊と相見えたのは私にとっても幸いだ」

お互いに笑みを浮かべ、戦闘態勢に入る。

ランサーは手に持つ二槍を鳥が翼を広げるように構え、セイバーもダークスーツから愛用の白銀の鎧へと早変わりする。その手には不可視の魔力の風で包まれた、古今東西最も有名な聖剣が握られていた。

「それでは――――いざ」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「うわあああぁぁぁ～～～っ！！！」

（どうしてこうなったのか……）

未遠川を跨ぐ冬木大橋のアーチ。

地上５０ｍに達するこの場所は、セイバーとランサーの決闘を見守れる好位置のひとつであり、さっきからフォックスは、ここで悶々と頭を悩ませていた。

原因……というか事の起こりは数分前。ランサーの挑発に気付き、キャスターと共にこうして二人の騎士の戦いを見守っていたのだが、そこに突如として空から戦車を駆るライダーが、豪快に雷電をまき

散らしながら己がマスターと共に戦いの見物に現れたのだ。

もちろん居合わせたのは単なる偶然で、会った直後には「我が名は征服王イスカンダル！！」→「何考えてんだこの馬鹿サーヴァント！？」→デコピン→「余の配下となれ！」というようなやりとりがあったのだが、今では全員（強風に煽られ、必死にアーチの鉄骨にしがみつくウェイバー除く）でセイバーとランサーの武舞を見物していた。

キャスターは配下となる話は断ったものの、それなりに馬はあったようで、今では普通にライダーと決闘に対する意見を交わしたり、途中コンビニで買った稲荷寿司をつまみとして分けたりしている。まあフォックスにしても、ライダーは原作で一番好きな漢気あふれるキャラなので、キャスターが仲良くやれてるのは嬉しかった。……のだが

「さ、寒い！　高い！？　死ぬ！　死んじゃう！？」

「おいライダー、アンタのマスターがピンチだぞ。というかさすがにこの高さと強風は彼にはキツイだろう？」

「心配無用だキャスターのマスターよ。我がマスターは余と共に戦場を駆ける勇者なのだからな、これくらいどうってことないわい！」

ガハハハと持ってきたワインを飲みながら大笑するライダー。まあ、仮にも自分のマスターだし、いざとなったらさすがに助けるだろう……多分。

そしてフォックスもセイバーとランサーの戦いに目を向ける。

それはまさに神話の再現。二人が動くたびに、打ち合うたびに局地

的な台風と地震が巻き起こり、周囲に凄まじい爪痕を残していく。
文献でしか知らないサーヴァント同士の決闘。その中でも白兵戦に特化した剣と槍の英霊の戦いは、生で見るとよりその凄まじさを感じさせられた。

「む！　見ろ皆の衆。どうやらランサーが宝具を開放するようだぞ」

ライダーの言葉で全員（ウェイバー除く）が槍兵に目を向ける。
成程、ランサーの持っている二槍の内長槍の方の呪符が外された。

……どうやら勝負に出るようだ。

## 第五話　王と騎士の戦いにて（前書き）

今回は主人公勢出ません。
原作の重要な部分なので、外せませんよね。

## 第五話　王と騎士の戦いにて

戦闘開始から数分……既に倉庫街は見るも無残な惨状と成り果てていた。
サーヴァント……文字通り神話級の規格外である彼らの戦いは、戦闘の余波だけでも圧倒的な奔流となって周囲に爪痕を刻んでいくのだ。

だが、当の本人たちには周りへの被害など構う余裕はない。セイバーは、槍は両手で一本を扱うという大原則を覆して、軽々と両の手で二槍を操るランサーの腕前に苦戦し、ランサーは不可視の剣という、自身の宝具の力と比べても、何とも面倒なセイバーの武器とその力量に攻めあぐねていた。

しかし二人の顔に苦渋はない。あるのは、これほどの強敵に巡り合えた事への喜びだけだ。

「名乗りもないままの戦いに名誉も糞もあるまいが――――」

一旦距離を取り、涼し気な表情でランサーは賛辞を送る。

「ともかく、賞賛を受け取れセイバー。ここにいたって汗一つかかんとは、女だてらに見上げた奴だ」

「無用な謙遜だぞ、ランサー。貴殿の名を知らぬとはいえ、その槍捌きをもってその賛辞……私には誉だ。ありがたく頂戴しよう」

本来セイバーもランサーも、ただ戦いのために招かれた使い魔でしかない。だが、時空を超えた二人の騎士の心には、お互いの素性は

知れずともたしかに通じ合うものが生まれていた。
最早相手にとって不足なしと互いに武器を掲げ合う。
『戯合いはそこまでだ。ランサー』
静寂な空気に突如として冷淡な声が響き渡る。
「ランサーの……マスター！？」
驚きと共にアイリスフィールが周囲を見渡すが、他に人影は見当たらない。声も魔術によって偽装が施されているらしく、男か女か、そもそもどこから聞こえるのかさえ判別できない。
『これ以上勝負を長引かせるな。そこのセイバーは難敵だ。速やかに始末しろ。――――宝具の開帳を許す』
「了解した。我が主よ」
マスターへの返答と共に急激に殺気を研ぎ澄ませるランサー。
そしてそれまでの構えを改めると、何とランサーは左手の短槍を”放り捨てた”。
その行動に驚きつつも、セイバーは右手の長槍がランサーの宝具かと凝視する。
果たしてその予想は正しく、長槍に巻かれた呪符が剥がれてゆく。
現れたのは、穂先から柄まで朱色（あけいろ）に染められた深紅の槍だった。その穂先からは、先ほどとは比べ物にならない……視覚からも確認できるほどの禍々しい魔力が揺らめいている。

「――――そういうわけだ。ここからは殺(と)りに行かせてもらう」

そう低く呟くと、ランサーは先程までの鳥のような独特の構えとは違う……セイバーにも見慣れた両手での槍の構えを取った。同時にセイバーも構えを改め、先程以上にランサーの動きと槍に注意を向ける。果たしてあの槍の、宝具としての効果はどんなものか……。

宝具の効果の発揮の仕方は大きく分けて二つ。セイバーの持つ約束(エクスカリバー)された勝利の剣のように真名開放と共に爆発的な威力を発揮するタイプ。

そしてもう一つは、武器自体に宝具としての能力が付加されたタイプ。それは一撃必殺としての威力には欠けるが、常に効果を発揮し続けることによって戦闘を優位に進めることができる。セイバーの宝剣を覆う風王結界(インビジブル・エア)が正にそれだ。

そしてセイバーの見立てでは、ランサーのあの槍はおそらく後者。次で決めるという気迫が感じられない以上、引き続き戦闘を続行してこちらを仕留める腹づもりだろう。

先に仕掛けたのは……やはりランサーだ。

二槍の時とは違う、正道の槍術にのっとった突き。いっそ愚直なまでのその突進をセイバーは苦もなくいなす。……が、異常が起きたのはその時だった。

「な！？」

驚愕の声を上げたのはセイバー。それもそのはず、何と槍の穂先が剣に触れた瞬間、纏っていた風が剥がされ、宝剣の姿があらわにな

ったのだ。

「晒したな。秘蔵の剣を」

「……」

ニヤリと笑うランサーと解せないと沈黙するセイバー。一体今の攻防で何が起きた？

「刃渡りも確かに見て取った。これでもう、見えぬ間合いに惑わされることもない」

宣言と共にランサーは、先程とは比べ物にならない勢いで次々と突きを繰り出す。それは一つ一つが最速の英霊の名に恥じぬ速さと鋭さを持っていた。

セイバーも自らの得物で槍を捌くが、徐々にその表情に焦りが浮かんでくる。理由は不明だが、あの深紅の槍と打ち合うたびに風王結界（インビジブルエア）が乱れ、自身の剣の姿が暴かれていくのだ。

だが、この程度でひるむことはない。今敵が使っているのは見慣れた順当な槍術。応じようはいくらでもあるし、何よりセイバーは気付いている。ランサーの突きの嵐の中に、比較的浅いものが混じっていることを。

これならば自身の鎧で十分防げると判断しながら、遂にセイバーは、袈裟懸けにカウンターの一撃を繰り出す。

――――次の瞬間血飛沫が舞った。

ダメージを負ったのはセイバーだった。咄嗟に類い稀な”直感”が叫んだ警鐘に従い、身を捻ったがそれで正解だった。ランサーの槍は、セイバーの鎧の防御をまるで無いかのように貫いたのだ。

ゴロゴロと地面を転がりながら距離を取り、立ち上がるとすぐさま構えを取る。その脇腹には、浅いが槍に抉られた傷が血を滴らせていた。

「セイバー！」

アイリスフィールは負傷を判断すると、すぐさまセイバーに治癒魔術をかける。

「――――ありがとうございますアイリスフィール。大丈夫、治癒は効いています」

そう言いながらもセイバーは脇腹を抑える。どうやら痛み自体はまだ残っているようだ。

「やはり、易々と勝ちを獲らせてはくれんか……」

そう言いながらも、獲物を仕留め損ねたランサーの顔に苦渋の色はない。むしろ良くよけたと喜悦の表情を浮かべている。

そして、咄嗟に『直感』のスキルで致命傷を避けたセイバーは、ひ

とつの答えにたどり着いていた。

……あの赤い槍の能力は、おそらく「魔力の破壊」。

それならば、先程風王結界（インビジブル・エア）を無効化されたことも、自身の鎧が苦もなく貫かれたのも、納得がいく。どちらも魔力で編まれた存在である以上、魔力を打ち消す武器とあたれば、一方的に負けるのが道理だ。

どうやら打ち消すことが出来るのは穂先に触れたその瞬間に限定されるようだが、それでもかなり厄介な能力だ。

サーヴァントの戦いに魔力無しでの戦いというのはありえない。個々の魔力量が戦闘に重大な影響をもたらす聖杯戦争では、極めて有用性の高い宝具だろう。特に魔術師のクラスには天敵と言える能力だ。

だが、敵の脅威に対するセイバーの判断は一瞬だった。すぐに纏っていた鎧を散らす。

その行動にランサーもアイリスフィールも怪訝な表情を見せるが、セイバーの取った構えで即座に理解が及ぶ。

「防ぎ得ぬ槍ならば、防ぐより先に斬るまでのこと。覚悟してもらおう。ランサー」

鎧を外した軽装の姿でセイバーの取った構えは低く下段……剣も後ろに下げた一撃必殺の構え。

捨て身とも言い換えれるその姿に、全員がセイバーが次で決めるこ

とを確信する。

ランサーの槍の前では魔力の鎧など無力。……ならば鎧を編む分の全魔力を、自身のスキルのひとつ『魔力放出』による身体強化に転換したほうがいいというのがセイバーの判断だった。

「その勇敢さ。潔い決断。決して嫌いではないが……この場に限って言わせてもらえば、それは失策だったぞ。セイバー」

「さてどうだか。諫言は、次の打ち込みを受けてからにしてもらおうか」

ランサーの挑発に不敵に返すセイバー。

互いに必殺を確信したその瞬間、僅かに足の運びが鈍ったランサーにセイバーが猛烈に仕掛けた。

『魔力放出』によって、弾丸のように迫るセイバーに対してランサーが行ったのは……“足”だった。

咄嗟に蹴り上げられる一本の棒……。それは先程ランサーが放り捨てた短槍だった。いつの間にか呪符が解かれ、黄色い地金を曝け出していた“それ”は、既に停止不可能な速度に達したセイバーの喉元に、その切っ先を向けていた。

――――――――――――――――

再び舞う血飛沫……。

互いに傷を負った両者は再び距離をとると、自身の状態を確認する。

あの瞬間セイバーは、何とか身を捻って串刺しは避けたものの、完全には回避しきれず、左腕に短槍による傷を負った。

そしてランサーも、セイバーが態勢を崩したことによって必殺とまではいかなくとも、左腕に宝剣による一撃を受けた。

両者共に浅い一撃。戦闘続行に支障はない。

そしてランサーの傷は、巻き戻しの如く高速で塞がっていく。未だに姿を見せない……彼のマスターが治癒を施したのだろう。その顔には壮絶な笑みが浮かんでいる。

対照的にセイバーの表情は苦い。アイリスフィールがいくら治癒魔術をかけても左腕の傷が治らないのだ。

「我が『破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）』を前にして、鎧が無為だと悟ったまでは良かったな。が、鎧を捨てたのは早計だった。そうでなければ『必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇』は防げたものを」

最早隠すこともないとランサーは堂々と宝具の真名を明かす。そして次に見せた構えは、戦闘の開始時と同じ……彼が生涯をかけて修得した我流の二槍流の構えだった。

魔力を打ち消す赤の槍と決して癒さぬ傷を負わせる黄槍。ここまでくれば断定は容易い。セイバーのアーサー王伝説とも関わりがある、ケルト神話に綴られるその英雄の名は……。

「成る程、もっと早くに気付くべきだった……。フィオナ騎士団、随一の戦士……“輝く貌”のディルムッド・オディナ。まさか手合わせの栄に与るとは思いませんでした」

「何、誉れ高いのは俺の方だ、セイバー。かの名高き騎士王と鍔競り合って、一矢報いるまでに至ったとは――フフン、どうやらこの俺も捨てたものではないらしい」

真名を知られてもランサーの表情は清々しいものだった。お互いの名が分かった今、ようやく騎士として尋常な勝負が始めることができる。

だが対照的にセイバーは内心で歯噛みせざるを得なかった。左に受けた治癒不可能の傷……それほど深くはないが、おそらく腱をやられたのだろう、左手の親指が全く動かない。

これでは彼女の最大の切り札である約束（エクスカリバー）された勝利の剣を放てない。両手で満足に剣を握られなければ、発動の反動に耐え切れないからだ。

”ただの一刺が、高くついた……”

だが、セイバーの闘志には微塵の揺るぎもない。むしろ緒戦でこれだけの強敵と対峙したことで、益々の昂りを見せている。

そしてその思いは、ランサーにもしっかりと伝わっていた。セイバー同様、生粋の騎士であるランサーも、この状況でなお全く戦意の衰えないセイバーに畏敬と歓喜を感じているのだ。

「覚悟しろセイバー。次こそは獲る」

「それは私に獲られなかった時の話だぞ。ランサー」

互いに壮絶な笑みを浮かべ、間合いを詰める。機を伺い合うことで生まれた静寂は、冷たく緊迫した空気を作り出していた――――が、突如としてそこに雷鳴が響く。

何事か、と二人が振り向いた先に”それ”はいた。

形だけで言うなら、それは”戦車”だった。二頭の逞しくも美しい牡牛に牽かれた戦車（チャリオット）が、紫電をスパークさせながら空を駆ってくる。蹄と車輪が空中を蹴るたびに大気が震える……。これほどの圧力は、宝具以外にありえない。

そして雷電を纏った戦車は、セイバーとランサーの間に降り立った。ちょうど、二人が対峙する距離の中間地点である。着地と同時に雷が収まり、御者台に乗る巨漢の姿があらわになった。

「双方、武器を収めよ。王の御前である！」

突如響く大音量。戦車を駆っていたのだろうその男から発せられた声は物理的な圧力をも伴い、周囲に響き渡る。だがセイバーもランサーも名にし負う兵（つわもの）、この程度で怯みはしない。二人とも油断なく自身の前に降り立った偉丈夫を見据える。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した」

……瞬間、再び空気が静寂に満ちた。

## 第六話　集結する緒戦にて（前書き）

金ぴかと黒騎士登場です。中々主人公たちを活躍させられません（汗）。次話ではちゃんと戦うのでよろしくお願いします。

## 第六話　集結する緒戦にて

フォックスは闇夜を駆けていた。肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）と身体強化魔術（フィジカル・エンチャント）による相乗効果で強化された肉体で、次々と建物の間を車が平地を走るのと何ら変わらない速度で駆け抜ける。目的地はセイバーとランサーのいる倉庫街だ。

あの時、突如ライダーは「こりゃいかん！　このままではどちらかが脱落してしまう！！　すまんが先に行ってるぞ！」と叫ぶと、一瞬で最早涙目となっていたウェイバーを戦車に乗せてさっさと決闘の場に向かってしまった。おそらく原作通りに二人の勧誘を行うのだろう。そして彼も自身のサーヴァントを背中に背負い、戦場へと向かっていた。

「もぉ～、征服王もせっかちですね。せっかくだから私たちも乗せて欲しかったです。あ、でも今こうしてご主人様（マスター）におぶってもらってますし、どっこいどっこいかな～」

「まぁ、次にあった時に頼めばいいさ。あとキャスター、首によだれを垂らすのはやめてくれ」

「は！？　すみません。つい至福の状況に酔ってしまいました！」

「着くまでには醒ましておいてくれよ。っと！　そろそろだな」

マスターの言葉にキャスターは意識を研ぎ澄ませた。成程、ここまで来るとサーヴァントの魔力の気配がより強く感じられる。それを確認すると、キャスターも背中から降りて、全力でフォックスに合わせて併走を始める。

そして着いた先では、勧誘が失敗し心底残念そうにするライダーと、再び真名を明かした自らのサーヴァントを必死に責めるウェイバーという、平時なら何とも和む光景があった。そして到着と同時に三人のサーヴァントの意識がフォックスとキャスターに向けられる。

「おうキャスターとそのマスターか、遅かったではないか」

「アンタと違ってこっちは徒歩だから仕方ないだろう。しかし、その分だとやっぱり交渉は上手くいかなかったみたいだな」

「ウ〜ム残念ながらのぅ。どうだセイバー、ランサー？改めて訊くが余と共に世界を征する気はないか？」

「断る！　私も王のひとりだ。臣下に下る気など毛頭ない！」

「俺もだぞライダー。この時代で我が槍を捧げるのは、我がマスター以外にありえん。それにこちらからも質問がある。貴様何故そこのサーヴァントのマスターと親しげに話している？」

「ん？　あぁ、そこのキャスターにはここに来る途中で会って、臣下になるよう誘ったんだが断られてしまってな。だが美味い”イナリズシ”とやらをご馳走してもらったわい。しっかしこりゃあ完全に交渉は決裂かぁ。勿体ないなぁ。残念だなぁ」

「だからやめとけって言っただろライダー！　『あの二人ならきっと騎士として余の威厳に感じ入り、下るわい』とか言っときながら、結局総スカンじゃないかよ！　大体なんでお前は会うたびに真名バラすんだよ！？　アレか？　お前はいちいち名乗りを挙げなきゃ生きていけないのか！？」

「いや、まぁ、”ものは試し”と言うではないか」

「ものは試しで真名バラすんかい！？」

ギャーギャーと泣きじゃくるウェイバーと、それを適当に受け流すライダー。見てて哀れを誘うその光景は、キャスターという新たなサーヴァントが出てきたというのに場に全く緊張感を生み出さない。

『そうか、よりにもよって貴様か』

そこに突如として低く――――地を這うような怨嗟に満ちた声が響き渡り、再び空気が凍りついた。未だ姿を見せない、ランサーのマスターである。

その声には、先程のランサーへの命令の時とは違う……明らかに憎悪の念が込められている。

『いったい何を血迷って私の聖遺物を盗み出したのかと思ってみれば――――よりにもよって、君自らが聖杯戦争に参加する腹だったとはねぇ。ウェイバー・ベルベット君』

忌々しげに名を呼ばれたウェイバーは、声の主が誰なのかを理解し震え上がった。

そして原作を知るフォックスも、この声の正体を悟り警戒を強める。魔術の最高学府――――時計塔の筆頭講師にして、今回のマスターの中でも”魔術師”として最高の実力を有する男――――ケイネス・エルメロイ・アーチボルトだ。

『残念だ。実に残念だなぁ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才は、凡才なりに凡庸で平和な人生を手に入れられるはずだったのにねぇ』

嘲りと侮蔑を多分に含んだ声にウェイバーは何も言い返せない。自分はこの高慢な講師を見返すために聖杯戦争に参加したのに……初めて自身に向けられた明確な殺意で恐怖に身を竦ませてしまう。

『致し方ないなぁウェイバー君。君ついては、私が特別に課外授業を受け持ってあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本当の意味――その恐怖と苦痛とを、余すところなく教えてあげるよ。光栄に思いたまえ』

余りにも傲慢な発言。だが当のウェイバーには何かする余裕はない。魔術師の”死の宣告”というものを初めて体験したウェイバーには、ただ恐怖にうち震えることしかできなかった。……が、突如彼の肩を大きな何かが包み込む。――ライダーの手だった。

「おう、魔術師よ。察するに、貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターとなる腹だったらしいが、だとしたら片腹痛いのぅ。余のマスターとなるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ。姿を晒す度胸さえない臆病者なぞ、役者不足も甚だしいぞ」

『……』

ライダーの大笑にケイネスは答えない。……が、姿の見えぬ彼から発せられる怒りの波動だけは、沈黙が降りる中でも十分感じられた。

「おいこら！　他にもまだおるだろうが。闇にまぎれて覗き見をしておる連中は！」

その発言にフォックスを除いた全員がライダーに怪訝な表情を向けた。解せないとばかりにセイバーが問いかける。

「――――どういうことだ？　ライダー」

「セイバー、それにランサーよ。うぬらの真っ向切っての競い合い、真に見事であった。あれほど清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出てきた英霊が、よもや余たちだけということはあるまいて」

どうやらライダーの発言は、未だに姿を見せない……残りのサーヴァントに向けてのものらしい。辺り一面に豪快な宣言が響き渡る。

「情けない。情けないのぅ！　冬木に集った英雄豪傑どもよ。このセイバーとランサーが見せ付けた気概に、何も感じるところがないと抜かすか？　誇るべき真名を持ち合わせておきながら、コソコソと覗き見に徹するというのなら、腰抜けだわな。英霊が聞いて呆れるわなぁ。んん！？」

そしてひとしきりに豪笑を終えると、仕上げとばかりにライダーは周囲の闇に向かって堂々と宣言する。

「聖杯に招かれし英霊は、今！　ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものと知れ！」

果たして、その英霊は現れた。

ライダーの大熱弁の直後に現界した――――おそらく挑発に乗ってやってきたサーヴァントだろう。街頭のポールの上から見下すような形で戦場を見渡している。全身を覆う黄金の甲冑を抜きにしても放たれる絶対的な存在感は、ただのサーヴァントとは明らかに一味も二味も違う風格を漂わせている。

そして全員が気付く。あれは先日遠坂邸でアサシンを一方的に屠った謎のサーヴァントだ……。この場にいる四人のサーヴァントのクラスと、明らかに狂ってない様子から、間違いなく該当するクラスはアーチャーだろう。

「我(オレ)を差し置いて”王”を称する不埒者が、一夜のうちに二匹も涌くとはな」

そう切り出した黄金の英霊は、侮蔑と不快さを全く隠さずに眼下のサーヴァントを見渡す。その正体は、先の発言からするに、おそらくセイバーやライダーと同じ”王”の英霊なのだろうが、口調には二人には無い……冷酷で無慈悲なものが混じっている。

そして真名を知っているフォックスは、その姿に最大限の警戒を続ける。

アーチャーのサーヴァント――――”英雄王ギルガメッシュ”。今回の聖杯戦争で間違いなく彼にとって、最大の障害となる最強のサーヴァントだ。

それから難癖を付けたライダーと問答を始めたアーチャーだったが、突如として目線を別方向に向けた。

いや、アーチャーだけではない。その場にいたマスターとサーヴァント全てが、同じ方向を見る。その先には全身を傷だらけのフルプレートの鎧で固め、底なしの闇色の”影”のようなもので覆われた黒騎士が立っていた。禍々しいまでに発せられるその魔力は、明らかにサーヴァントだろう。

そして本能的にわかる。……あれは文字通り血に飢えた狂戦士のクラス――バーサーカーのサーヴァントだ。全身から漂う負の波動は、明らかに他のサーヴァントとは比較にならない……まるで殺意が人の形をとっているような錯覚さえ覚える。

「……なぁ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

軽飄にライダーを揶揄するランサーだが、目は笑ってない。むしろこれまでで最大の警戒を、黒騎士に向けている。

「誘おうにもなぁ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだわなぁ」

先程までに比べて明らかに積極性に欠ける発言だが、全員がライダーと同意見だった。……そもそも”アレ”に言葉は通じまい。

下手なことをすれば飛びかかってきそうだ。

「で、坊主よ。サーヴァントとしてはどの程度のモンだ？　あれは」

聖杯戦争では、正規のマスターにはサーヴァントを見ることで対象のステータスを読み取る特殊能力が与えられる。ライダーのマスターであるウェイバーも、例に漏れずその能力（チカラ）を持っており、既にここまでアサシンと目の前のバーサーカーを除いた全てのサーヴァ

ントのステータスを把握してた。
……が、彼はライダーの問いかけに答えられなかった。
「……判らない。まるっきり判らない」
「なんだぁ？　貴様とてマスターの端くれであろうが。得手だの不得手だの、色々と”観える”ものなんだろ、ええ？」
「いや、ウェイバーの言うとおりだ」
ライダーの問いに答えたのは、この場にいるもう一人の正規のマスターであるフォックスだった。
「あのサーヴァントのステータスが”見えない”。恐らくアレを覆っている黒い影……あれが透視能力を阻害しているみたいだ」
フォックスの言葉に全員が改めて黒騎士に目を向ける。……成程、その全身を覆う霧状の影は、そもそもあのサーヴァントの姿を正確に捉えることさえ不鮮明にさせている。スキルか宝具かはわからないが、恐らく自身を隠蔽する能力だろう。
突如登場したこの異様な狂戦士に、全員が警戒を緩めないが、ひとりだけ例外がいた。———アーチャーである。
理由はわからないが、あの黒騎士は、乗り込んできた時から自身に狙いを定めていることに、この黄金の王は気付いていた。
「誰の許しを得て我（オレ）を見ておる？　この狂犬めが……」
理性も無い獣（ケダモノ）が、不快な視線を自分に向けている。プライドの塊で

あるアーチャーからすれば、それは許し難い侮辱であった。

「せめて散り様で我(オレ)を興じさせよ。雑種」

断罪の宣言と共にアーチャーの左右に宝剣と宝槍が浮かぶ。発せられる膨大な魔力は、間違いなく宝具のそれだ。

そして切っ先が標的(バーサーカー)に向けられると、剣と槍は猛烈な速度で射出された。その狙いは弓兵とは思えないほど大雑把だが、何せ二本とも宝具である。それらは着弾と同時にミサイルが命中したかの如き破壊をもたらした。

「……ッ！」

誰かが息を呑む。巻き上げられた粉塵が晴れてくると、その人影はあった。

バーサーカーは健在だった。その手には打ち出されたハズの宝剣が握られ、僅かに逸れた足元には宝槍が作ったクレーターが出来上がっている。

恐らく今起きたことが理解できたのは、サーヴァント以外にはフォックスだけだろう。先の攻防でバーサーカーは、まず第一射の宝剣を”手で掴み取り”、続けて飛来する宝槍をその剣で打ち払ったのだ。

「……奴め、本当にバーサーカーか？」

「狂化して理性を無くしてるにしては、えらく芸達者な奴よのぅ」

ランサーとライダーが唸るが無理もない。神速で飛来する宝具を掴み取り、それを即座に使いこなして間髪いれずに迎撃に使用するなど、とても狂戦士のクラスとは思えない。

だが、宝具を打ち出した当のアーチャーは、顔を怒りに染めていた。自身の宝具を奪い取り、今もなお立っているバーサーカーの姿に憤怒を浮かばせている。

「――――その汚らわしい手で、我の宝物に触れるとは……そこまで死に急ぐか、狗(いぬ)ッ！」

怒号と共に再びアーチャーの周りに宝具の群れが現れた。――――その数、十六挺。

剣、槍、斧、槌、矛と、それら全てが紛れもない”宝具”だった。

「そんな、馬鹿な……」

思わず声を漏らしたウェイバーだったが、他の者も内心は同じだろう。本来宝具はひとりの英霊に一つか二つ、多くても三つか四つが限度だ。切り札とも言える宝具をあれだけ所有し、なおかつなんの未練もなく放っていくなど異常としか言えない。

「その小癪な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎ切れるか――――さぁ、見せてみよ！」

号令一下――――それぞれが膨大な神秘を有する宝具の大群が怒涛の如くバーサーカーに殺到した。一発一発が必殺の威力を持つ宝具の嵐は、倉庫街に莫大な破壊をもたらしていく。

だが、一切の容赦の無い爆撃の中でもバーサーカーは倒れない。何とバーサーカーは、最初と同様に飛来した矛を左手で掴み取ると、右手の剣と合わせて襲い来る宝具の一斉射撃を片っ端から撃ち落としているのだ。たった今奪い取った武器をまるで自分の体の一部のように使いこなすその腕は、正に神業としか言えないものだった。

「――――どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いヤツとの相性は最悪だな」

瞠目している者たちの中で、ひとりライダーが余裕そうに呟く。

「黒いのは武器を拾えば拾うだけ強くなる。金色も、ああも節操なく投げまくっていては深みに嵌る一方だろうに。融通の利かぬ奴よのぅ」

ライダーの指摘の通り、バーサーカーはより強力な宝具が飛来するとそれを目敏く奪い取り、迎撃に使用していた。そして遂にアーチャーの攻撃を凌ぎきったバーサーカーは、両手の曲刀と斧をアーチャー目掛けて投擲した。

切り裂いたのは、アーチャーの立っていた街頭のポールだった。足場を無くしたアーチャーは難なく着地するが、その顔には先程以上の憤怒が浮かんでいる。

「痴れ者が……。天に仰ぎ見るべきこの我(オレ)を、同じ大地に立たせるかッ」

怒号一喝――――黄金の王の後ろの空間が再び歪み始める。

「その不敬は万死に値する。そこな雑種よ、もはや肉片一つ残さぬ

ぞ！」

元々逆立ったアーチャーの金髪が、さらに怒髪天を突くかの如く燃え上がる。そして現れた宝具の数は三十二以上……先程の倍以上の数だ。最早手加減する気は失せたらしい。

あまりの異様な光景に全員が息を呑むが、不意にアーチャーの視線が町の方へ向けられた。

「貴様ごときの諫言で、王たる我（オレ）の怒りを鎮めろと？　大きく出たな、時臣……」

忌々しそうに舌打ちすると、展開されていた宝具が一斉に消える。どうやらマスターである遠坂時臣から帰還命令が出たらしい。既に殺意も失せたようだが、黄金の王はその傲岸さを隠さずに他のサーヴァントを見据える。

「雑種ども。次までに有象無象を間引いておけ。我（オレ）と見（まみ）えるのは真の英雄のみで良い」

そう言い放つと、アーチャーは霊体化して引き上げていった。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほど剛毅な質（タチ）ではなかったようだな」

苦笑するライダーだが、事態は好転していない。アーチャーは去っても、もうひとつの脅威――――バーサーカーは健在なのだ。

そして当のバーサーカーは、突然獲物が去ったことで暫く所在無さげだったが、次なる標的を見定め猛烈な殺気を撒き散らし始めた。

その視線の先には――――セイバー。

「……ａｒ（ア）……ｕｒ（ア）……ッ！！」

新たなる――――そして最高の標的を見つけた狂戦士は、猛然と騎士の王へと襲いかかった。

## 第七話　混迷と終戦にて（前書き）

第七話です。
港場での戦い、決着です。

## 第七話　混迷と終戦にて

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッ！」

黒のバーサーカーは、怨嗟の咆哮をあげながら怒涛の如き勢いでセイバーに迫った。

慌てずにバーサーカーの攻撃を受け止めたセイバーだったが、その”得物”の姿を見て驚愕する。

「なん……だと？」

バーサーカーが持っていたのは、”鉄柱”だった。先程のアーチャーの足場だったポールの一部――二メートル程の長さのそれを槍のように構えて猛烈な連撃を繰り出してくる。

さらに驚愕はそれだけでは終わらない。バーサーカーに握られたその鉄塊が、黒く染まっていく……。鎧の篭手から蜘蛛の巣状に伸びていくそれは、バーサーカーの魔力だろう……。闇色に染められた”槍モドキ”は、セイバーの宝剣とも打ち合える程にその強度を増している。

「……そういうことか。あの黒いのが掴んだものは、何であれヤツの宝具になるわけか」

ライダーの呟きに残りの全員が確信する。先程のアーチャーとの攻防のタネはこれだったのだ。

――手にしたものを自身の宝具として扱う能力。それが他者の宝具であれ、そこらの鉄屑であれ武器と見なしたものなら宝具にでき

る。使い手の技量が大きく作用するだろうが、それでも規格外としか言えない能力(チカラ)だ。

そして戦いを見守っていたフォックスも、バーサーカーの凄まじさを肌で感じていた。いくら原作で能力を知っていても、生で見なければその脅威を真に理解することは出来なかっただろう。

「ご、ご主人様……リアルガンダールヴです」

「いや、今明らかにメタ発言かます雰囲気じゃないから。ていうかどこで仕入れたそのネタ」

恐れおののきながら、場違いな事をぬかす使い魔を叱るフォックスだったが、状況は目に見えて切迫していく。

バーサーカーの猛攻を受けるセイバーは防戦一方。ただでさえ狂化したバーサーカーの膂力はセイバーを上回っている上、その武芸は理性を無くしているとは思えない冴えがある。さらに悪いことに先のランサーの必滅(ゲイ・ボウ)の黄薔薇による治癒不可能の傷がセイバーに全力を出すことを許さない。

徐々に劣勢に追い込まれていく。

「貴様は……一体！？」

思わずセイバーが問いかけるが、返答は攻撃だった。渾身の力を込めて振りおろされた一撃が、セイバーを叩き潰さんと迫るが、突如として舞った赤い流星がバーサーカーの疑似宝具を両断する。

「悪ふざけはその程度にしておいてもらおうか。バーサーカー」

呆気に取られるセイバーの前には、彼女を庇ったランサーがいた。右手の長槍――『破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）』の切っ先をバーサーカーに向けて対峙している。

……成程、触れたものの魔力を打ち消す『破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）』なら、バーサーカーの魔力で強化された疑似宝具には天敵だろう。打ち合えば、先のように一方的に破壊されるのが道理だ。

「そこのセイバーには、この俺と先約があってな。……これ以上つまらん茶々を入れるつもりなら、俺とて黙ってはおらんぞ？」

「ランサー……」

ランサーの宣言にセイバーは感極まるものがあった。彼女はこの聖杯戦争に参加した時から、自身の誇りにそぐわぬ戦いも覚悟している。だが目の前の槍の英霊は間違いなく自分と同じ――”騎士道”を貫いていた。

『何をしているランサー？　セイバーを倒すなら、今こそが好機であろう』

不興の声はランサーのマスターのものだった。どうやらセイバーを打倒するチャンスだと判断したらしい。

「セイバーは！　このディルムッド・オディナが誇りに懸けて討ち果たします！」

珍しく主人の命令に異を唱えるランサー。やはり騎士である彼としては、セイバーとは正々堂々と決着をつけたいのだろう。

「お望みならば、そこな狂犬めも先に仕留めて御覧に入れましょう。故にどうか、我が主よ！　この私とセイバーとの決着だけは尋常に……」

『ならぬ。ランサー、バーサーカーを援護してセイバーを殺せ。令呪を持って命ずる』

瞬間――――空気が凍りついた。

令呪。マスターたちが持つ、三回しか行使できないサーヴァントへの絶対命令権。そのひとつが今使用された。

ぐるりと反転したランサーは、令呪の効果に従いセイバーに槍を振るう。既に自由意思を奪われた彼には選択の余地はない。その顔は怒りと屈辱に染まりきっていた。

咄嗟に飛び退いたセイバーだったが、状況は目に見えて不利だ。ランサーの実力は先の攻防でこの場の誰よりも知っているし、敵は彼だけではない。バーサーカーもいる。

……案の定、バーサーカーはランサーに両断され一メートル程の長さになった鉄柱を今度は剣のように構え、挑みかかってきた。傍らには共闘を命じられたランサーもいるが、彼には目もくれずに襲いかかってくる。どうやらこの期に及んでも、標的はセイバーのみであるらしい。

完全に進退極まった状況にセイバーは焦燥する。強力なサーヴァントが二体……しかも左手が封じられている今の自分では勝機など微塵もない。

「アイリスフィール、この場は私が食い止めます。その隙に――」
既にセイバーは撤退を選んでいた。ことここに至っては、自分に出来ることはアイリスフィールを逃すことだけだ。何としても彼女だけは守らなければならない。
「その隙に、せめて貴女だけでも離脱してください。出来る限り遠
「キャスターッ！！」ッ！？」
突如セイバーの声を遮ったのは、フォックスだった。
「了解です、ご主人様（マスター）！　炎天よ、走れ！！」
主人の命に答えるキャスター。すぐさま懐から二枚の呪符を取り出し、標的へと飛ばす。呪符は彼女の手から離れると、瞬く間に巨大な炎の渦へと変わり、猛烈な唸りをあげて標的――ランサーとバーサーカーへと迫る。
咄嗟にランサーは右手の破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）で炎を打ち消したが、対魔力も低くセイバーに集中していたバーサーカーは振り向くことも出来ずに直撃を食らった。全身を高熱に包まれながら、数十メートル先まで吹っ飛んでいく。
「どういうつもりだ？　キャスター……」
主からの命令を遮られた形のランサーだったが、その声に憎々しげなモノはない。あるのは、ただ解せないという疑問だけだ。
「いえ、セイバーがやられたら次は私ですからね。及ばずながら援

護をさせていただきました」

その返答にランサーは成程と納得する。今でこそセイバーを二人がかりで追い詰めているが、もしセイバーが倒されたら次に狙われる可能性が一番高いのは、間違いなくキャスターだろう。元々キャスターのクラスは前線での戦いには向いていない。少なくとも自分のマスターなら嬉々として命じそうだとランサーは考えをまとめる。

「そういうわけでセイバー、一時共闘させてもらうぞ」

「し、しかし……」

返答の歯切れが悪いセイバーだが、無理もない。理屈は分かったが、果たしてキャスターがランサーを抑えられるのか疑わしいのだろう。ただでさえ三騎士のひとりであるランサーは、自分ほどでなくとも高い対魔力をそなえているし、彼の宝具――破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）は、魔術師にとっては天敵と言える武器だ。下手をすれば瞬殺されるかもしれない……。

「気持ちはわかるが、こっちを気にする余裕はないようだぞ」

「なっ、グッ！？」

「～～～～～～～ッ！！」

咄嗟に反応したセイバーの先には、炎に吹き飛ばされたハズのバーサーカーがいた。どうやら既に復活していたらしい。その鎧は、先程とは違い炎で煤だらけだったが、全身から滲み出る殺気にはいささかの衰えもない。

「クッ！　わかりました、頼みます！！」

最早自分に選択肢はないとセイバーは黒騎士に向かう。こうなればキャスターを信じるしかない。

「それでは、相手をしてもらうぞランサー」

「何？」

今度こそランサーは驚きの声をあげた。いや、彼だけではない。戦況を見守っていた他のマスターやサーヴァント全員が驚きの表情をしている。

それもそのはず、宣戦布告したフォックスが懐から一本の剣を抜きランサーに対峙しているのだ。……まるで、これから戦うかのように……。

「正気か？　貴様」

ランサーが疑問の声をあげるが当然だった。サーヴァントに人間の魔術師が挑むなど自殺行為としか思えない。

「何、ウチのサーヴァントは喧嘩苦手でな。斬り合いは俺の担当だ」

「ほぅ、面白い」

軽飄に返すランサーだが、既に表情に油断はない。

目の前のマスターは恐らく本気だ。……どの程度の実力かは不明だが、今自分が叩きつけた殺気を難なく受け流したところを見ると、

少なくとも雑魚ではない。すぐに構えを取り、同時にフォックスも戦闘態勢に移行する。

「さて――――いくか」

――――――――――――――――――――――

ウェイバー・ベルベットは頭痛を堪えていた。とは言っても、彼は生来の頭痛持ちでもなければ、病を患っているわけでもない。原因は隣にいるサーヴァント――――キャスターだった。

あの後ライダーは、四人の戦いを観戦すべく神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）で空に上がろうとしたのだが、何を血迷ったのか、この半獣のサーヴァントは『主人の勇姿を特等席で見守る』とか言い出して自分も御車台に乗り込んできたのだ。さらにあろうことかライダーもそれを快く了承し（稲荷寿司の礼だとか）、今ではこうして三人で観戦をする形となっていた。

そして戦いが始まると、キャスターはどこからか取り出した扇を両手に持ち『頑張れ～！　ご主人様（マスター）！！』とチアガールのように必死に主人の激励をしていた。

橋の上では気にする余裕がなかったが、改めて考えると、本来なら殺し合うべき敵のサーヴァントが隣で自身のサーヴァントと一緒に呑気に応援をしているという、このあまりにも常軌を逸した状況にウェイバーは頭痛に加え、胃痛も感じ始めていた。だがここで倒れたとしても彼を責めるものは決していないだろう。よく見れば、アイリスフィールも時々こっちを見ては気の毒そうな表情をしている。

「……なぁキャスター、お前こんなところで応援なんかしてていいのか？　……せめて魔術で援護射撃ぐらいしたらどうだ？」

「馬鹿ですねアナタ。対魔力持ちで、ついでに魔力を消す槍持ってるランサーに私が出来ることなんてないですよ」

「その通りだぞ坊主。しっかしサーヴァントと真っ向から白兵戦とは、実に剛毅なマスターではないかキャスターよ」

「むむ！　さすがは征服王。見る目がありますね～……あ、でもあげませんよ」

あまりな言いようにウェイバーは怒りで二の句が告げられない。あとライダー、自分のマスターが侮辱されたというのにその態度は何だ？

だが、怒りを鎮めると同時にウェイバーはひとつの結論にたどり着く。今の理屈から言えば、少なくともバーサーカーを攻撃してセイバーを援護することはできるはずだ。それをしないということは、何らかの意図があるのかもしれない。そう推察すると、ウェイバーは自然と自身も戦いに目を向けていた。

――――――――――――――――

戦いが始まって数分……既にランサーはフォックスの技量を見切っていた。そして同時に驚嘆もしていた……互角なのだ。

対峙しているのは、普通ではないにしろ間違いなく正真正銘の人間。だが目の前の男は、その手に持つ白銀の刀で宝具である自身の二槍を捌いていた。

セイバーと比べれば、パワーと剣の技量は劣る。……が、スピードはほぼ互角だ。だが真に驚くべき所はその瞬発力だろう。急に動きが緩んだかと思ったらいきなり最高速に達して斬撃を繰り出す。まるで猫科の猛獣のような俊敏性から繰り出される緩急自在の動きは、セイバー以上に捉えづらい。恐らく魔力による強化も行なっているのだろうが、それでも生身とは思えない動きだ。

さらに自身の槍を受け止めているあの刀……。宝具と打ち合えている以上、あれも恐らくただの刀ではあるまい。何らかの概念武装かもしれないが、その程度では自身の宝具を受けて傷一つつかないという事実を説明できない。となれば……あれも歴とした宝具の類か

もしれない。

それでも地力ではランサーの方が優勢だ。

にもかかわらず目の前の魔術師を仕留めきれていない最大の理由が、その再生能力だった。

目の前の敵は、自身の槍の全てを捌けてはいない。いくつかはその身を抉り、浅い傷を作っている。

……が、それらの傷の全てが一瞬の内にひとりでに治っていくのだ。

高速再生能力。それ自体は神代を生き、様々な怪物と対峙してきたランサーからすれば、そこまで珍しい能力ではない。だが厄介なことにその能力は、必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇による治癒不可能の傷すら癒していくのだ。破魔（ゲイ・ジャルグ）の紅薔薇による傷に比べるとやや回復が遅いが、それは大した問題ではない。重要なのはその再生力が、宝具による回復阻害すら無効化しているということだ。

ランサーの宝具は、白兵戦では非常に有利だが決め手に欠けるという側面も持っている。魔力を打ち消す槍と、治療不可能の傷を負わせる槍……これらは本来長期戦で真価を発揮するのだが、魔術を使わず、必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇の回復阻害の呪いをはねのける者が相手となれば、ランサーの槍は宝具としての利点をほとんど生かすことができない。ならば回復する前に仕留めればいいと攻め立てるのだが、あいにくランサーとフォックスにそこまでの技量の差はない。

自身と目の前の魔術師との相性の悪さに内心歯噛みしながらも、ランサーの顔には喜悦が浮かんでいた。

確かに再生能力に助けられているところも少なからずある。……が、敵の実力は間違いなく超一級品だ。人の身でありながらこれほどの

戦いが出来るものは、現代においてはほとんどいまい。予期せぬ強敵との対決に心が弾んでいく。

「ふっ！！」

「なっ！？」

驚愕の声はランサーだった。フォックスは突き出された破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）を空いている左腕で巻きつけるようにして受け止めたのだ。

もちろんそんな無茶なことをして無事なハズがない。槍による裂傷から血が吹き出し、受け止めた左腕全体が軋みを上げる。

だがフォックスの行動はそれだけでは終わらない。腕の痛みには構わず、突き出された力のベクトルを利用し、槍ごとランサーを後ろに投げる。

「うおっ！？」

突如空中に放られたランサーだが慌てることはない。すぐに態勢を整え直す。だが着地の前には、既に傷が回復し刀を振りかぶったフォックスが目前に迫っていた。

———次の瞬間、白銀が一閃した。

「……外したか」

僅かに残念そうに呟くフォックスだが、そこに落胆の表情はない。むしろこの程度では仕留められないのが当然だろう。

再び目の前の――――左頬を切り裂かれた槍兵に向き合う。

あの時、咄嗟に刀を槍でガードしたランサーだったが空中で身動きが出来ない状況では、やはり完全に斬撃を防ぐことは出来なかった。

一歩間違えれば首をはねられていただろう。

「見事だ……」

だが死にかけた彼の口から出てきたのは”賞賛”だった。

「肉を切らせて骨を断つ。だが切られた肉はすぐ元通りか……。怖いな」

「英霊のお墨付きを貰えるとは、光栄だ」

軽快に返すフォックスだが、彼も内心余裕はない。自身の能力がランサーに相性が良いのは理解しているが、決め手に欠けているのは同じなのだ。必ず勝つ必要こそないが、ランサーの宝具の能力上、ここで仕留められるのなら仕留めておきたい。

――――だが、突如自身のサーヴァントからの”念話”でその均衡は

崩れた。

「ＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａＬａｉｅッ！！」

突如響いた轟音。その大地を揺るがさんばかりの雷鳴と咆哮の正体をフォックスは知っていた。何より今、使い魔からの念話で伝えられているのだ。”アレ”が来ると。

間一髪、飛び退いたフォックスとランサーは回避が間に合ったが、直後目の前を走り去ったライダーの”真の標的”――バーサーカーは、セイバーに意識を向け続けていたため、その雷の戦車の直撃を食らった。先程のキャスターの炎を食らった時と同じ構図だったが、威力の桁が違う。

並の英霊なら一発で息絶えたであろう蹂躙をまともに受けたバーサーカーのダメージは致命的だった。

「――ほう？　なかなかどうして、根性のあるヤツ」

駆け抜けたライダーの視線の先には――果たして、消滅を免れ、地に伏せた黒の狂戦士がいた。

全身を神牛と戦車に轢き尽くされ甚大なダメージを負っているが、持ち前のタフさと最後の大打撃を身を捻って避けることで即死だけは避けていたのだ。

だがその動きは弱々しく、僅かに身じろぎしかできていない。
生きてはいるようだが、ほとんど虫の息だろう。
案の定、その姿が霊体化して消えていく。鎧から覗く瞳には、最後まで殺意の炎を灯していたが、戦闘続行は不可能と判断したらしい。
「と、まぁこんな具合に、黒いのにはご退場願ったわけだが――」
虚空に向かって話すライダーだが、全員が理解している。いったい誰に向けての言葉なのかを。
「ランサーのマスターよ。どこから覗き見しておるのか知らんが、下衆な手口で騎士の戦いを穢すでない……などと説教くれても通じんか。魔術師なんぞが相手では」
そこまで言うとライダーは、姿の見えぬマスターに向かって、挑発的な笑みを浮かべ宣言する。
「ランサーを退かせよ。これ以上そいつに恥をかかすというのなら、余も加勢する。セイバーとそこのキャスターのマスターと余の三人がかりでランサーを潰しにかかるが、どうするね？」
『……撤退しろランサー。今宵は、ここまでだ」
その言葉は、怒りを無理やり押さえつけるように絞り出されたが、それでも今のランサーにとっては何よりもありがたい命令だろう。
「感謝する。征服王」

「なぁに、戦場(いくさば)の華は愛(め)でるタチでな」

ランサーの謝意にライダーは笑って返した。同時に場の空気が穏やかなものへとなっていく。どうやら引き上げ時のようだ……。

（ここまでは、ほぼ予定通りだな。”仕込み”も終えたし、俺たちも行こうキャスター）

（わかりました。ご主人(マスター)様）

念話で自身のパートナーに呼び掛け、フォックスも倉庫街を立ち去る。

――――向かう先は、既に決まっていた。

## 第八話　マスター達の一幕にて（前書き）

八話目です。真面目展開です。

## 第八話　マスター達の一幕にて

「ハァッ……ハァッ……」

間桐雁夜は瀕死だった。

魔術師としての素養はあっても、わずか一年の歳月で聖杯戦争にマスターとして参加する必要があった雁夜は、体内に植えつけた刻印虫の力で無理やり魔力を生成する必要があったのだが、その苦痛とリスクは想像を絶するものだった。

港場での戦いで、彼にとっての憎き仇敵――――遠坂時臣のサーヴァントであるアーチャーを打倒すべくバーサーカーをけしかけた彼は、自身も下水道から近付いて戦況を見守っていたのだ。

結果として、アーチャーを退けたことは雁夜にとって戦果と呼べるものだったが、代償は大きい。

戦闘中、魔力を生成するたびに体内で暴れ狂う刻印虫に何度も意識をもっていかれかけた。

さらにその後バーサーカーが一切命令を聞かずセイバーに襲いかかり戦い続けたことで、バーサーカーにより大量の魔力をもっていかれ、余計に消耗してしまった。

幸いライダーの一撃でバーサーカーが霊体化したことで急死に一生を得たが、肉体の損傷は甚大だ。あれ以上バーサーカーが暴れたら、魔力を吸われすぎて死んでいたかもしれない。

結果、下水道のマンホールを開けることすら時間がかるほど憔悴し

きった雁夜は、今こうして出てきた道路の上で呼吸を整えているのだが、その顔は疲労の色が濃い。全身からは刻印虫の反動で破裂した毛細血管から血が滲み出ている。死に体、というのが正しい表現だろう。

ただでさえ維持に大量の魔力を必要とするバーサーカーを使いこなすのは、即席の魔術師である雁夜には荷が重すぎた。

だが諦めるわけにはいかない――――

前途多難という言葉すら生ぬるいが、雁夜には使命がある。

そのためには死ぬわけにはいかない。生き残らなければならない。

実家の魔術を嫌い家をでた自分に代わり、あの妖怪の餌食となっている少女。”教育”という名の虐待で、幼いながらも体も心も犯され尽くしたあの子を助けなければならない。あの地獄は本来自分が受けるべきものだったのだ。

自らのやることを再確認し決意を新たにするが、体の方は言うことをきいてくれない。原作ではここから立ち去る余力があったのだが、フォックスの介入によって本来よりも戦闘が長引いたため、その分の魔力を食われることとなり、ダメージも上乗せされていたのだ。

それでも、いつまでもここにいるわけにはいかない。今は夜中で人影がないが、もたもたしていたら誰かに接触する可能性はあるのだ。

必死に体に鞭を打つが、突如その意識は何者かに狩り取られた――――

――――――――――――――――――――

冬木ハイアットホテル地上三十二階――――都市開発により次々と新しい高層ビルが建っていく新都でも、この高さに並ぶ建物は未だない。

そんな最上階のスイートルームを財力に物言わせて貸し切ったケイネス・エルメロイ・アーチボルトは、ひとり眉間にしわを寄せていた。その表情は不機嫌としか形容しようがない。

彼は生まれながらの”天才”だった。

九代続く魔導の名門――――アーチボルト家に生を受け、魔術師として他の追随をゆるさない才能を持ち、常に最高の結果を出し続けてきた彼の力は、自他共に認める”本物”なのだ。

それ故に、ケイネスは今まで自分の思う通りにならないことなど一

度としてなかった。彼にはそれだけの力があったし、若くして時計塔の筆頭講師の地位におさまり、華々しい研究成果をあげ、破竹の如き勢いの出世を果たしたのも当然の帰結だったのだ。

だからこそ、彼は今の自分の状況が納得できない。

「ランサー。出てこい」

「――は。お側に」

打てば響くような速さで実体化したのは、槍の英霊――彼のサーヴァント、ランサーだった。そしてケイネスの不機嫌の最大の原因でもある。

「港場ではご苦労だった。誉れも高きディルムッド・オディナの双槍、存分に見せてもらった」

「恐縮であります。我が主よ」

労いの言葉をかけるケイネスと、それに淀みなく答えるランサー。一見すると理想の主従の形のようだが、ケイネスの声は剣呑としている。

「ああ、存分に見せてもらった。その上で問わせてもらうがなランサー、貴様一体何をしていた？」

「……と、申されますと？」

「とぼけるなよランサー。私に勝利を捧げると抜かしておきながら、あの醜態は何だ？　貴様は自分の力不足を証明するために私に戦い

の許可を求めたのか？」

「我が主よ……そのようなことは決して……」

「黙れッ！！」

一喝と共にケイネスの表情が怒りに染まる。その鋭さは、明らかに先程までの何かを我慢しているようなところはない。

溜まりに溜まった鬱憤を爆発させたといった様相だ。

「貴様の実力を信用してああして戦いを許したというのに、結果はどうだ！？　宝具だけでなく令呪まで使っても貴様はただのひとりも討ち取れなかった！　この失態をどう償う！？」

傍からから見ればランサーの健闘は十分讃えられるものだが、ケイネスにしてみれば、その戦果はあまりにも納得のいかない微々たるものだった。あれだけのサーヴァントが集結し、討ち取るチャンスがあったというのに、その実一騎も仕留められていない。

結果としてランサーは、実質自身の正体と宝具の力を他の者に晒しただけに過ぎないというのがケイネスの評価だった。無論集まった他のサーヴァントやマスターの正体もいくらか知ることは出来たが、それでも令呪一画を使用した損失を考慮すると、明らかにデメリットが多い。

「何より、貴様は戦いを”愉しんで”いた。私に勝利を捧げると誓っておきながらセイバーを討ち取るチャンスを逃し、あまつさえ人間の魔術師にまで遅れをとった。そんなにも彼らとの競い合いは愉悦だったか？　さすがは生粋の騎士だな」

たっぷりと皮肉を含ませたケイネスの叱責にランサーは項垂れたまま沈黙を貫く。

彼とて思うところはある。それは違うと否定したいところもある。

だが自身が確たる戦果を挙げられなかったことも、この槍の英霊は認めていた。セイバーとキャスターのマスターとの戦いに心躍らなかったと言えば嘘になる。主君に大口を叩いて勇んで戦端を切ったというのにこの程度の結果しか残せなかったのは明らかに失態だとも考えていた。

「――――いい加減にしなさいケイネス」

だがケイネスの叱責は、突如その凛とした声音に遮られた。

声の主はすぐに二人の前に現れた。燃えるような赤の髪と女帝さながらの怜悧な風格をそなえた、まるで氷のような雰囲気の美女。その立ち居振る舞いは、凡人にはない高貴さと品位が漂っている。

ケイネスの許嫁……ソラウ・ヌァザレ・ソフィアリだった。

「ランサーは良くやったわ。失態の原因は貴方の判断ミスでしょう？」

「ソ、ソラウ……」

普段のケイネスならば、これだけで激昂していただろう。そうならないのは、目の前の女性が彼にとって”特別”だからである。

彼女が、恩師である降霊科の学部長の娘ということもある。だがもっと根本的な部分でケイネスは彼女に頭があがらなかった。彼はソラウに恋しているのだ。惚れた弱み、というやつである。

「ソラウ、確かに令呪を使ったのが早計でなかったとは言わない。だが、ランサーが敵を討ち取れなかったのも事実だ。それにあのセイバーの能力の高さは脅威だ」

「だからどうしたというの？　いくらセイバーの能力が高くても必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇で傷を負わせたんだからいつでも倒せたのよ。それにランサーの槍はあのバーサーカーに有効な宝具だった。なら一旦バーサーカーを倒してから、その後ゆっくりセイバーを倒せばよかったじゃない」

「だ、だがそれでもキャスターのマスターは介入してきたはずだ……」

「そうかもね。でも仮に介入してきたとしても貴方が抑えればよかったじゃない」

「わ、私が？　無茶を言うなソラウ！あんなサーヴァントと戦えるような男に！？」

「貴方って人は……ねぇケイネス、貴方まさか私たちのアドバンテージを忘れたわけじゃないわよね？」

ソラウの指摘に、ケイネスは言葉に詰まった。彼女の言わんとすることはわかる。

今回の聖杯戦争にあたってケイネスは、他のマスターにはない、あ

る”秘策”を用意していた。

本来サーヴァントは、令呪を宿したマスターからの魔力供給によって現界を維持する。だがケイネスはこのシステムに独自の改造を加え、令呪は彼が宿しつつも、ランサーへの魔力供給は許嫁のソラウが行うという分割契約の形をとっていたのだ。

そのためケイネスは、本来ならサーヴァントに供給する分の魔力の全てを、自身の魔術の行使に回すことができるという他のマスターにはないアドバンテージを有していた。

「貴方言ってたわよね？　『どんなマスターが相手でも私の礼装と魔術で華麗に蹴散らしてみせよう』って。なのにその弱気は何？　港場でも終始隠れてて、セイバーのマスターの女を狙うことすらしなかったじゃない。情けないったらありゃしないわ」

「ソラウ様、そこまでにして頂きたい」

ストップをかけたのはランサーだった。いつの間にか顔を上げてソラウを見据えている。

「それ以上は、我が主への侮辱だ。騎士として見過ごせません」

「いえ、そんなつもりじゃ……御免なさい。言いすぎたわ」

途端に剣幕をおろし、恥じらうように目を伏せるソラウ。そんな許嫁の豹変を、ケイネスは鬱屈した気分で見ていた。そして彼は自身のサーヴァントの”呪い”を思い出す。

『愛の黒子』――――英霊ディルムッドが生まれ持った異性を虜にする呪い。

もちろんそんなものがソラウを惑わしているとは、彼は露ほども思っていない。常人ならいざ知らず、名門ソフィアリ家の息女であるソラウには、そういう魅惑の魔術に対する強い抵抗力がある。邪推など愚かなことだ。

だが、突如鳴り響いた防災ベルの騒音がケイネスに思考を切り替えさせた。

「……なに？　何事？」

困惑するソラウとは対照的に、ケイネスは受話器を取り上げ係員からの連絡に冷静に耳を傾ける。この辺の貫禄は流石というべきなのかもしれない。

「下の階で火事だそうだ。小火程度のものだそうだが、どうやら火元は何ヵ所かに分散しているらしい。まぁ、間違いなく放火だな」

「放火ですって？　よりによって今夜？」

「フン、偶然ではあるまいさ」

鼻で笑い飛ばすケイネス。その眼差しは既に魔術師としての鋭さを取り戻していた。

「人払いの計らいだよ。敵とて魔術師。有象無象共がひしめく建物の中でやり合う気にはなれんだろうからな」

そう――――これは間違いなく襲撃だ。恐らく倉庫街の戦いでまだ暴れ足りない輩が押しかけてきたのだろうが、ケイネスは襲撃者が何者なのかは既に予測がついていた。ランサーの必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇で左腕を奪われたセイバーだろう。

「ランサー、下の階に降りて迎え撃て。ただし無下に追い払ったりはするなよ」

「承知しました。襲撃者の退路を断ち、この階に追い込めば宜しいのですね？」

「そうだ。お客人にはケイネス・エルメロイの魔術工房をとっくりと堪能してもらおうではないか」

キャスターもそうだが、魔術師という人種は総じて自身の工房でこそ最大の力を発揮できる。ケイネスもその例に漏れず、今回丸ごと貸し切ったホテルの最上階を、自身の拠点に相応しいように”改装”していた。

既にケイネスの要塞と化したこの階は、強固な防御力を持つ結界が何十にもはられ、彼の得意とする降霊術で呼び出した悪霊、さらにトラップの類も無数に仕掛けてある。その堅牢さは、たとえサーヴァントであっても攻略は容易ではない。

そして当のケイネスは内心ほくそ笑んでいた。この襲撃は、緒戦で不覚を取り、愛する婚約者に臆病者呼ばわりされた汚名を返上する絶好の機会になる。今度こそ敵をひとり残らず狩り尽くし、自身の

力を証明してみせよう。

意気込むケイネスだが、彼はその身に迫るものに気付けなかった。

いや、無理もないだろう。

次の瞬間、ケイネスは文字通り地に落とされた――――

――――――――――――――――――――――――

「準備完了だ。そちらは？」

『異常なしです。いつでもどうぞ』

冬木ハイアットホテルからやや離れた物陰から、衛宮切嗣はホテルの斜向かいの高層ビルで待機している久宇舞弥に連絡を入れた。万一ことが上手くいかなかった時の備えとして、彼女にはホテルの監視をしてもらっている。全ては順調だ。

おもむろに切嗣は携帯に番号を打ち込み始めた。呼び出されるのは、架空名義のポケットベル。

切嗣がホテルに仕掛けたＣ４プラスチック爆弾への起爆の合図だ。
爆弾といっても、仕掛けたのは極少量であり外にも爆発音が漏れることはない。代わりに響いたのは、ホテルの鉄筋が不気味な唸りを上げる音だけだった。

「ホテルが、ホテルが崩れる！」

それは誰の叫びだったのか。恐らく避難客のひとりだろう。
果たして高さ百五十メートルを誇る冬木ハイアットホテルは、直立の状態のまま地面に吸い込まれるように崩壊していく。
爆破解体（デモリッション）――――主に高層ビルの解体に使われる発破解体技術のひとつ。
ビルそのものの重量を利用して、周囲に被害をもたらすことなく建築物を瓦礫に変えるこの手法を、今回切嗣は暗殺として使った。
既にホテルの最上階をケイネスが工房として改造していたのは調べがついていた。その堅固さは、切嗣から見ても攻略不可能と評するには十分なもので、さすがはロード・エルメロイと言えるだろう。
だから切嗣は爆破解体という手段で工房ごと破壊した。いくらあの工房が強固でも、それを形成している建物ごと崩されたらどうしようもあるまい。ケイネスはあのまま拠点に立てこもっていただろうから、地上百五十メートルからの自由落下でビルの瓦礫の仲間入りだろう。

「舞弥、そっちは？」

「最後まで三十二階に動きはありませんでした。標的はビルの外には脱出してはいません」

となれば、ケイネスの暗殺はほぼ成功したと見ていいだろう。だが、まだ決めつけるには早い。セイバーの左腕が治っているか確認するまでは、予断は許されないのだ。

全てを見届けた切嗣は、すぐに次の場所へと向かう。裏道を抜けてたどり着いたのは…一棟の廃ビルだった。

全高はハイアットホテルの十分の一程度だろう。裏通りの人目につかない無人の建物の中に足を踏み入れていく。既に頼んだものは届いているはずだ……。

建物の中に物はほとんど置かれていない。元事務所の名残としてデスクの残骸などが散乱したりしてるが、切嗣が足を進めた先――四階の一室に目当ての人物はいた。

「お待ちしておりました衛宮殿。こたびのご利用、誠にありがとうございます」

恭しく礼をとった男――武器商人ビクトルに対し、切嗣は簡潔に尋ねる。

「注文の品は？」

「こちらに」

返答と共にビクトルは、背後の巨大な、古い金庫を模した倉庫を開

け放ち、品物を見せる。

収納されているのは銃火器。多種多様に揃えられた殺人兵器たちは、大火力の物も多い。

超大型拳銃デザートイーグル、ＭＰ５サブマシンガン、個人防衛火器に分類されるＰ９０、アサルトライフルの代表格ＡＫ－４７。さらにはバレットＭ８２対物ライフルや対戦車ミサイルＭ４７ドラゴンなど、およそ日本という国ではありえない光景が広がっていた。

「何とか注文の期限には間に合わせましたが、個人でこれだけの買い物というのは久しぶりですな。戦争でもやる気ですか？」

「あぁ、その通りだよ」

冗談交じりのセリフだったが、的を得ていた。正に切嗣は戦争に身を投じている。

「料金は既に納金を確認済みですので。品物に不具合がないかお確かめになりますか？」

言われる前に切嗣は武器のチェックをしていた。彼が今回これだけの重火器を揃えたのは、言うまでもなくあの『死徒殺し』への対策の一環である。

事前の調査でこれまでの予定の武器では心許ないと判断した切嗣だったが、短期間でこれだけの武装を揃えるのはやはり骨が折れた。

だが用意しておいて正解だった。港場での戦いは全て観察していたが、正直あれの戦闘力は想像以上だった。さらに他のサーヴァント

達の戦力も決して侮れるものではない。これらの武器で例のアインツベルンの城の守りを強化すれば、それなりの効果を発揮できるだろう。

念入りにチェックを進める切嗣だが、突如その作業は中断された――

それは気配。敢えて言うなら死線をくぐり抜けたものだけが感じられる変化。

振り向いた先には――――奴がいた。

「初めまして、だな。衛宮切嗣」

「……シルバー……フォックス」

今、誰の目にもつかないところで激戦が始まろうとしていた――――

## 第九話　『魔術師殺し』ＶＳ『死徒殺し』にて（前書き）

いつの間にか十万ＰＶ超えてました……。恐ろしい……。

## 第九話　『魔術師殺し』ＶＳ『死徒殺し』にて

状況は最悪だ。

「衛宮切嗣。一度限りの勧告だ」

スラリ、とフォックスの懐から世界最硬の刃物が抜き取られる。その両手には、港場では無かったグローブのようなものがつけられていた。

「武器を捨てて降伏しろ。命まではとらない。お前がセイバーの本当のマスターであることも調べはついてる」

「……何が……目的だ？」

切嗣は訳がわからなかった。自分たちは敵同士。殺すべき対象をどうして生かす。

思えばこの登場の仕方も不可解だ。気づかれていないうちに、さっさとそこのデスクを投げつけたりでもすれば、それだけで切嗣は終わっていただろうに。

……そもそも何故奴はこの場所に気づいた？

切嗣は知らないことだが、実はフォックスにとっても今回のことは

賭けに近いものだった。

前世から引き継いだ穴だらけの原作知識。その中には切嗣のホテル爆破のこともあったのだが、彼が何をしていたか、詳しい部分はほとんど覚えていなかった。

だからフォックスはホテルの近くに身を潜め、臭いで切嗣を見つけた。

彼の能力――――肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）には、副次効果のひとつとして”五感の強化”というものがある。これによりフォックスは、魔術なしでも１ｋｍ先の闇夜も鮮明に捉えることができ、雑多の中でも音の種類を聞き分け、死角からの銃撃にも対応できる。

当然嗅覚も、犬なみ――――とまではいかなくとも常人の比ではなく、切嗣のコートに染みついた硝煙の臭いを捉えるのは、困難ではあるが可能だった。最も、これがどこかの内戦地帯だったらあの集団の中から発見するのは不可能だっただろう。日本という火薬類が極めて目立つ国だからこその結果だ。

「お前には死んでもらうわけにはいかない。……が、このまま暗躍されても困るんだよ。暫く監視下に置かせてもらう」

言葉から推測するに、どうやら目の前の敵は自分を生かす理由があるらしい。だが、ここで捕まるわけにはいかない。

返答は銃弾――――

既に弾込めを終えたＰ９０の５．７ｘ２８ｍｍ弾の洗礼がフォックスに降り注ぐ。だがフォックスは、その全てを十倍速のビデオのような動きで弾き返した。

隣にいるビクトルが、ありえないものを見たかのような表情になっているのが分かる。数え切れぬ修羅場をくぐってきた切嗣にしても初めて見る光景だった。だが冷静さは失っていない。

「仕方がない。足だけ切り落として確保させてもらう」

交渉の決裂と共にフォックスは、やはりというか近くのデスクを投げつけてきた。人外の怪力で放たれた鉄塊が唸りを上げて迫る。

「Ｔｉｍｅ　ａｌｔｅｒ（固有時制御）――――ｄｏｕｂｌｅ　ａｃｃｅｌ（二倍速）」

詠唱と共に切嗣は駆け出す。その両手にはたった今手に入れたＰ９０とＭＰ５の二挺が握られていた。

そして気づいたが、どうやら今の投擲は自分を狙ったものではないらしい。轟音と共に重火器達がお釈迦にされたところを見ると、武器破壊が目的だった様だ。ビクトルの無事は確認できない。

状況を整理しながら切嗣はビルの中を疾駆する。その速度は、どう考えても常人に出せるものではない。

固有時制御――――『魔術師殺し』衛宮切嗣が有する切り札の一つ。

彼の生家、衛宮家は代々時間操作に関する魔術を研究してきた家柄で、特定の空間を外界から切り離し、思い通りに操作するという”固有結界”に通ずる大魔術の探求を続けてきた家系で、五代目となる切嗣もその秘奥の一部を継承していた。

だがこれは本来大魔術を前提としたものであって、発動には術式の規模も必要な魔力も桁違いに大きいものとなる。故に戦場に生きる切嗣にはなんの役にも立たない魔術だった。

だが切嗣は、この術式を極めて小規模かつ効率化することで、独自の応用法を編み出した。それが固有時制御である。

本来周囲の空間の時間法則を塗り替えるこの大魔術を、切嗣は自身の肉体にのみ適用することで、わずか二詠唱で術を発動させることに成功したのだ。

この術の発動中は、切嗣の肉体は外界の時間法則とは切り離され、自身の体を加速させたり、あるいは停滞させることが可能になる。だがそのリスクは他の魔術と比べても極めて大きく、術が解ければ世界の修正力によって加速した分の反動が肉体にフィードバックして返ってくる。断じてこんな初っ端から使ってよい魔術ではない。

だがそれでも足りない――――固有時制御で加速できるのは、肉体への負担を考えると倍速まで。だとしてもあの化け物の獣じみた速さには及ばない。

逃走は困難。階段でのかけっこでは１００％追いつかれる。ビルから飛び降りても自由落下より速くあの男は自分を仕留められるはず。

セイバーを呼ぶことも考えたが却下。もし令呪で呼び出したらあの男は間違いなく撤退を選ぶだろう。人目につくところに逃げられたら令呪の無駄遣いで終わる。セイバーの召喚は最終手段だ。

幸いなことに地の利はこちらにある。ビルの構造は熟知しているから、立ち向かうのではなく逃げに徹しながら牽制を続ければ反撃の機会は巡ってくるはずだ。

そして走りながらも、頭の中で切嗣は戦力の確認を済ましていた。

敵の戦力――――近接戦においてだがサーヴァントとも渡り合うほど。特にスピードはサーヴァント換算でＢからＡと推定。港場での戦いを見る限り、銃火器など飛び道具の類は見当たらない。距離を詰めさせず遠距離からの銃撃に徹するのがベストと思われる。

自身の戦力――――両手のサブマシンガン二挺に懐のキャレコＭ９５０、そして自身の”礼装”たるトンプソン・コンテンダー。幸い既に『魔弾』は装填済み。爆弾の類はなし。やはりアウトレンジからの牽制に徹しつつ、チャンスを見極め”切り札”の使用が最善と判断。

結論を下した切嗣だが、その目論見のひとつは早くも崩れさった――――

加速で逃げつつ、追いつかれる前に銃弾で隙をつくる。それ自体はフォックスには有効な手だ。サーヴァントとは違い人間である彼には、神秘のない近代兵器でも傷をつけることが出来る。勿論すぐに再生するが、暫しの足止めとしては効果的だ。

……が、突如フォックスは追跡しながら周囲の瓦礫に左手を突っ込み、掴めるだけの残骸を掴んだ。

切嗣は知らなかった。彼が両手にはめているグローブ———あれこそが『死徒殺し』シルバー・フォックスの最強の遠距離武装なのだ。

確かにフォックスは、基本的に弾のストックが必要となる射撃武器の類は使わない。さらに支援系特化型の魔術師であるため、他の魔術師のように攻撃系の魔術さえ行使することもできない。だが彼は遠距離から攻撃できることの有効さを理解しているし、その手段も必要としていた。そこで彼が選んだ戦法が、所謂”石つぶて”である。

投石術というのは古くから合戦でもよく使われていた殺傷技術で、そのローコストと使いやすさから、日本の戦国時代には弓矢、鉄砲に次ぐ威力を発揮したと言われている。

そして破壊力は言わずもがな。野球選手の投球を見ればわかるように熟練者が投げた石つぶては、下手な弓よりも威力がある。フォックスはこの戦法に目を付け、対死徒用の技術として研鑽を積み、メジャーリーガーの三倍以上の速さで正確に投擲することも可能としたが、彼の獲物である死徒達相手ではまだ力不足だった。そこで彼

は、もう一段階の”改良”を施した。

『土』と『水』――――『個体』と『液体』という概念に通ずるこの二つの魔術属性を持っていたフォックスは、自身の起源『再生』により特化した修復魔術の応用もあり、物質に自身の魔術を染み込ませることを得意としていた。基本的に彼はどんな物質にでも”強化”をはじめとした魔術を瞬時に打ち込むことが出来る。

この特性を利用してフォックスが作り上げた魔術礼装が、今はめているグローブだった。このグローブには手に掴んだ物質への魔力の伝導性を上げる効果があり、これにより掴んだものを強化し、聖性を付加することで即席の対化け物弾を作ることができる。彼が投擲すれば、そこらの小石でも大口径の法儀式済み銀弾頭と何ら変わらない威力となって死徒を撃ち抜くことができるのだ。

果たしてその威力は発揮された――――

フォックスは掴んだ瓦礫をそのままアンダースローの体勢で一気に投げた。咄嗟に切嗣は柱の影に身を隠したが、その選択は正しかった。放たれた残骸たちは大口径のショットガンさながらの破壊の嵐をまき散らす。

「Ｔｉｍｅ　ａｌｔｅｒ（固有時制御）――――ｄｏｕｂｌｅ　ａｃｃｅｌ（二倍速）！」

二度目の加速。戦士の本能に従い、飛び退いた切嗣の目に映ったのは、今自分が防御に使った柱が三つに斬り倒されるところだった。

すぐさま切嗣は下がりつつＭＰ５の連射で牽制するが、その全てが斬り返される。そして次にフォックスが掴んだのは今彼が斬った柱の一部だった。それを今度はオーバースローで構え、投擲する。

「Ｔｉｍｅ　ａｌｔｅｒ（固有時制御）――ｄｏｕｂｌｅ　ａｃｃｅｌ（二倍速）！！！」

すぐさま避けつつ距離を取るが、固有時制御の乱発による肉体へのダメージは既に限界をむかえつつあった。これまでの戦闘時間――僅か四分。

（ダメか、やはり僕には少々荷が重すぎる）

既に体は限界だ。苦痛には何ら頓着しない切嗣だが、これ以上固有時制御を使えば最悪命にかかわる。そもそも正面から戦うというのは切嗣の本来のスタイルではないのだ。

廊下を駆けながら、いよいよ令呪でセイバーを呼ぶことを考えた切嗣だったが、奥の光景と自らの幸運に内心笑みを浮かべる。

「成程、”サービス”か。いい仕事をしてくれる」

――――――――――――――――――――

「そろそろ、か？」

既に衛宮切嗣は限界のハズだ。

セイバーを呼び出すことも考えられるが、令呪を使わせる暇を与える気はないし、呼んだとしても瞬時に退却すればいい。最悪でもセイバーを御す力がひとつ減るのだから戦果としては十分だ。

そして切嗣が逃げた廊下に入るフォックスだが、その表情が驚愕に変わる。

廊下の奥で、切嗣がバレットＭ８２を伏せ撃ちの状態で構えていたのだ。

あの時武器商人ビクトルは、戦いの余波を受けることはなく逃げたのだが、その際お得意様への置土産として、唯一無事だった”商品”を床に固定する形でセットしていたのだ。

瞬間――――２ｋｍ先の人間の体をも消し飛ばす１２．７ｘ９９ｍｍ徹甲弾が火を吹いた。一直線の廊下に逃げ場はない。……ならばやることはひとつ。

彼が得意とする『物質への魔力の伝導』。数多の物質の中でも最も構造を知り尽くした”己の肉体”のスペックを最大にする。

刹那――――瞬きよりも速い超音速で放たれた対物ライフル弾は、破壊不可能の最強金属で拵えた刃の一刀の前に、真っ二つとなった。衝撃波でフォックスの体がたたらを踏む。

だが切嗣の攻撃はそこで終わりではなかった。いや……むしろこれこそが本命。彼が持つ唯一にして最強のただ一発だけの対魔術師礼装を放つべく、愛銃コンテンダー・カスタムを構える。

切嗣の起源は『切断と結合』の複合属性。この特異極まる彼の起源は、必ずしも『破壊と修復』を意味しない。何故なら切れた糸を結べば、結び目の部分だけが他よりも太くなり、結果的に全体の長さは短くなる。つまりそこに”変質”が生じてしまうのだ。

そして切嗣はこの起源を最大限戦闘に活用することにした。自らの十二肋骨を切除し、粉状にすり潰したそれを仕込んだ四十九発の魔弾。それこそが衛宮切嗣の最強にして、彼の『魔術師殺し』の名を象徴する切り札『起源弾』である。

この『起源弾』を撃ち込まれた人間は、体に切嗣の起源が具現化する。常人が食らえば、被弾した部位が一旦破壊され、古傷の様に癒着する。……が彼の起源によって、繊細な毛細血管や神経は元通りにはならず機能を失ってしまう。

そしてこれが魔術師に放たれた場合のダメージは、より深刻なものになる。もし僅かでも被弾すれば、通常の体組織だけでなく魔術回路にまで”変質”が生じ、回路としての用を成さなくなる。魔術師の命とも言える魔術回路は緻密にして繊細であるため少しでもその流れが乱れたら、さながら高圧電線がショートするように、全身をめぐる魔力が暴走し、即死、あるいは確実に人並みの機能を失わせるという正に魔術師にとって天敵とも言える性能を誇っていた。

さらにこの弾丸の脅威はそれだけではない。この改造コンテンダーの使用弾薬である３０－０６スプリングフィールド弾――この本

来ライフル専用である大威力の弾頭を防ぐ手段というのは基本的に存在しない。もし魔術によって防げば、術式を通して術者の肉体にフィードバックしてしまうし、物理的に防ごうとすれば、分厚い特殊合金製の盾でも持っていなければ確実にその餌食となってしまうというおよそ隙のない概念武装といえよう。

そして港場での戦いを見ていた切嗣は、この切り札はシルバー・フォックスに有効という結論を下していた。いくら再生すると言っても全身の魔術回路が一斉にダメになれば、治るのにはタイムラグが生じるのは間違いない。それだけの隙があれば、今度こそバレットM82を直撃させて全身を吹っ飛ばせる。そこまでの深刻なダメージを受ければ、さすがにただでは済まないだろう。逃げ場がない廊下で、しかも僅かとはいえ体勢を崩している今の状態で、通常の銃弾の倍以上の弾速を誇るこの弾が命中する確率は高い。さらに敵が魔力という電気を全力で使用している今こそが、この礼装が最も威力を発揮する好機。

だがフォックスの行動はまたしても切嗣の予想を上回るものだった

――――

放たれた魔弾がフォックスに当たることは無かった。彼はその場からは動かず、上半身をさながらマトリックスのようにのけぞらせて避けたのだ。

全身の魔力を総動員した身体強化で体中が軋みをあげるが、あの魔弾を食らうよりは百倍はマシな結果だろう。現に、魔術の反動によるダメージは一瞬で再生した。

フォックスも『起源弾』の自身への有用性には気付いていた。故に、これまでの戦いでもそれだけを警戒し、同時に対策として彼は弾を受けないという選択をした。およそほぼ全ての魔術師には不可能な芸当だろうが、それが最も自分に合った対処法というのがフォックスの結論だった。某赤い彗星ではないが、当たらなければどうということはない。

そして切嗣は状況がほぼ詰んだことを理解していた。『起源弾』はコンテンダーの単発式という構造上、一発ごとに弾込めが必要となる。そんな暇は当然ながら無いし、既に敵は体勢を立て直してこっちに向かってきている。小銃の弾幕は、多少ダメージを度外視して突っ込まれればその時点でアウトだ。

だが切嗣の幸運はまだ続いた。

ひょっとしたらこの時、原作での主人公補正が働いたのかもしれない。後でフォックスがそう疑うほど完璧なタイミングだった。

咄嗟にフォックスは疾走から一転――――後方へと飛び退く。その進行ルートには、ドアをぶち抜いて飛んできた六本の『黒鍵（こっけん）』が突き刺さっていた。

そして動く必要のなかった切嗣は黒鍵が飛んできた方向に目を向けた。

「逢いたかった……逢いたかったぞ、衛宮切嗣」

「……言峰……綺礼――――」

## 第十話　マスター達の三角関係にて（前書き）

十話です。
ちょっと体調崩してまとめるのに手間取ってしまいました。

## 第十話　マスター達の三角関係にて

ヒーロー……という表現がある。

それは様々な定義づけがされるものの、万国共通で用いられる手法に『ピンチに颯爽と駆け付ける』というものがある。今の綺礼のポジションが正にそれだろう。

沈黙が降りる中、フォックスは状況のマズさに歯噛みしていた。よりにもよってこのタイミングで……。ラスボスだろお前はと盛大にツッコミたい。

「私は神というものを特に信じたことはないが……」

屈強なガタイを神父服で包んだ代行者は歩を進める。その恍惚とした表情は、万年仏頂面の彼と同一人物とは思えない。

「今ならば神を信じ、そして心からの感謝を捧げることが出来る。こんなにも早くお前と巡り合わせてくれるとはな……。最も、邪魔者もいるようだが……」

チラリ、と綺礼はフォックスを一瞥するが、すぐに切嗣に向き合う。

「衛宮切嗣。この瞬間をずっと待っていた。お前と対峙できるこの時を……。教えて欲しい……お前は九年前、何を掴んだのだ？」

切嗣はこの男の言っていることが理解できなかった。九年前と言えば自分がアインツベルンに招かれたことだろうが、どうも要領を得

ない。

「時臣師はお前のことを金銭目当てのフリーランスと言っていた。金のためならどんな悪辣な手段も平然と行える外道だと。だが……それは断じて違う。お前は”答え”を求めてあのような苛烈な戦いを続けてきたのだろう？そしてソレを見つけた。違うか？」

まるで縋る様に問いかける綺礼を訝しげに見る切嗣。この男は何を言っている？

「さぁ、教えてくれ！　戦いの果てに、アインツベルンとの邂逅の果てに、お前は何を掴んだのだ！？　お前はそれを知るためにあのような形で巡礼を続けたのだろう！？　そして”答え”を得た！これを問うためだけに私はこんなくだらん闘争に身を投じたのだ！！」

言峰綺礼は、父親と同じ敬虔ではあっても狂信者ではない、というのが周りの認識である。だが今の綺礼は明らかに狂っていた。いや、慟哭というべきなのかもしれない。

自分を救える……その可能性を持つただひとりの男への渇望。何一つとして価値を見いだせなかった自分の歪みを、その正体をきっとこの男は知っている。

期待に身を躍らせる綺礼への返答は、別方向からの投擲だった。

先程自分が放った黒鍵。それが再び刀身を編まれ、無粋な輩の手によって持ち主に牙をむいた。

人体を貫く威力のそれを、綺礼は難なく躱すが、その顔は対話を中

断されたことによって親の敵でも見るかのように歪んでいた。

「ふむ、忌々しいことこの上ないが、このままではゆっくり問答もできんのは事実か……」

言い放つと綺礼は即座に黒鍵を両手に構え、切嗣を庇う形で立ち位置を変える。

「衛宮切嗣、ここはひとまず共闘しよう。私にはお前が必要なのだ。ここでむざむざ敗退するというのは許容し難い。もしこの場を生き残れたら、一度だけでいい……私との対話の機会を望む」

「……いいだろう。お前が何を言いたいのかはまだはっきりしないが、生きていたらそれくらいの時間は割こう」

この男が、何故自分にこれほど強烈な執着を見せるのかはわからない。だが明らかに、言っていることが心からの本心だということはわかる。

既に固有時制御は使えない……ならば精々利用させてもらおうというのが切嗣の結論だった。

その返答に綺礼は歓喜に満ちた表情で”敵”に向き合う。当然だが笑いながら武器を向けられているフォックスにとっては、気持ち悪いことこの上ない。

余談だが、この邂逅は綺礼にとっても全くの偶然に近いものだった。港場での戦いから、ランサーに傷を負わされたセイバーの陣営であ

る衛宮切嗣が、すぐさまランサーのマスターであるケイネスを排除すべく何らかのアクションを起こすのは彼にも容易に推測が付いた。故に綺礼はケイネスの拠点の周りに複数のアサシンを置き、自身も教会を抜け出して切嗣が待機していると思われる建設途中の高層ビルで網をはっていたのだが、途中アサシンの一体が切嗣とフォックスの戦闘を発見したことを伝えてきたのだ。

この報告に綺礼は脱兎の如き勢いで戦場であるビルに向かい、現場に駆けつけ今に至る、ということであった。

言峰綺礼……衛宮切嗣が、そしてシルバー・フォックスが今回最も危険視している男。故に、即座に迎撃に移ったフォックスだったが状況は最悪な方向に走っていた。原作最凶の仇敵であるこの二人が手を組むという……まるで悪夢のような光景だ。

だが、この場から退くというのも彼の選択肢にはない。

何故この男がここにいるのかはわからないが、これはチャンスだ。言峰綺礼はフォックスの中では最優先の排除対象の一人。教会に匿われていては手が出せないが、こうして自分から出てきたのであれば遠慮なく始末できる。何より、この男にはまだ”覚醒”してもらっては困るのだ。

もしこの衛宮切嗣との早すぎる出会いが、綺礼に自分の本質を気付かせるキッカケにでもなったら最悪の結果だ。それほどフォックスにとって有利な状況では無いが、是が非にでもここで仕留めておきたい。

自身のサーヴァントは儀式の準備中で呼び出せないが、綺礼もアサシンを呼ぶことはできないだろう。既に消滅したということになっているのは周知の事実であり、そもそも教会に匿われている彼がこうして出てきたこと自体問題なのだ。最もいざとなったら切嗣のために呼び出すかもしれないが、軽率なマネは出来まい。

かくして、戦端は開かれた――――

先手は綺礼。両手に三本ずつ構えた黒鍵を一気に投擲する。

黒鍵は聖堂教会代行者の基本装備のひとつだが、扱いが難しいため、完璧に使いこなせるのはほんの一握りしか存在しない。綺礼はその数少ない使い手の一人であり、その腕は若くして達人の域にあった。

対してフォックスの判断は突貫。

小銃と違って黒鍵は広く弾幕を張れない。故にフォックスは全高が５０ｃｍ以下になるまで体勢を低く落し、そのまま豹の如き勢いで綺礼に迫る。

接触と同時にフォックスは斬撃の嵐を繰り出すが、綺礼は持ち前の八極拳の腕前でそれらを何とか凌ぎきった。だが、完全に防御に専念しても全てを防ぐことはできない。既に綺礼は、浅いが二十近い傷をその身に負っていた。

だがフォックスも止めまでは刺せなかった。今の攻防の隙に移動し

た切嗣が、絶妙のタイミングで援護射撃をしたからだ。

咄嗟に銃弾を避けたフォックスだが、今度は綺礼の反撃だった。抜き打ちの如き勢いで、四本の黒鍵を投げ放つ。

慌てずに命中する分の黒鍵をフォックスは切り落とすが、そこに付加された威力は絶大で、僅かだが腕が痺れる。

体勢を立て直し、改めて接近して討ち取ろうとするフォックスだが、綺礼は近接戦ではあくまで防御と回避に徹し、致命傷だけは避けるように斬撃を受け流す。それでも通常なら、数秒も持たずに首をはねられるだろうが、共闘関係にある切嗣の絶妙な援護でフォックスは仕留めきれないでいる。原作最悪の相性を誇るこの二人のコンビネーションは、即席とは思えないほど息がピッタリだった。

しかしここで進展があった。これまで接近戦では一切攻撃してこなかった綺礼が、突如拳打での反撃を繰り出してきたのだ。

代行者たる綺礼のパンチは文字通り凶器である。故にフォックスは拳ではなくその手首を掴み、背負い投げの要領で綺礼の巨体を投げ飛ばした。

特大の人間砲弾と化した綺礼は、叩きつけられた壁を二つほどぶち抜き倒れ伏した。すぐさま立ち上がるがその表情には苦痛が窺える。骨と内蔵は筋肉に守られて無事だったが、それなりのダメージを負ったのは間違いない。

だがこれこそが、綺礼の捨て身にして最大の策だった。今の一瞬の動作で生まれた隙を、切嗣が見逃すはずがない。

気がついたときには既に魔弾は放たれていた。剣を持っていない……投げた方の左腕。空となり動きを止めたその肘へと『起源弾』は命中した。

勝った――――おそらくそれは切嗣だけでなく綺礼も抱いた感想だっただろう。だがフォックスの行動はさらに彼らの想像の斜め上をいった。彼とて被弾してからの対策を考えていなかったわけではない。

着弾とほぼ同時――――いや、僅かに速くフォックスは左腕を切り落とした。

この行動には切嗣だけでなく綺礼も一瞬だが驚愕の表情を浮かべた。毒が廻る前にその部位を本体から切り離せば、体全体への影響は避ける。胴体や脚に着弾すればこの手は使えないが、今の動作で停止した左腕を狙ってくるのは予想がついていたため、こうして不発にすることが出来たのだ。

フォックスはたとえ腕一本を無くしても、六秒もあれば自己再生が出来る。故に治るまでの時間を稼ぐべく二人から距離をとったが、それは完全な……この場の誰も予想できない誤ちだった。

次の瞬間――――ビル内は爆発に包まれた

――――――――――――――――――――

「ハッ……ハッ……ハッ……」

既に切嗣は戦場から離脱していた。

あの時室内に撃ち込まれた爆発は、彼の相棒――久宇舞弥が援護として放った、携行式地対地ミサイルＦＧＭ－１４８ジャベリンによる一撃であった。

あの『死徒殺し』があの程度で死んだとも思えないが、こうして追って来なかったところを見るに、それなりの深手を負ったのは間違いないだろう。

ここならば安全。そう判断出来る所まで逃げきった切嗣は、暫く呼吸を整えることに専念した。

「切嗣！」

近づいてくるのは舞弥だ。常に無表情の彼女が、わかりやすく焦りの顔を見せている。

「ありがとう舞弥。助かった」

「いえ、それより一刻も早く治療を……」

舞弥の言う通り、今の切嗣の身体はボロボロだった。

固有時制御の連発に加え、言峰綺礼と共闘しての連戦……。さらに

ここまで逃げてくるのにもかなり全力で走り続けたため、肉体の消耗は激しい。すぐに休息と治療が必要だ。

「舞弥、ひとまず例の二つ目の拠点で傷を癒す……。君はアイリとセイバーの所に向かい、事情の説明を頼む」

「了解しました……」

予定外の戦いでダメージを負ってしまった。ケイネス・エルメロイ・アーチボルトのホテル倒壊が上手くいったのはせめてもの僥倖だったが、まだ生死の確認は出来ていない。もし死んでいなかったら新たに対策を立てる必要がある。だが切嗣はすぐに頭を切り替えることが出来なかった。

言峰綺礼……あの男が自分に見せた、異様な執着……。そして投げかけた言葉……あれが今も切嗣の耳朶に残っていた。

『何を掴んだのか……』

その意味はあの場では理解出来なかったが、今改めて咀嚼すると、どことなく心当たりが無いでもない。

一人でも多くの命を救うため、考えうる限りの……それこそ外道の二文字でしか形容しようのない手段も使って、切嗣は生命の救済行為を続けてきた。

そして九年前、アインツベルンに雇われマスターとして招かれ、人類最後の流血とすべく挑むことを決めた聖杯戦争……。果たして言峰綺礼の問いかけの意味とはコレだったのだろうか……。

黙考を続けながらも切嗣は、やることをやるべく拠点のひとつである武家屋敷へと向かっていった。

――――――――――――――――――――――――

「グッ……一歩間違えたら死んでたかも……」

瓦礫の中から這いずり出てきたのは…勿論フォックスである。その身体は両腕が途中から無くなり、内臓のいくつかがはみ出て、火傷からはジュージューと焼肉の様に煙を出している。

だが数秒後には、巻き戻しのような速さで腕が生え、内蔵も引っ込み、細身ながらも鍛え上がった綺麗な身体がそこにあった。治ると同時に半裸状態となった服を、魔術で修復する。

あの時咄嗟に弱点である頭部だけは守ったが、正直死ぬかと思った。まさか歩兵式ミサイルを撃ち込んでくるとは……。

完全に廃墟と化したビルの中で、フォックスは己の失態を悔いていた。衛宮切嗣を逃がし、言峰綺礼を仕留めそこねた……何が『死徒殺し』か。

『ご主人様（マスター）、ご無事ですか～？』

ふと、キャスターからの念話がはいる。ということは儀式の準備が

出来たということか。

「ああ大丈夫、これから帰宅するよ。目的は果たせなかった……すまない」

『いえ、御無事ならそれで何よりです。あと、例のマスターの男性がそろそろ起きそうですよ」

「分かった。なら帰って交渉に移るとするよ」

成果は出せなかった。だが一歩前進もしている。帰ってあの男――――間桐雁夜が要求に応じれば、かなりの光明となるはずだ。

民衆が爆発を嗅ぎつけない内に、フォックスはビルを去っていった。

## 第十話　マスター達の三角関係にて（後書き）

すみません。綺礼が鉄甲作用使ってるシーンがありましたけど、あれって埋葬機関の秘伝だから違いますよね。訂正しました。

## 第十一話　王と神父の問答にて（前書き）

十一話です。
今回は、ほぼ原作そのままの流れです。

## 第十一話　王と神父の問答にて

言峰綺礼は上機嫌だった。

あの戦いの後、綺礼はすぐに冬木教会へと帰還し、時臣から教会を抜け出たことを詰問されたが、小うるさい間諜に目をつけられたため、やむをえず自らの手で始末したということで言い訳をつけた。弟子として限りない信頼を綺礼に向けている時臣はそれをあっさり信じ、特に深い追求もせず今後の注意を呼び掛けるだけにとどまった。

師匠に無断で外出をし、なおかつ嘘をついた形の綺礼だったが、罪悪感のようなものは毛ほども感じていなかった。それだけの成果があったのだ。

表情にこそ出さないが、口約束だけでもあの男に対話の約束を取り付けられたのは、綺礼にとって大きな収穫だった。恐らくこれからも勝手に教会を抜け出すことになるだろうが、”答え”を得るためにはそんなことは些細な問題だ。何としても、衛宮切嗣ともう一度会わなければ……。

（今後は衛宮切嗣と再び見えるのが至上命題だが、場所が分からなければどうしようもない。アインツベルンの古城は結界が張られて容易には近づけんし、あの傷では暫くは動けんだろう。……となれば、ひとまずはアサシンの情報収集に徹しておとなしくしているのが賢明か。余り不用意に教会を出るのも得策とは言えな……ん？）

思考を続けながら綺礼はふと違和感に気付いた。

教会にあてがわれた自分の部屋。その扉が僅かに開き、隙間から華やかな雰囲気を醸し出している。

訝しみながら中に入る綺礼だが、原因はすぐに見つかった。

「――――アーチャー？」

黄金の頭髪にルビーの如く輝く双眸。さらに神の血が混じった人にあらざる美貌は、時臣のサーヴァント――――アーチャーことギルガメッシュである。その姿は普段のオールゴールドな甲冑ではなく、エナメルのジャケットにレザーパンツという現代風の服装だが、全身から発せられる黄金の王気（オーラ）は、質素であるはずの綺礼の私室を煌々と照らしていた。

「ふむ、別段天上の美酒とまではいかんが、僧侶の倉で腐らせておくには勿体ないものばかりだな」

そう言いながらアーチャーは勝手にキャビネットから引っ張り出した綺礼のワインを批評する。

不法侵入に加え、私物を物色しているこの英雄王に綺礼は何やら早々に諦めの念を感じていた。単独行動スキルに物言わせてあちこちに出向いているというのは時臣から聞いていたが、まさか自分の部屋にやってくるとは……。

「一体、何の用だ？」

硬い口調で問うと、アーチャーは利き酒を中断して意味ありげな視線を綺礼に向ける。

「退屈を持て余している者が、我(オレ)の他にもいるようだったのでな」

「退屈？」

その言葉の意味に綺礼はすぐ得心がいった。何故かは不明だがこのサーヴァントは、綺礼が時臣の意にそぐわない行動をとったことに気付いているらしい。

「どうなのだ綺礼とやら？　お前も、あの時臣に奉仕するばかりで心満たされているわけではないのだろう？」

「……今更契約が不服になったのか？　ギルガメッシュ」

綺礼は時臣のようにアーチャーに臣下の礼はとっていない。いくら人類最古の英雄王といえど、時臣のサーヴァントであるという事は間違いないのだから、時臣の弟子である自分と比べてもせいぜい同格の立場がいいところだろうと綺礼は考えていた。

そんな綺礼の態度にアーチャーは特に機嫌を損ねた様子もなく酒を呷る。

「我(オレ)を招いたのは時臣だし、この身の現界を保っているのも時臣の供物によるものだ。そして何よりも奴は臣下の礼をとっている。まぁ、答えたやらんわけにもいくまい」

意外に律儀な発言に綺礼は内心で少々驚いた。どうやらこの王は、礼を尽くす相手に報いてやるくらいの情はあるらしい。

「だが正直、あそこまで退屈な男とは思わなんだ。万能の願望器を以てして『根源の渦』に至る、だと？　つくづくつまらん企てがあ

ったものだな」

マスターの悲願を一蹴する発言に綺礼は嘆息するが、同時にその気持ちも僅かに理解できた。

「『根源』への到達は魔術師固有のものだ。あれは部外者がとやかく言えるものではない」

「そういうお前も部外者だそうだな綺礼。――――しかも聞くところによれば、本来は魔術師共とは対立する立場にあるそうではないか」

派遣という形ではあるが、綺礼は時臣の弟子である。この教会の人間でありながら魔術師という複雑な立場の話は、アーチャーの耳にも入っていた。

「『根源』に至る、ということは、すなわち世界の”外側”に逸脱するということだ。それによって”内側”のこの世界に何か影響が出るわけでもない。だから”内側”の視野しか持たない教会(われわれ)にとっては魔術師の企てはつまらないものとしか映らない」

「成程な。確かに我(オレ)は、我(オレ)の庭たるこの世界以外は何の興味もない。『根源』とやらにも関心は湧かぬ」

確かにかつて世界の全てを手に入れたこの王からすれば、つまらないの一言だろう。改めて考えると、魔術師の鑑である時臣とこのアーチャーの相性は最悪の部類かもしれない。

「もし冬木の聖杯が『根源』に至るためだけの装置なら、聖堂教会は放任していただろう。だが不幸にも聖杯は”万能”であった。世界の”内側”をも無限に改変しうる可能性を持つ、正に我々にとっ

ては極めつけの異端だ。だからこそ教会は遠坂に肩入れした。万能の願望器を”無意味でつまらない”用途に使い潰してくれるのならそれに越したことはないからな。———もっとも私の父には、それとは別の私情もあるようだが」

「では時臣以外のマスター共は、また違った動機で聖杯を求めているということか？」

「時臣師は魔術師の典型であると同時に最右翼だ。今日日（きょうび）、あれほど純粋に魔術の本道を貫いている者はそうはいるまい。他の連中が求めているのは総じて浮世の名利であろうよ。威信、欲望、権力、……すべて世界の”内側”に完結する願いだ」

「結構ではないか。どれも我（オレ）が愛でるものばかりだぞ」

「お前こそは俗物の頂点に君臨する王だったな。ギルガメッシュ」

そんな綺礼の評価にアーチャーは不敵に笑い、グラスのワインを飲み干す。

「そういうお前はどうなのだ？　綺礼、お前は聖杯に何を望む？」

「私か？———私には……別段望むところなど、ない」

突然の質問に虚をつかれた形の綺礼は、迷いを含んだ口調で返答した。その様子にアーチャーが妖しく笑みを浮かべる。

「それはあるまい。聖杯は、それを手にするに足る者のみを招き寄せるのではなかったか？」

「そのはずだ。が……私にもわからない。成就すべき理想も、遂げるべき悲願もない私が、何故この戦いに選ばれたのか？」

その問いは綺礼もずっと考えていたことだった。聖杯への願いもなく、魔術師ですらない自分が何故あれほど早くに令呪を宿したのか……。

戦いに臨む意義というものはある。衛宮切嗣との対話……綺礼が求めるものと言えばそれくらいだが。

「それは迷うほどの難題でもあるまい。理想もなく、悲願もない。ならば愉悦を望めばいいだけのことではないか」

「馬鹿な！」

叫んだのはほとんど反射的なものだった。

「神に仕えるこの私に、よりにもよって愉悦など――――そんな罪深い堕落に手を染めよというのか？」

「ククッ、これはまた飛躍だな、綺礼。何故愉悦が罪と結びつく？」

「それは……」

返答に窮する綺礼。同時に、何故自分はこれほど声を荒げたのか解らず押し黙る。

そんな綺礼の狼狽にアーチャーは面白そうに話を続ける。

「なるほど悪行で得た愉悦は罪かもしれん。だが人は善行によって

も喜びを得る。悦そのものが悪であるというのは、一体どういう理屈だ？」

何故この程度のことを言い返せないのか綺礼は解らなかった。同時に、ただでさえ空虚な自身の心にまた新たな空洞が生まれたような気がした。

「――――愉悦もまた、私の内にはない。求めてはいるが、見つからない」

搾り出すように答えたその声には自信が感じられない。そんな綺礼の様子に益々アーチャーは興味深そうな笑みを浮かべる。

「ふむ、綺礼よ。どうやらお前は、まずは娯楽というもの知るべきであろうな」

「娯楽――――だと？」

「そうだ、お前はまだ己の魂の在り方が見えていない。だから愉悦を持ち合わせておらんなどと抜かすのだ。……そうだな、手始めに我(オレ)の娯楽に付き合うところから始めてはどうだ？」

「今の私には、遊興に費やしていられる時間などない……」

「まぁそう言うな。何、時臣に課された任務の片手間に出来ることだ。綺礼、お前は他の五人のマスターに間諜を放つのが役目であろう？」

「……確かに、そうだが」

「ならば連中の意図や戦略だけでなく、その動機についても調べ上げるのだ。そして我(オレ)に語りきかせろ。造作もないことであろう？」

確かにその程度なら、監視担当のアサシンに追加事項として言い含めておけば十分可能だろう。

「――しかしアーチャー、そんなことを聞いてどうするというのだ？」

「言ったであろう？　我(オレ)は人の業を愛でる。条理を捻じ曲げ、奇跡にまで縋ろうとする度し難い願望の持ち主が五人も雁首を揃えておるのだ。しかも内一人は英霊ともやりあうような輩もおるのだろう？　ならば一人か二人くらいは面白みのあるやつが混じっているさ。少なくとも時臣よりは幾分かマシであろうしな」

綺礼はしばらく熟考した。依頼自体はそれほど難しいものではない。ならばここで請けてこのサーヴァントに何らかの影響力を持っておければ、将来的に自分たちの陣営にプラスに働くかもしれないと結論づけた。

「……いいだろうアーチャー。請け負った。ただし、それなりに時間はかかる」

「構わぬ。気長に待つとする。あぁ、そう言えばもう一つ。綺礼よ、例のサーヴァントとやりあったマスターについて教えろ」

突然の話題転換に綺礼は面食らった。だがアーチャーは構わず進める。

「例の男……たしか『死徒殺し』とか言ったか？　時臣が言うには

魔術師どもよりも教会(お前たち)の方が詳しいそうだが」

「確かに……彼は教会ではそれなりに有名人だ」

『死徒殺し』シルバー・フォックス。彼を一躍有名にしたのは、やはり四年前の、例の二十七祖クラスの死徒を単独で葬った件だろう。あれ以来教会は彼に仕事を依頼することもあり、代行者である綺礼もその名前は聞いていた。もっとも、直接見たのは今回が初めてだったが。

「だがアーチャー、何故お前が彼のことを気にする？」

「何、聞くところによれば奴は人間(ヒト)でありながら宝具とも打ち合える武器を持っているそうではないか。ならばもしかすれば我(オレ)の宝物庫に加える価値があるかもしれん。綺礼、そのへんも追加で調べておけ」

言うだけ言うとアーチャーはさっさと部屋を出ていった。一人取り残された綺礼は、また妙なことになったものだとため息を吐き、同時に、あの傍若無人が固まってできたような男に目をつけられた『死徒殺し』に、少しばかり同情した。

## 第十二話　交渉と屋根の上にて（前書き）

お待たせです。
心理描写って難しすぎる……あんまり上手くまとまらなかったかも……。

## 第十二話　交渉と屋根の上にて

「……知らない天井だ……」

よくある転生ものの主人公のようなセリフで目を覚ましたのは、間桐雁夜―――今回の間桐陣営の参加者にして、バーサーカーのマスターである。

徐々に意識が覚醒してくるが、同時に言いようのない不安感が襲ってくる。寝ているのは普通のベッドだが、周りに結界のようなものが張られてて出られない。ここは何処だ？

（見た限り普通のアパート風の部屋だけど……俺の知っているとこじゃない。そもそも俺はどうしたんだっけか……）

落ち着いて雁夜は記憶を探っていく……そして思い出すのは港場での戦い。バーサーカーに魔力を供給させるために活動した刻印虫の反動で動けなくなったところで、突然意識が途絶えた所までは覚えている。

……ということは、ここはまさか！？

「あ！　目が覚めましたか！？」

鈴のような可愛らしい声で叫んだのは、キャスター。その姿は雁夜も確認済みだ。

本能的に飛び起きようとするが、突如全身に激痛が走る。

「あんまり動かないで下さい。まだ完全に治癒は済んでません。それにこの結界からは出られませんから、無理しない方がいいですよ」

「……どういう……ことだ……何で」

「だから動かないで下さい。もうすぐご主人様（マスター）が帰ってきますから、その時に説明しま……っと、来ましたね」

キャスターの言う通り部屋の扉が開かれ、一人の青年が入ってきた。シルバー・フォックスである。いつもは結ばれているその長髪も、今は降ろされていた。

「ただいまキャスター。それと、起きたか間桐雁夜」

「キャスターの……マスターか」

最悪だ……。敵のマスターに自分が囚われている。これがどのような意味を持つかわからない雁夜ではない。

「一応言っておくが、令呪を使ってバーサーカーを呼んでも無駄だ」

その通りだろうと雁夜は出かかった舌打ちを抑える。

まだバーサーカーは、ライダーに受けた傷が治っていまい。呼び出しても戦えない。それ以前に令呪を使う暇さえ与えてはくれないだろう。

ならば何故こんな状況になったのかを訊くのが、雁夜のやるべきこ

とだ。

「ここは、何処だ？」

「俺たちの拠点の一つだ。港場での戦いの後にお前を捕まえて、ここに連れて来させてもらった」

「どうやって……俺を見つけたんだ？」

刻印虫を疑似魔術回路として体内に寄生させ、無理やり魔術師となった雁夜は、ただ魔力を生成するだけでも、体内を暴れ狂う虫によって死ぬほどの激痛を味わう。さらに使える魔術も、間桐の虫をいくつか操れるだけというお粗末極まりないもので、そんな彼がサーヴァント同士の戦いでマスターとして前線に立ってもまともに戦えるはずがない。それ以前に雁夜のサーヴァントは制御がまるで利かないバーサーカーである。よって雁夜は、戦いはバーサーカーという狂戦士に好きなように暴れまわらせ、自身は敵と遭遇しないよう身を隠すことに専念するという戦術をとっていた。

実際港場でも終始下水道に隠れて見つからないようにしていたというのに、どうして出てきた自分をピンポイントで発見できたのか、雁夜にはまるで見当がつかなかった。

「キャスターがバーサーカーに炎を撃っただろう？　あの時魔力の供給先を示す発信器のようなものをバーサーカーにつけさせてもらった」

フォックスのプランにバーサーカーは必要不可欠な存在だが、手に入れるためには本来のマスターである雁夜の協力がどうしても必要になる。ところが隠身に徹している雁夜の行方は調べてみてもさっ

ぱりだった。そのために、わざわざ戦闘が苦手なキャスターを伴ってあの場に現れたのだ。

「取引だ、間桐雁夜。バーサーカーのマスター権を俺に譲渡しろ。その代わり間桐桜の救出と、間桐臓硯の殺害を引き受けよう」

「何だって？」

その言葉に雁夜は虚をつかれた。

バーサーカーの譲渡というのはまだわかるが、今この男が言ったのは彼が聖杯戦争に参加した理由の一つ。何故それを知っている？

「お前のことは調べさせてもらった。間桐の魔術を嫌って家を出たものの、代わりに遠坂家から養子として来た桜という少女を開放すべく、僅か一年で無理やりマスターとなり、聖杯を間桐臓硯に持ち帰ろうとしている、だったか？」

その説明にはほぼ間違いはない。どう調べたのかはわからないが、この男はかなり自分の事情を把握しているようだ。

「何が……目的だ？」

そう問わずにはいられなかった。桜の救出と臓硯の抹殺、二つとも雁夜の悲願と言ってもいいことだが、何故それを引き受けるなどと、人助けのようなことを言うのか。この男も魔術師であるのならあまりにもらしくない提案だ。

「出来れば自主的にアンタの協力を得たい。それに間桐臓硯には個人的にも用があってな、元々間桐邸には乗り込むつもりだった。間

桐桜の救出は……まぁ、報酬兼若干お節介ってとこだな。信じるは否かは任せるが、条件自体は破格だと思ってる」

「だが、あの妖怪を……」

「俺たちの実力は、もう見せたはずだが」

確かに見た。槍兵のサーヴァントと渡り合うマスターと、魔術師の英霊ともなれば間桐の結界も大した意味は成すまい。臓硯を殺すのも難しくないかもしれない。だが……

「無理だろう。知ってるかもしれないが、俺の体には臓硯の刻印虫が埋め込まれている。こうしてお前らと話していることも、アイツには筒抜けのハズだ」

「あぁ、それなら大丈夫だ。今お前が寝てるベッドの結界……これはキャスターが張ってくれたものなんだが、これでお前と臓硯のリンクを断っている」

その返答に雁夜は驚く。どうやらこのペアは随分と用意周到に準備をしているらしい。ならば答えはほぼ決まりだろう。確かに交渉の内容は雁夜にとってありがたいものばかりだ。本当か嘘かはともかく、どの道こうして敵の拠点に連れてこられた以上、自分に断る要素は無い。

「いいだろう、取引に応じる。だけどこちらからも条件がある。まず、バーサーカーを渡すのは桜ちゃんの救出と臓硯を殺すのが終わってからだ。それと、桜ちゃんの身の安全を保証しろ」

「わかった。しかしアンタも大した人だな。ここで自分ではなく女

の子の心配をするとは」

「別に死にたいわけじゃない。単に優先順位の問題だ」

実を言うと雁夜にはもう一つ目的があった。桜の本当の父であり、彼女を養子に出した遠坂時臣への復讐である。出来れば……いや何としてでもあの男に一泡吹かせてやりたかった。桜を間桐に差し出し、その末に彼女が味わった地獄の苦痛と現実を叩きつけてやりたかった。

だがそれでも、やはり桜を助ける方が雁夜にとっては重要事項だった。この契約の末に自分の命があるかどうかはわからない。それでもあの子と約束したのだ。凛と葵にもう一度会わせてあげると……そこに自分はいないかもしれないが、命を賭けるだけの価値はそれだけで十分ある。

「交渉成立だな。ならば早いほうがいいだろう。アンタを連れてきてもう丸一日経ってるから、あの御老人も不審に思っているに違いない」

「……何だって？　俺はそんなに寝ていたのか？」

「あぁ、ここに運んで出来るだけの治療を施したが、一向に目覚めなくてな、もうダメかもと思ったぞ」

正直なところ確保した時の雁夜の状態は、治癒魔術に優れたフォックスから見ても死にかけもいいところで、何で生きているのか不思議なくらいだった。あのまま放置していればおそらく半日も持たなかっただろう。計らずも雁夜は誘拐犯によって生きながらえた形だった。

「間桐邸には俺とキャスターで殴り込む。アンタはこのアパートでおとなしくしていてくれ。その傷では動けないからな。代わりにあの屋敷の結界や罠について知っているだけの情報がほしい」

「わかった……それじゃあ……」

――――――――――――――――――――――――

（今夜も異常は無いか……）

月明かりに照らされた深夜、フォックスはアパートの屋根の上で周囲を見張っていた。

闇夜でも遥か遠くまで見渡せる彼は、魔術による視力強化もあればアーチャー並みの範囲を視認できる。それ故、こうして夜に一度屋根に上がり警戒をするのは聖杯戦争では日課となっていた。

「お疲れ様です。ご主人様（マスター）」

すぐそばに霊体化していたキャスターが現れた。その姿は月光を浴びることで幻想的な美しさを放っている。雰囲気が自然と調和しているように見えるのは、やはり彼女が日本の英霊だからだろうか。

「彼は？」

「もう寝ちゃいました。やっぱり疲れきってたみたいですね」

無理もないだろう。あれから打ち合わせは滞り無く終えたが、身体は完治しておらず、しかも一時的に協力関係にあるとはいえ、ここは敵の本拠地である。本心ではいつ寝首を掻かれるか不安でしょうがないはずだ。肉体面だけでなく精神的にもピークに達していただろう。

「ご主人様（マスター）、何かお悩みですか？」

ふいにそんなことを訊いてくるキャスターに、フォックスは軽く驚いた表情になる。

「顔には出さない様にしてつもりなんだが……」

「甘いですよご主人様（マスター）。殿方が何を考えているかぐらい、私にはお見通しです」

そう言われてフォックスは己がサーヴァントの伝承を思い出す。

普段のノリの軽さから忘れがちになるが、生前のキャスターは大変な博識の持ち主でもあったという。天下一の美しさと、天下一の聡明さ……この二つを兼ね備えたのが「玉藻の前」であり、それ故に仕えた鳥羽上皇からの寵愛も非常に深いものだった。そして宮中の奥深くで女官として過ごしていた彼女なら、相手の考えていることぐらい顔を見るだけで看破するのも朝飯前だろう。

「……少し考えていた。俺がこの聖杯戦争に参加したことに……」

屋根に腰を下ろし、フォックスは滔々と語り始めた。キャスターも

隣に腰掛け、主人の言葉に黙って耳を傾ける。

「令呪がこの手に宿って……前世でのことを思い出して…俺は戦いに身を投じた。汚染された聖杯をなんとかするために。だが、本当にそれでよかったのか？それがわからないんだ……」

「……どういうことですかご主人様（マスター）？貴方の行動は間違いなく多くの命を救うことになります。そのために参加したご主人様（マスター）の意思が間違ってるなんて……」

「キャスター、俺は君が思っているほどまともな人間じゃないんだ……」

自嘲気味にフォックスは答える。

「確かに大災害は防ぎたいし、この馬鹿げた殺し合いを解体したいという気持ちは嘘じゃない。だがな、その程度の理由でこの戦争に参戦する気になってしまったのが問題なんだ」

人は誰でも自分の欲望のために動いている。それが魔術師ならば尚更だ。フォックスも決して理由なくしてこの戦争に参加したのではない。前世の故郷の……結末を知っていたから何とかしようと思った。それは世間一般で言う”人助け”だろう。

フォックスは魔術は使っても魔術師ではない。目的のためには手段を選ぶ。自分の良心と矜持が最も納得できるものを。そういう意味ではかなり人間的だ。だがこれでは、命を賭ける理由としてはあまりに希薄で軽すぎるだろう。それなのに平然と参戦している。

「俺は理不尽に死なないためにこの能力を選んだ。だがそれは、か

えって俺が歪む原因になってしまった」

肉体再生能力（ヒーリング・ファクター）は精神をも最適化する。それ故にフォックスは、恐怖という感情が普通の人間に比べて著しく欠けていた。いや、恐怖を感じないのではない。感じてなお、乗り越えられるようになってしまっていた。

これまで多くの戦いを経験した。だがどんなに吐き気を催す光景を見ても、それが彼の精神の許容量を超えることは無かった。血肉が飛び散り、腐った死体が食屍鬼（グール）となって襲いかかって来ても、眉をひそめることはあっても怯むことは無かった。どんな絶望的な状況でも、吐くことも、膝が震えることも無かった。しかもそれが初陣の時の話なのだから、異常としか言えない。

そんなあまりにも都合がいい、ある意味完成した精神（こころ）。だがそれは経験によるものではない。

能力によって自動的にパニックを抑制し、コントロールする。ルーキーでありながら歴戦の戦士と同じように戦える。それは人間ではなく、機械と言えるのかもしれない。

「死にたくない……という気持ちは間違いなく本物だ。だが死ぬのが怖いか？……と聞かれれば、上手く答えられない」

そもそも本当に死にたくないのなら、聖杯戦争など参加するべきではないのだ。それなのに参加してしまった。前世の知識を活かし、あの大災害を防ぎ、少しでも良い結末を迎えるために。

自分がお人好しなところがあるというのも自覚している。だがそれでも、これは違う気がする。

楽観的に考えているわけではない。危険性は十分理解しているし、最悪自分が死ぬ可能性も考慮している。それでも、リスクを鑑みてなお闘争に身を投じる。

まともな人間なら、それは愚かと言うか、あるいは恐怖を乗り越えてなお挑む勇者という評価をするかもしれない。だがフォックス自身はそのどちらとも違うだろうと考えていた。

「いや、もしかしたら俺は英霊（きみたち）に会いたかったのかもしれない。一度死んで、仮初とはいえ二つ目の命を与えられた君たちなら、こうして転生を果たした俺の本心を打ち明けられるかもと……」

もしそうなら、それはほとんど無意識の内に求めていたものなのだろう。この世界での生活に不満のようなものは感じていない。だが、唯一真相を知っていた師匠は死に、本当の意味で自分をわかっている者はいなくなった。こっちの両親にさえ嘘をつき続けていたのだ。

それが願いなら、叶ったのだろう。自分には過ぎた…事情を知ってなお協力してくれるパートナーを得ることができた。単に理解者が欲しかったのだとすれば、それは自分の小ささを自分で証明したような気分になる。

「ご主人様は罪の意識も感じるし、その責任も背負う覚悟をもって戦いに臨んでいるのでしょう？　なら誇っていいと私は思いますよ」

突如、今まで黙っていたキャスターが口を開いた。

「確かにご主人様には矛盾があります。死にたくないのに、回避できる闘争に身を投じる……それも人助けのために。いくら事前の知

識があるからって、ここが前世の故郷で愛着があるからって、それだけで恐怖も乗り越えて戦うご主人様は異常なのでしょう。でも、私に言わせれば最高の理由ですよ」

微笑を浮かべ、これまでで一番真剣に話すキャスターに、フォックスは目が離せなかった。

「ご主人様はご自身の理由が、戦う目的としては薄すぎると思っているのでしょうけど、私だって、ただ呼ぶ声がしたから召還に応じて出てきたってだけです。私の願いは人に仕えることですが、それはその人の行動が最終的に善いものである、と感じた方だけです。だから私はご主人様に全力で仕えるんです。貴方がどう思おうと、周りがどう言おうと、ご主人様のやろうとしていることはきっと正しい。胸を張っていいものだと、それは私が保証します。ご主人様が何者であれ、人として何かが壊れていても、それは私がご主人様を見捨てる理由にはならないんです。だから最後までお側にいさせてください……」

語り終えると同時に寄り添うキャスターを、フォックスはじっと見ていた。

同時に自分の小ささに改めて嘆息した。この程度のことでウジウジ悩んでいたとは……

パアンッ！！　と軽快に音が鳴り響く。それは気合を入れ直すべく頬を叩いた音だった。

「そうだな、何を悩む必要がある……」

先程の欝っぽい表情とは違う……数段も生き生きとした青年の顔が

そこにあった。

「別に後ろめたいことをしているわけじゃない。やっていることは、誇れることのはずだ。馬鹿げているだとか矛盾しているとか、そんなことはどうでもいい。歪み上等、変人上等。誰が何と言おうと、いずれ災厄をもたらすこの戦争を解体するのは、間違いじゃないはずだ」

活力がみなぎっていく主人の姿にキャスターは喜びの表情を浮かべる。あぁ、やっぱりこの人がマスターで良かった。自分は本当に幸運だ。

「ご主人様。お忘れかもしれませんが、ここは私にとっても前世の故郷なのですよ。となれば、私もそんな腐った聖杯なんて見逃せません！」

「ハハッ、そう言えばそうだったな。ありがとうキャスター。しかし、改めて考えてみると、俺と君は確かに相性が良かったんだろうな……」

「なっ！？　ご、ご主人様！　い、今のは”オレの嫁宣言”と見て、間違いありませんね！？」

はっ？　え！？　何その飛躍？

「あぁ～っ、もう録音しました！　もうぐるぐるです！　既に脳内再生数１０００回を超えています！」

「おい……キャスター？」

「コメント数なんてその十倍！　マイリスは私しかしてませんけど、むしろ私だけのメモリアルとして永久保存です！！」

喜びのあまり飛び起きて屋根をぴょんぴょんと跳ね回るキャスター。素晴らしいジャンプ力だなと益体もないことを考えながら、暴走気味の我が相棒を眺める。あの分じゃ屋根の下の人にとてつもなく迷惑な可能性が高い。

突如シリアス１００％な空気が一気に弛緩してしまったが、まぁこっちの方がいいだろう……うん、それは間違いない。

## 第十三話　正義の味方の苦悩にて（前書き）

遅くなりました。
今回は二話続けて投稿します。
いつの間にか４０万ＰＶ突破！ありがとうございます。

# 第十三話　正義の味方の苦悩にて

セイバーとアイリスフィールがその報せを受けたのは、数時間前だった。

衛宮切嗣の負傷。彼の相棒兼助手である久宇舞弥の口から告げられたその事実は、アイリスフィールは勿論、切嗣との軋轢に悩んでいたセイバーをも迷いなく急行させるには十分なもので、全速力でメルセデスを飛ばした二人は一時間足らずで用意された拠点に到着した。

冬木市内部の奥深く――――土地のオーナーである遠坂、間桐の拠点にも目と鼻の先にあたる位置にその拠点はあった。外見は歴史を感じさせる武家屋敷といった風情で、その敷地面積は現代の一軒家としてはかなりの広さを持っている。ここは別に、郊外の森にも最初から用意されたアインツベルンの城があるのだが、場所が割れているあそこでは、いつ襲撃を受けるか分かったものではない。その点この屋敷は身を隠しておくには最適と言える位置にある。まさかセカンドオーナーのお膝下にアインツベルンが拠点を構えているとは想像もすまい。灯台下暗し、というやつである。

現在この家屋にいるのは三人。負傷し施術を受けている切嗣と、彼を治療しているアイリスフィール。そして護衛として待機しているセイバーである。舞弥は事前に切嗣から命じられていた索敵などの任務を続けるべく、出払っている。

屋敷内の空気は重い。特にセイバーの心境は手術の終わりを待つ患者の身内のそれと全く同じもので、待っている間はこの拠点の検分などで時間を潰しているが、その内心は穏やかなものではない。

約二時間後、ようやく治療が一段落したのか奥の部屋からアイリスフィールが出てきた。セイバーにとっては永遠のようにも感じられた緊張の時間も遂に終わりを告げる。

「お待たせ、セイバー。ひとまず出来るだけの処置はしたわ」

安心させるよう柔らかな口調で告げるアイリスフィールだが、その顔には疲労の色が濃い。無理もないだろう。

一流の魔術師であるアイリスフィールも治癒魔術はお手の物だが、元々彼女の魔術はアインツベルンの錬金術体系に連なるものである。普通の治癒のように組織を再生させるのではなく、一から体組織を錬成し直さなければならないその作業はお世辞にも効率がいいとは言えず、術者である彼女にも多大な負担がかかるのだ。

「アイリスフィール、切嗣の容態は？」

「普通に過ごす分には問題ないけど、戦闘はしばらく無理だと思うわ……」

そう告げられるセイバーの顔には、ありありと苦渋の色が浮かんでいた。マスターの怪我を悼む気持ちもあるが、彼女にとって何より無念だったのは、切嗣の判断のことである。

ここに来るまでに委細は舞弥から聞いていた。新しい装備を受け取りに行ったビルで、例の『死徒殺し』の襲撃を受け、戦闘を行いここまでダメージを負ったと……。だが聞く限りでは、令呪で自分を呼んでくれれば切嗣は無事だったのではないか？

確かにこんな緒戦から令呪を使うのは最善とは言い難い。しかし舞弥からの報告では一歩間違えれば切嗣は命を落としていたというではないか。

いくら令呪が貴重でも、切嗣が倒れたら意味がないのだ。相手の危険性は事前に承知していたはずなのに、それでも切嗣は単独で戦った。それは機械的なまでに即座に最善の判断を下す彼らしくなさすぎる。

それなのに自分を呼ばなかったのは、単純に自分と会いたくなかったからなのでは……というのがセイバーの予想だった。

セイバーを召喚すれば、切嗣とは間違いなく二人きりになる。そうなればどうしても、命令なり何なり会話をする必要性が出てくる。意識してかはわからないが、どうしてもそれを避けたかったがゆえに令呪を使わなかったのではないだろうか……。

そんなセイバーの心境を読み取ったのか、アイリスフィールが声をかける。

「セイバー、切嗣は……」

とはいっても、どんな言葉をかけたらいいのかわからない。気の利いた激励も、慰めの言葉も彼女には思いつかなかった。

「ありがとうございます、アイリスフィール。私は大丈夫です……」

代理マスターの苦悩にセイバーは笑顔で答えるが、やはり無理をしている感が否めない。これほど心が通じ合えていない主従というのも珍しいだろうが、悲しいかな……現実である。

「アイリスフィール、切嗣の看護をお願いします。私は周囲の警戒にあたりますので……」

そう言って外へと向かうセイバー。去っていく騎士王の小さな背中には悲しい哀愁が漂っていた。

―――――――――――――――――――――

気高い従者を見送った後、アイリスフィールは夫が眠る奥の部屋へと入った。

切嗣は既に起き上がっていた。体の各部の点検をしているようで、あちこちを触ったり掴んだりしている。

「切嗣、体の具合はどう？」

「あぁ、ありがとうアイリ。もう大丈夫だよ。心配かけた」

優しげに答える切嗣。確かに傷の方は既に完治しているし、もう大丈夫だろう。多少の倦怠感は残っているだろうが。あとはじっくり時間をかけて、再構成した体組織が体に馴染むのを待つだけだ。

「ねぇ、切嗣……どうしてセイバーを呼ばなかったの？」

訊くべきではないし、訊かれたくもないだろうが、今回ばかりは別

だ。この夫がセイバーを過剰なまでに避けているのはこれまでのことからもわかっていたし、理解もできる。

片や最後まで自らの誇りを貫き通す騎士の中の騎士。

片や結果のためならどんな悪辣な手段も辞さない暗殺者。

同じ戦うものでありながら、正反対。そんなあまりにも違う価値観の二人がぶつかれば、反発し合うのは目に見えている。だがそれが今回のような事態を招くというなら放任は出来ない。いくら相性が悪くてもいざというとき最低限のコンビネーションすらとれないようでは、これからの戦いで確実にツケが廻ってくる。

対して切嗣は無言。ただ俯いて沈黙を貫く。

「切嗣……」

自然、声音が厳しくなるが引くわけにはいかない。今回のことは、何としてもハッキリさせておかねばならないのだ。

だが彼女の口から追求の言葉は出なかった。

……震えている、切嗣の身体が。

それだけではない。切嗣の表情もこれまでの冷徹なものとはかけ離れた……まるで怖いものを見た子供のように弱々しい。今にも泣き出してしまいそうだ。

「切嗣、貴方は――――」

戸惑うアイリスフィールが言葉を重ねる前に、切嗣は彼女を抱きしめていた。しかし震えは一向におさまらず、その姿は母に縋る幼児そのままだった。

「アイリ……僕は」

耐えられなくなったのだろう。嗚咽を漏らしながら独白する。

「言峰綺礼が――――僕を狙ってた。あの危険な奴が……僕に目を付けたんだ。『死徒殺し』も……あいつら二人とも、化け物だ。行動を読まれて……まるで歯が立たなかった。……僕は、負けるかもしれない」

この瞬間――――アイリスフィールは理解した。

確かに切嗣はセイバーと相容れない。だがこの人がその程度のことで自らの最大戦力であるサーヴァントを拒絶する訳がない。そんな理由でこの人がわざわざ不利に陥るような真似をするはずがない。

切嗣は既に限界だったのだ。アインツベルンでの九年が彼を変えた。出会ったばかりのあの頃の……まさに一個の戦闘機械そのものだった彼を。誰よりも容赦なく、誰よりも冷たく、誰よりも強かったこの『魔術師殺し』を変えてしまった。

妻と娘――――それは戦場で救済を続ける切嗣の人生には、本来あってはならないものだったのだ。喪うものなど何もないからこそ、この男は誰よりも苛烈であり続けられた。

今切嗣に求められているのは、そんなかつての彼に立ち戻ること。だが愛する者を得てしまった切嗣がいくら頑張ったところで、昔の

非常な自分に完全に戻れるわけがない。

セイバーへの拒絶も、つまりはそういうこと。彼にとっては、往年の『魔術師殺し』を演じるだけで精一杯だったのだ。それこそセイバーと協調する余裕さえないほどに今の切嗣の精神は追い詰められている。

そしてアイリスフィールは歯痒かった。最愛の夫がここまで追い込まれているというのに、自分には何も出来ない。いや、そもそも切嗣の心の軋みは自分とイリヤが原因なのだ。それを後悔したりなどしないが、彼の足枷になるなど耐えられない。

「貴方一人に……辛い思いはさせない」

だからアイリスフィールは切嗣を抱きしめる。彼の震えが止まるまで、彼の嗚咽が終わるまで。

「私が守る。セイバーが守る。それに……舞弥さんも、いる」

認めるしかない……今の切嗣に最も必要なのは自分ではない。もっと古く、もっとずっと昔から彼と戦場を共にしてきた彼女……久宇舞弥。彼女だけが切嗣の強さを呼び戻せる可能性を持っている。

だが今だけは彼を抱きしめていよう。たとえ気休めにしかならなくとも、それでこの人が少しでも楽になるのなら……。

## 第十四話　間桐家潜入にて（前書き）

十四話です。
連続投稿よろしくお願いします。

## 第十四話　間桐家潜入にて

「何というか……暗いな」

「ですね」

勇んで間桐邸にやってきたこの主従――――シルバー・フォックスとキャスターだが、いざモノホンの前に来て早くもそのテンションは最悪に下がっていた。

フォックスとて魔術師の館を訪ねるのが初めてというわけではないが、目の前の一般人が見れば普通に素敵な洋館は、彼からすれば今までで一番汚い建物だった。

まず第一に暗い。いや、実際に暗いんじゃなくてなんかこう、雰囲気が。家の結界、全体から漂う魔のオーラ。全てが何か暗い。あと嫌な臭いがする。いつも笑顔を絶やさないキャスターも、今回は露骨に不愉快そうだ。

とはいっても、いつまでもここでつっ立っているわけにもいかない。さっさと桜を救出し、サクっとあの妖怪を始末して家に帰ろう。うん、それがいい。

「キャスター、やってくれ」

「はい……ご主人様（マスター）」

過去のトラウマからキャスターは術の行使を嫌う傾向にある。それでもフォックスのためなら辞さないのだが、今日はことさら嫌なも

のを見たのでいつもに輪をかけて嫌々術を発動する。

張られたのは結界。屋敷全体を隠す球状のものだ。間桐の元々の結界をさらに覆う形で展開される。これで中の人間の逃げ道は封じた。

「よし、入るか」

雁夜から教えられた手順で結界をすり抜け、二人は魔窟へと足を踏み入れる。巨大な外観通り、家の内部はなかなか広いが、どこか陰気臭い。

「さて、雁夜によれば今日は休日らしいが……」

ズカズカとまるで勝手知ったる家のごとく歩を進める二人。家の内部は既に雁夜に聞いた上、目的の部屋もハッキリしているので迷うことはない。

案の定、たどり着いた部屋には目当ての少女がいた。第一の目的――間桐桜である。

普段は蟲蔵に放り込まれて間桐の”教育”を受けている彼女だが、何も毎日ではない。器が壊れないよう、何日に一度かは休憩を取る。雁夜によれば、都合良く今日はその日らしいので、蟲に犯されている間よりも保護にかかる手間が省ける。

突如自室に入ってきた侵入者に桜は驚きの顔をするが、次の瞬間には元通り。この家に来てから身に付けた底抜けに虚ろな目に戻っていた。

それだけでこの少女がどのような仕打ちを受けてきたかは想像に難

くない。魔術師の端くれなら嫌でもその存在を感じ取れるであろうサーヴァントが目の前にいて、明らかに襲撃者じみた雰囲気を醸し出す男がいても、何の反応も示さないのだから。

幼くして既に絶望で心を覆い隠さねば生きられない地獄を経験した少女。間近で見たその事実にフォックスは一瞬目を細めるが、打ち合わせ通りに己がサーヴァントに指示を出す。

「キャスター。札を」

「はい」

短い返答と共にキャスターから式符が射出される。無数に射ち出されたソレらは、桜の体全体に巻き付き、意識を奪った。

これはアパートで張ったリンクカットの結界の簡易版であり、対象の人間のみを外界からの魔術的干渉をシャットアウトする。眠らせたのは運ぶのが楽だからだ。

寝息をたてる桜を抱えると、フォックスたちは地下へと向かった。ここまで来て姿が見えないなら、あの男は蟲蔵にいるはず……。

フォックスとキャスターは教えられた通路に沿って進んでいく。ここから先は最も警戒しなければならない。なにしろ数百年の歴史を重ねる間桐の工房だ。そしてあの妖怪が最も十全に力を発揮できるフィールド。降りるに連れて光は失われ、代わりに魔界の瘴気のような負の波動が地下の奥深くから流れてくる。

その空気の源泉である最奥の扉に二人は辿り着いた。

そこには何もなかった。部屋全体には規則正しく四角い穴が穿たれ、その雰囲気はひと目でこの場が魔の巣窟であることを認識させるが、およそ魔術師の工房らしくない程内部は殺風景だ。かなりのスペースはあっても魔術的な道具はおろか、机一つない。『水』の属性を持つ間桐らしく、内部はかなり湿気り、緑に濁った闇の光が工房を照らしている。

そして部屋の奥……そこに彼はいた。

聖杯戦争の考案者の一人。秘術によって体を蟲に置き換え、五百年もの間生きながらえてきた老魔術師。御三家の一角間桐の怪物、間桐臓硯。

「よく来たの客人。もてなしは出来んがゆっくりしていくがいい」

「別にもてなしてもらう必要はない。アンタに死んでもらえればそれでいいからな、間桐の老翁」

カカカッ、と臓硯は嗤いをこぼす。普通魔術師がサーヴァントを伴って襲撃に来たならもう少し別の反応をするだろうが数百年を生きるこの老獪には何ほどのこともあらんということなのだろう。ここは彼の工房。勝てるとまでは思ってないが、逃げる手段も、目の前の若者に一矢報いる手段もいくらでも用意してある。

「フム、わしを殺す……か。何故じゃな？生憎わしはマスターではない、部外者じゃ。サーヴァントを従えるお主と敵対する理由はないぞ」

「あるとも。アンタの死は俺も、間桐雁夜も望んでいる」

雁夜の名前が出ると臓硯は不機嫌そうに顔を顰めフンッ、と鼻を鳴らす。

「あの出来損ないめが、やはりそういうことか。結界を抜け、貴様が桜を抱えている時点で予想はしてたが。雁夜の蟲が反応しなくなったのも貴様らの仕業じゃな」

「あぁ、その通り。その上で聞くが、考案者のアンタは気づいているんじゃないのか？　この聖杯戦争がおかしくなったことに」

その言葉に臓硯は萎びた目を一瞬限界まで開き、感心したような表情を見せる。

「ホゥ、御三家ならともかく、外来の魔術師に勘づいたものがおったとは。カカッ、これは愉快。応とも、若造。お主の言う通り。前回のアレを記憶しておれば異常に気づいて然るべきじゃろうに」

臓硯は遠坂や監督役も知らない事実に辿り着いた目の前の魔術師に興味が湧いたらしい。かなり上機嫌に話し始める。

「元々わしはな、今回は様子見に徹すると決めておった。”あんなモノ”が召喚された以上、間違いなく聖杯戦争のシステムには狂いが生じておる。まずはそれが何なのか突き止めることこそ肝要なのでな。それを見極めた上で桜の子供か孫を次の戦いに参加させる予定じゃった」

その言葉にフォックスは訝しげに臓硯を見やる。彼の前世の原作知識には所々穴があり、臓硯の思惑についても詳しい部分は覚えていなかった。故にこの老魔術師の言うことに彼は違和感を感じたのだ。

「では何のために雁夜を参加させた？　勝つ気などないくせに、何故わざわざあんな強力なサーヴァントを用意してやった？」

「なぁに、いくら傍観に徹するとはいっても、せっかくの祭りをただ眺めているだけというのも味気ない。俄魔術師のあやつが魔力を食い潰すバーサーカーを駆り、どこまでいけるか見るのは実に良い余興じゃ」

楽しそうに語る臓硯にフォックスの表情が固くなる。

「ではわざわざ雁夜にバーサーカーを召喚させたのはそういうことだったのか？」

「然りじゃ。無論あの木偶が億に一つの確率で聖杯を持ち帰ってきたならそれに越したことはないがの。悪い癖じゃ。せっかくの上手くやれば勝てるやもしれん博打をあやつの苦しみ足掻く姿を見たいが故に捨ててしまおうか実に迷うわい」

要するにそういうことだったのだ。この老人の本命はあくまで次であり、今回はあくまで茶番。雁夜の願いに応え、彼をマスターにしてやったのも全ては娯楽のため。維持するだけでも膨大な魔力を食うバーサーカーで雁夜が戦うには刻印虫の力に頼るしかないが、そのために地獄の苦痛と引き換えに魔力を供給するのも全ては計算の上。叶わぬ望みのために雁夜が必死に足掻き、最後には苦しみ抜いて無様な末路を晒すのを見物するのがこの外道の目的だったのだ。

元よりフォックスとて目の前の老人にまともな人間性など期待していないが、さすがに面と向かって語られると嫌悪感を抱かずにいられない。

もはや話すこともない。唯一真実を知っていたと思われる人物の確証がとれた以上、この妖怪にはさっさとご退場願おう。

「貴方の願いは何ですか？」

唐突に今まで黙っていたキャスターが口を開いた。フォックスもそうだが、臓硯も軽く驚いた顔をしている。ずっと黙っていたので、てっきり目の前のサーヴァントは無口なのかと考えていたからだ。

ただ、フォックスはキャスターの声に何か不吉なものを感じている。彼女の顔も、いつもの天真爛漫なそれとは違う、感情が読み取れない無表情だ。

「フム、いきなり何を言い出すかと思えば。サーヴァントよ、何故そのようなことを訊く？」

「だって何百年も魔術で無理やり生き続けて、挙句にこんな女の子を壊して使い捨てにしてまで叶えたい願いだなんて、気になります」

カカカカッ、と蟲の翁は大笑いした。

「ワシの願いか！？　そんなに気になるなら教えてしんぜよう。ワシの悲願はただ一つ。この身を不老不死とすることじゃ！　魔術の延命では限界があるからの。時間とともに体も魂も崩れていく。それではダメじゃ。聖杯の力なら、完璧なる永遠の命を手に入れられる！」

間桐臓硯。旧名マキリ・ゾオルケンは、かつては高潔な理想に燃えた人物だった。

それは”この世の全ての悪の根絶”。世界にはどうしようもなく悪があり、争いがある。世界から悪を取り除けない以上、聖杯の力で悪を生み出す人間そのものを成長させるという尊い願い。そのための聖杯戦争。そのための延命だった。

それが今やこの様だ。長い年月と共に魂は腐り果て、他者をいたぶることに愉悦を見出す外道と成り果てた。結果として残ったのは、ただ生に縋り付く妄執の念だけだ。

「……そうですか」

小さく呟くとキャスターは視線を下げる。同時に臓硯も彼女の異様な雰囲気に気づいたのだろう。まるで嵐の前の静けさのような静寂が工房内に起こる。

「私はイケメンが大好きなんです。顔は勿論ですけど、魂がイケメンならすぐ惚れちゃいます。その点ご主人様（マスター）は最高です。なのに貴方ときたら……」

ビリビリと彼女の体から発せられるのは、殺気。フォックスも初めて見るキャスターの怒りの感情。

「何ですかそれ？臭（くさ）いし臭（にお）うし、不愉快です。こんな汚らわしい魂見たの初めてですよ。アハハ、よおし決めました！　徹底的にぶっ潰す……」

キャスターは自分のことを弱いサーヴァントだと言っていたが、それは誤りだ。今の彼女と対峙したらおそらくあの英雄王も裸足で逃げ出すに違いない。これまで余裕の態度を崩さなかった臓硯もキャスターの気迫に腰が引けてきている。

「フ、フン！　馬鹿めが！　雁夜と音信不通になったワシが、何の準備もしていないと思うてか！？」

ゾゾゾゾと現れたのは蟲……間桐の得意とする蟲術だ。主を守るべく呼びだされた醜悪な城壁が部屋一面にビッシリと展開される。当の臓硯はキャスターの迫力にあてられて若干ビビリ気味だが、決して虚勢ばかりではないらしい。この襲撃まで時間は十分あったのだから、何らかの対策は立てているのだろうが。

「ご主人様（マスター）、ここはお任せ下さい。この棺桶に片足突っ込んだくたばり損ないの糞蟲はこの私が！」

「あ……あぁ。よろしく頼むキャスター……」

朗らかな声で宣言するが、内容に毒がありすぎて引きつった返答しか出来ない彼を誰が責められよう。

「死んでください」

冷ややかな死刑宣告と共にキャスターは一枚の札を取り出し、投げた。

「氷点よ、砕け！」

呪相・氷天――――文字通り対象を氷漬けにするキャスターの呪術の一つ。炎はこの湿った密室内では不利なので、その選択は正しい。

「彫像の出来上がりです」

キャスターの宣言通り、そこには全身氷のオブジェとなった臓硯がいた。次の瞬間には氷が砕け、後に残ったのは砂のように細かな残骸のみ。普通はこれだけで間違いなく死亡確定だが、そこは魔術師。凍気から逃れた周りの蟲たちがグチュグチュと集まり、再び臓硯の体を形成していく。

「カカカッ、無駄じゃ無駄じゃ！　お主たちはワシに時間を与えすぎたのよ！　ワシの身体は蟲で出来ておる。既に予備の身体になる蟲たちをこの屋敷の隅々まで配置ずみじゃ。それを全部跡形もなく消すなど不可能よ。よしんば出来るにしても、そこまで派手なことをすれば他のマスター共はどう思うかのう？」

間桐臓硯。この数百年を生きる怪人は仮初の不老不死を実現すべく、自らの肉体の全てを得意の蟲たちに置き換えた。彼を殺すなら魂の本体がある蟲を潰す必要があるが、それは逃げ場をなくした上でなければ難しい。少なくともここにいる分離用の蟲の大群全てを一匹残らず死滅させねば、臓硯を殺すことはできないのだ。

それほどのことをすれば漁夫の利を狙うマスターたちが動き出すのは間違いない。ここも御三家の一角である以上、監視用の使い魔が結界の外から見張っている可能性は十分ある。

「惨めですね～。そうまでして生きたかったんですか？」

が、そんな臓硯をキャスターは嘲る。それがどうしたの言わんばかりだ。

「ご主人様（マスター）、少しお腹に力をいれてください」

不意にそんなことを言うキャスターにフォックスは困惑するが、言

われた通り腹筋に力を篭める。

「あなたの魔力、分けてもらいますね」

それは来た――――突如として暴力的なまでの魔力の嵐が巻き起こる。その渦の中心はキャスター。台風の目となった彼女に周囲の魔力が片っ端から収束していく。

「ガッ、こ、これは!?」

全身を襲う言いようのない虚脱感。まるで自身の魔力と命を根こそぎ持っていくような感覚に臓硯とフォックスは呻く。

呪法・吸精――――キャスターの呪術の一つであり、文字通り標的の魔力を奪う術。この場合、本来は味方を巻き込まないよう規模を小さく抑えて、術に指向性をもたせるのだが、今回は桁が違う。キャスターが間桐家全体に張った結界内の魔力の全てが強制的に集められていく。

規模が大きすぎて無差別の吸引力と化したそれは、マスターであるフォックスにも例外なく作用し、魔力を奪っていく。半永久的に魔力を生み出せるフォックスでなければ間違いなく死んでいるだろう。この場で苦しんでいないのは、式符で魔術的干渉をシャットアウトされている桜だけだ。

そして臓硯の方はより深刻だった。彼は自身の魔力のほぼ全てを体を形成している蟲たちの維持に使用しているのだ。

「さて、ここで問題です。確かにこの屋敷の蟲たちを全部殺るのは骨が折れますけど、そこは蟲。一匹一匹はとても弱いです。それらの命の源である魔力を根こそぎ奪えば、ど～なるでしょうか？」

答えは火を見るより明らかだった。今臓硯に迫っているのは紛れもない死。だがこれは決して彼が油断していたというわけではない。単に儀式陣もなくこんな術を躊躇なく発動した目の前のサーヴァントが規格外だっただけだ。

時に蟲は人間に牙をむくが、この場合は駆除される側にまわったらしい。

果たして、あまりにもあっけなく、遺言を残す魔力すら奪われた臓硯は、魂ごとこの世から消え去った。

## 第十五話　御三家の二人にて（前書き）

十五話です。
今回は時臣陣営も出ます。
祝５０万ＰＶ突破！　ありがとうございます！

## 第十五話　御三家の二人にて

「……間桐邸が？」

『はい。監視していたアサシンによれば、キャスターとそのマスターは屋敷全体に結界を張り侵入。その後いくらかの荷物を抱え間桐邸から脱出し、彼らが去ってから数分後、邸内に仕掛けたと思われる膨大な魔力を暴発させ屋敷を跡形もなく吹き飛ばしました』

綺礼の報告に時臣は頭を抱えた。この聖杯戦争は御三家が作り上げたものである。言い換えるなら御三家無くして聖杯戦争は成り立たないのだ。居場所が分かっている間桐家の邸宅を襲うのはマスターとして当然のことだが、その全てを破壊するなどやりすぎだ。これでは間桐の魔術は失われ、今後の聖杯戦争の運営に致命的なダメージを受ける可能性がある。

何より、今間桐の家には桜がいる。実は時臣が一番気にしているのはそれだった。

時臣は筋金入りの魔術師だが、他の魔術師に比べれば常識的な愛情も理解もある人物だ。それは彼の経歴に由来する。

彼は歴代の遠坂の中でも才能は凡庸な方だった。二人の娘……凛と桜のような稀有な資質など彼にはない。そんな時臣が晴れて超一流の魔術師として大成できたのは、ひとえに彼自身の血の滲むような努力の賜物にほかならない。才能の無さを認め、自ら艱難辛苦の道を選び自身を鍛え上げ、積み重ねた修練の果てに結果を出し続けてきた。

また凡庸であるからこそ、人一倍自らが志した魔道の醜さも知っていた。彼もまた時計塔へ留学していた時期があり、そこで思い知らされた。魔術師の本文を忘れている者たちの何と多いことかと。名家の者はただ先祖から受け継いだ権威に胡座をかき、新参の魔術師はその貴族たちに媚び諂うことしか考えない。繋がりが無ければろくな研究も出来ないアソコの体制からすればそれは一種の必然とも言えるが、確固たる自律心と誇りを持つ時臣はそんな現実に辟易していた。彼がせっかく留学した時計塔から身を退いたのも、そこに理由がある。

そして凡才として魔術の負の面を冷静に直視し続けてきた故に、時臣にとって凛と桜のことは悩みの種だった。

時臣から見て凛と桜の才能は強いを通り越して異常に過ぎた。片や五大元素の複合属性。片や架空元素、虚数属性。魔術が一子相伝というのは例外のない定めだが、もし二人のどちらかが遠坂を継ぎ、もう一人が平凡に成り下がれば、その有り余る資質に目を付けた協会やら魔術師やらのサンプルに成り果てるのは想像に難くない。本人の意思など関係なく”魔”を引きつける。それほどにあの子たちの素養は類い稀なものだった。

だからこそ時臣にとって養子の話は渡りに船だった。あの子が名門間桐の庇護を受け、しっかり魔術を学ぶことが出来れば、魑魅魍魎が跋扈するこの世界でも十分やっていける。たとえその果てに凛と争うような事態になったとしても、魔道の家に生まれた以上、心苦しいが仕方のない結果だと考えていた。それは骨の髄まで魔術師である時臣なりの愛情だったのだろう。

その間桐の家が消し飛んだという。魔術は基本秘匿されるものであり、魔術師という人種も研究のために引き篭りがちになる。幼い桜

など言わずもがなで、今回の襲撃に巻き込まれた可能性は高い。となれば当然時臣の心中も穏やかではない。

だがここで桜の名前を出すわけにはいかない。今の時臣はマスターであり、魔術師なのだ。協力者である綺礼に親としての情を露呈するわけにはいかない。爆発した屋敷を調査させたアサシンによれば、彼女の遺体らしきものは見つからなかったらしいが。

「……綺礼。キャスターとそのマスターの足取りは掴めたかね？」

『申し訳ありません。尾行させたアサシンも撒かれました。やはり奴はアサシンの存在に気づいているようです……』

その返答に益々時臣は唸る。数ヶ月前、冬木中に配置したアサシンの一体が何者かの罠に嵌った件。明らかに有用な霊地に囮となる偽の工房を作り、調査に入ったアサシンの姿が捉えられた。綺礼はあれが冬木に入った『死徒殺し』の仕業ではないかとアタリをつけていたが、その推測は正しかったらしい。

「それにしても気配遮断のスキルを持つアサシンの姿を見つけるとは……やはり綺礼、君の言う通りシルバー・フォックスという男は厄介な敵のようだな」

『はい』

サーヴァントとも戦えるという規格外の力に加え、綺礼の言うように数々の人外を葬ってきた対化け物のスペシャリスト。マスターとしての危険度で言えば今回の参加者の中でも最高クラスだろう。

『それと導師（マスター）よ、もう一つ気になることが……』

珍しく歯切れの悪い綺礼に時臣は怪訝な表情で耳を傾ける。

『間桐邸から出てきた際、キャスターのマスターが気絶した5、6歳ほどの少女を抱えていました。年の頃からして、恐らく例の間桐桜嬢ではないかと……』

「何だと！？」

その報告に時臣は椅子から飛び上がった。常に優雅たれを家訓とする遠坂家の当主としてはあるまじき狼狽だが無理もない。もし綺礼の報告が真実なら、桜はまだ生きているということ。

「いや待て……だが何故……」

事実のおかしさにすぐさま冷静さを取り戻し、時臣は一人ブツブツと呟く。間桐陣営は外来のマスターである『死徒殺し』からすれば排除すべき敵ではあるが、それ以上の意味はない。なのに桜を攫っていったということは……。

「まさか……」

一つの考えに辿り着き、時臣は顔面を蒼白にした。もし奴が桜の存在に気付き、その稀有な才能にも気付いたとしたら？　あの子の力を何かに利用するために攫ったのだとしたら？

この予想が当たっていたなら……最悪の結果だ。が、これが最も説明がつきやすい。綺礼の報告によれば、シルバー・フォックスという男はあくまでハンターであり、魔術も仕事を円滑にさせるための手段でしかなく、彼自体は研究肌ではないというが、桜の才能はど

こかの魔術師に研究対象として売るだけでも莫大な金が入るだろう。彼がそこまでの外道かどうかは不明だが、わざわざ敵の家の娘である桜を攫っていくのに他の理由など思いつかない。

「……ッ」

特別扱いなど……出来ない。親として振舞うなら、今すぐにでもアサシンを総動員して桜を見つけ、全力をもって救いに行くべきである。だが時臣はこの戦いに全てを賭けているのだ。数々の下準備に加え、バレたら他のマスター全員の袋叩きにあうこと確実な反則行為。ここでアサシンに派手な動きをさせ、その存在を気づかせたらこれまでの準備の全てが水泡に帰す。監督役と綺礼との関係も明らかになり、他の連中はここぞとばかりに時臣に無茶な要求をしてくるに違いない。

いや、仮にアサシンを動員しても、救出自体上手くいくかわからない。もし奴らから桜を取り返すなら、それにはギルガメッシュの協力も不可欠だ。あの英雄王がこんなことに手を貸してくれる性分でないことは時臣も十分承知している。嘆願したところで「下らん」の一言で済まされるのは明白だ。令呪に訴えれば出来ないこともないが、そうなればあのサーヴァントとの関係破綻は確実なものとなる。

「綺礼……キャスターと『死徒殺し』に廻すアサシンの数を増やしてくれ……出来るだけ多く……」

搾りきるように時臣は指示を出した。これが今の彼に出来る最大限の対策。ひとまず可能な限りの情報を集め、その上で方策を考える。桜のことは心配だが、遠坂の魔術師として『根源』に至る機会をわざわざ捨てるなどという愚をおかすわけにはいかない。時臣は聖杯

戦争を作り上げた御三家の当主なのだ。非常な選択も覚悟の上では無かったか。

『……分かりました。ではアサシンの中から尾行と索敵に優れた者を選定し、探索にあたらせます。情報が入り次第連絡いたしますので』

時臣の苦渋は綺礼にも隠しきれなかったようで、やや淀んだ声で返答し、通信を切った。

「……許してくれ……桜」

組んだ両手を震わせながら時臣は虚空を仰ぎ、行方知れずとなった愛娘に謝罪した。

――――――――――――――――――――――――

「……う」

重い瞼を開け、まどろみから覚めた間桐雁夜は、ゆっくりと上体を起こした。ベッドの横に置いてあるタライに浸した濡れタオルを絞って顔を拭き、同じく置いてある薬湯を飲む。

ここに連れてこられてからあのシルバー・フォックスという男に施された治癒魔術。その腕前は魔術師としては素人の雁夜から見ても非の打ち所のない見事なもので、最早死の淵と廃人コースに陥りか

けた雁夜の肉体は、根本的な魔術的障害こそ残っているもののそれなりに調子がいい。結界の御陰で臓硯とリンクして雁夜を苦しめていた刻印虫も今はおとなしいものだ。バーサーカーの維持には相変わらず魔力を食うが、戦わせなければそこまでの負担ではない。

「もう、夜か」

あの二人が間桐邸に向かってからずいぶん経つ。結界で外の様子がわからないが、襲撃が成功したならそろそろ帰ってきてもいい頃だ。

（俺は……何をしているんだろうな……）

雁夜にとって敵地であったこのアパートに連れてこられてからの時間は、皮肉にもここ最近で一番穏やかなものだった。狂人のように時臣への復讐の念に燃え、魔術の激痛に喘いでいたこれまでの自分を省みると、まるで今の自分が別人のようにも感じられる。

ただ一人、誰もいない開放された静寂の時は、雁夜の精神に僅かばかりの余裕を取り戻させていた。このまま上手くいけば、あの二人が桜を助け、臓硯を殺してくれるんだろうが、そうなったら自分はこれから何をすればいいのか……。

「雁夜、帰ったぞ。起きてるか？」

ふと穏やかな空間に精悍な声で帰宅の知らせが響く。部屋に蛍光灯の明かりが灯りこの部屋の主、シルバー・フォックスを映し出す。その声が耳に入ると同時に雁夜の心臓が一際大きな鼓動を打つ。

「フォックス、キャスター。間桐邸は、桜ちゃんは……」

逸る気持ちを抑えきれず雁夜は問う。部屋に入ってきた二人、まずキャスターは魔道書をはじめとする様々な書類を持ち、フォックスは呪符らしきものに巻かれた紫の髪の少女を抱えていた。

「……桜、ちゃん」

その様子が視界に入ると雁夜は総身を震わせた。この一年間、ずっと望んでいたもの。あの地獄からずっと救い出したかった子が……。ということは、二人は目的は達成したということだ。

「キャスター。取り敢えずその書類はそっちに置いといてくれ。それから結界の準備を」

「了解です、ご主人様（マスター）。あ、雁夜さんはまだ結界から出ないでくださいね。あの屑蟲がいなくなったので、体内の蟲が変調をきたすかもしれませんから」

雁夜が何か言う前に二人はテキパキと作業を進めていく。布団を敷き出したフォックスにさすがに雁夜が質問した。

「なぁ、一体何をするんだ？」

「間桐桜の体内の蟲を取り除いて身体の流れの”歪み”を矯正する施術をする。あぁ、それと遅くなったが、報告だ。見ての通りこの子の救出と間桐臓硯の殺害は完遂したことを伝えておく。それと間桐邸は木っ端微塵に破壊したから、もう無いぞ」

その報告に雁夜は目を見開くが、すぐに胸をなでおろす。この二人は約束を最高の方向に守ってくれたらしい。だがフォックスが桜を布団に横たえたところで、疑問も湧いた。

「どうして、そこまでしてくれるんだ？」

「前にも言ったが、お節介みたいなものだ。なに、それほど難しい作業じゃない。六時間もあれば済む。だが急いだほうがいいな。臓硯が死んだ事で出る影響は、アンタよりもこの子の方が強い」

どうやら臓硯は雁夜と違い、桜はじっくりと時間をかけて完成させる予定だったようで、体内から完全に蟲を取り除くのも不可能ではないほど彼女の改造は進んでいなかった。これなら弄られる前とほぼ同等とまではいかなくとも、八～九割の状態にまで治療することは可能だ。

「ただ、治療できるのは身体までだ。心の傷はどうしようもない。時間をかけて治していく必要があるな」

「そう、か……」

痛ましいことではあるが、認めるしかなかった。あの魔窟で臓硯の虐待を見続けてきた雁夜なのだ。元よりその程度のことは覚悟の上。せめて彼女の心が、まだ手遅れになる段階に至っていないことを祈るのみである。

だが雁夜はそれよりも、今後の桜の身の振り方の方が気になっていた。このフォックスという男との契約ではこの子をどうするかは自分に一任するというが、これまで桜を救い出すということ自体が雁夜には荷がかちすぎる目標だったのでその後のことなど漠然としか考えていなかった。その悲願があまりにも早く、あっけなく達成されたため、正直なところどうすればいいのかわからない。

桜をどうするかと言えば、やはり妥当なのは葵、凛のもとに帰らせることだろう。絶望の鎧で塗り固められたこの少女の心を治せるのは、最愛の家族である彼女たちだけだ。

だがそれは、再び桜を時臣のところに送るということでもある。彼女を養子に出したあの男に。それがどういう結末をもたらすのか。

今の桜の状態を見れば、いかに魔術に凝り固まったあの男でも親として間違いを認めるかもしれないが、その逆もありうる。時が経てば再び桜を養子に出すという選択をする可能性も無きにしもあらずだ。

いや、たとえ時臣が桜をどう思っても、当の桜が時臣を許すかどうかわからない。果たして自分に地獄への片道キップを渡した父親にこの少女は心を開けるのだろうか？

……やはりこのままではいけない。このままでは解決するのは形だけだ。今よりはマシになるだけで、その先に雁夜が愛する女性(ひと)たちが心から笑える未来は待っていない。ならば自分のするべきことは……。

「シルバー・フォックス……桜ちゃんの治療の後、令呪でバーサーカーを渡したい。それからもう一つ頼みがある」

施術に移るため、指に魔力を収束させ始めたフォックスは、唐突に今までとは違う雰囲気を見せる雁夜に何かを感じ、黙って続きを待つ。

「……」

この選択は、せっかく拾った命を完全にドブに捨てる行為だ。だが、全てをやり遂げるためには……どのみち長くない自分の命の使い道はこれしかない。

そして自分を振り返る時間を得た雁夜は理解していた。結局自分の行動原理は時臣への嫉妬だ。彼女たちを大事に思うが故にこうして命を削ったが、それも結局あの男に一矢報いるという思いが根源にあった。葵も凛も、そして間桐に来る前の桜は間違いなく時臣を心から愛し、尊敬していた。そんな彼女たちから時臣を奪うという行為が彼女たちの幸せに繋がるのか？　そんな根本的なことさえ考えていなかった。

だからこその決断。時臣は殺さない、自分は死ぬ。これが雁夜の選択だ。だがあの男には理解させねばならない。葵のために、凛のために、桜のために。

一度深呼吸をし、決然と雁夜は言い放つ。

「俺の刻印虫を、強化してくれ」

## 第十六話　隔たれた居城にて（前書き）

十六話です。
今回は短めですので、次話も出来るだけ早く投稿します。

## 第十六話　隔たれた居城にて

冬木の西には城がある。

市街地から僅か一時間足らずという近隣。人里離れた山中を国道沿いに進むと、そこには鬱蒼と茂った森林地帯が広がり、原生林の奥には、事情を知らない者からは『御伽の城』と呼ばれる古城がある。およそファンタジー映画の中でしかお目にかかれない巨大なヨーロッパ建築の結晶は、普段は誰の目にもつかない。だが６０年に一度、主を迎えるべくこの魔城は活動を始めるのだ。

『アインツベルンの森』。森の正体を知る者はそう呼んでいた。

そして森が形成する深い魔術結界に守られたその先に城はある。このあたりの有用な霊脈を全ておさえた位置に、アインツベルン城はその古色蒼然たる姿をさらしていた。既に城内は、前もって聖杯戦争に備えてやって来たアインツベルンのメイドたちが清掃済みである。

「既に新しく用意した罠と武器は設置した。舞弥、君は敵がきたらアイリを護衛して城から出ることになる。その時は罠にかからないよう僕の指示通りのルートを使ってくれ」

「了解しました」

城の一室のサロン。作戦会議の場に選ばれたその部屋では、総指揮官である切嗣がテキパキと指示をだしていた。淀みなく語る切嗣の顔は、まだ本調子では無いはずなのに、以前より健康そうだ。彼が療養してる間、基本的に雑事は動ける舞弥が担当しており、切嗣に

はアイリスフィールがつきっきりで看護にあたっていたため、彼は冬木にきて以来一番の休息を得られたのだ。反面ハードワークとなった舞弥は、表情こそいつもの鉄面皮でも、いくばくかの憔悴を窺わせる。

あれから切嗣は、魔術の行使こそ困難でも普通に動けるまでには回復したが、使い魔で方々を監視をしていた舞弥が間桐の屋敷が陥落したという知らせをもってきたため、急遽武家屋敷の拠点からこのアインツベルン城に移っていた。当初の予定ではこの城は使う予定はなかったのだが、先日の襲撃から自身の行動が把握されている可能性を切嗣は危惧し、いざ発見されて敵が来ても迎え撃つだけの防備を固められるこの要塞に籠ることを選択したのだ。もちろんセイバーも、森の結界を把握できるアイリスフィールもいる。

「でも切嗣、本当にここに敵がやってくるの？」

心配そうに尋ねるアイリスフィールだが、切嗣は確信を持っているように答える。

「ああくる。ここは数少ない”居場所がハッキリしてる拠点”だからね。何より、セイバーの負傷は他の連中も知ってる。遠坂邸は守りが硬すぎるし、あのアーチャーの力は全員が警戒してるだろう。間桐の家が崩壊した今、ここが一番狙われやすい」

成程、切嗣の読みは的を射ている。今現在、最もつけ込みやすいのは片腕が使えないセイバーであるのは明白なのだ。

「襲撃があるなら……有力なのは、やはりランサーとロード・エルメロイのペアだな。あのサーヴァントの宝具は一撃必殺を封じられた今のセイバーとかなり相性が良いし、マスターはこの森の結界を

完全に抜けきるだけの腕前がある。何より、ホテルでの一件で腸が煮えくり返っているだろう」

それについてはこの場にいる全員が同意見である。ランサーの不治の呪いを受けたセイバーが、真っ先に彼らを排除しようとしたのは誰でも想像がつく。そして報復に彼らがやってくることも。

「基本は敵がきたらセイバーが迎撃だ。だがまともに戦う必要はないよ。敵のマスターが来ていれば、地の利を生かしてサーヴァントと引き離してから各個撃破すればいいし、いなければセイバーが逃げ回って攪乱すればいいだけのことだ。城に入られても、むしろそっちの方が好都合だね。好きなようにトラップを使える」

着々と話を進めていく切嗣と、己が主の発想に怒りのあまり身体を震わせるセイバー。実はこの主従が放つ剣呑な空気が、先程から会議に不穏な気配を漂わせていた。

「セイバーと……戦わせないの？」

「その必要は無いさ。襲撃者はあくまで側面から叩く。むしろセイバーを狙ってやってくる連中こそ格好の獲物なんだよ。そいつらを狙って漁夫の利を得ようとする連中がやってくれば尚いい。奴らは自分が狩人で、僕らが獲物だと思っているからね。その隙を突いて思い切り殴りつける。だから僕らはこの城で、戦況を見極めながらゆっくりと奴らの裏を掻く算段を考えていればいい」

「マスター、貴方という人は……いったいどこまで卑劣に成り果てる気だ！？」

声を荒げるセイバーの顔には、港場でのライダーから受けた嘲弄に

対する怒りとは明らかに別の――――より心からの痛切な憤りが感じられる。

「衛宮切嗣、貴方は英霊を侮辱している。私は流血の代行のために招かれた。聖杯を求めて無用な血が流れぬよう、犠牲を最小限に留めるよう、万軍に代わる一騎として命運を背負い勝敗を競う……それが我らサーヴァントのはずだ。なのに、どうして私に戦いを委ねてくれない？　ランサーのマスターを襲った手口もそうだ。一歩間違えれば大惨事になっていた。あんな真似をしなくとも、私は騎士として、誇りにかけてランサーを討ち果たす！　――――それとも切嗣、貴方は自身のサーヴァントである私を信用できないとでもいうのか？」

「あぁ、出来ないね」

あっさりと肯定した切嗣にセイバーは呆けたような表情になる。だがアイリスフィールと舞弥は、別の驚きに思考をもっていかれていた。

”あの切嗣が、セイバーに返事をした！？”

「温いことを抜かすなよセイバー。その左腕で何が出来る？　ランサーとの戦いでもライダーが乱入しなければ君は確実にやられていた。子供でも分かる結果だ。そのご大層な誇りとやらでハンデを覆せるとでも言う気か？」

苛立たしげに吐き捨てる切嗣にセイバーはうっ、と呻く。

確かに切嗣の言う通りだ。ランサーの技量ならあのまま切り札を封じられたセイバーを倒していた可能性はかなり高い。実際様々な不

確定要素があったとはいえ、あの一件でセイバーが生き残れたのは運によるところも大きかったはずだ。

奥底から湧き上がってくる感情を抑えてセイバーは無理矢理自身を納得させる。

認めよう……悔しいが切嗣の作戦は今の自分には反論のしようが無いほど周到だ。他のサーヴァントたちも強敵揃い。最大の武器が使えない今、真正面からぶつかるなど愚の極みでしかない。

「アイリ、舞弥、ひとまず概要はこんなところだ。休憩に入ろう。アイリは敵の侵入を察知したらすぐに教えてくれ。セイバーはアイリの護衛だ。僕は一旦身体の回復につとめるから、君たちも休むといい」

押し黙ったセイバーを冷ややかに見据えると、切嗣は全員への指示をだし、まだ万全でない肉体の療養に向かった。

――――――――――――――――――――――――

城の上階に位置する一室。この部屋はセイバーとアイリスフィールの寝室としてあてがわれたものであり、この城では数少ない電話が置かれている部屋でもある。何かあれば別室にいる切嗣や舞弥とも、魔術を使わず円滑に連絡が取れる。

その部屋の中でセイバーは力なく項垂れていた。どうやら会議での

切嗣の叱責がそれなりに堪えているらしく、既に入室して一時間以上経つが、彼女は一言も喋らない。

見かねたアイリスフィールがセイバーを慰める。

「セイバー、元気出して。貴方が切嗣の戦い方を快く思わないのは分かるけど……」

「いえ……大丈夫ですアイリスフィール。切嗣の戦略は正しい。元はと言えば、不覚をとった私の不甲斐なさが原因なのですから……」

そうは言うものの、やはりセイバーは心胆では切嗣の作戦を是とは出来なかった。それは清廉たる騎士王の異名を持つ彼女の意地にかけても譲れない。だが今の状況ではそんな甘いことがいえないのも確かだ。主の手口の悪辣さと、勝利を約束出来ない己。やり場のない感情がドロドロと彼女の心の中で渦巻いている。

そんなセイバーの様子にアイリスフィールは僅かに笑いをこぼす。それを見てセイバーは思わず怒鳴ってしまった。

「アイリスフィール！　何故笑うのです！？」

「ええ、ごめんなさい。ただその……嬉しくって」

およそ予期しなかった返答にセイバーはキョトンとしてアイリスフィールを見る。どう考えてもあれは一触即発の空気でしかなく、プラスの要素など無かったはずだが。

「ねぇセイバー、気づいてる？　切嗣……あの人、ちゃんと貴方を見て返事してたわよ」

「それは……」

言われてみてセイバーは気がついた。アインツベルンで召喚されて以来、切嗣は一度も自分にまともに話しかけたことがない。理由はわからないが、切嗣はセイバーをまるでいない者かのように扱い、セイバーから話しかけても徹底的に無視していたのだ。アイリスフィールは、切嗣が自分と決して相容れないと考えているからだと言っていたが。

代理マスターからの指摘に、セイバーは一人黙考する。果たしてどういう心境の変化だろう。

そんなセイバーを見守るアイリスフィールは僅かばかりの安堵を感じていた。

武家屋敷での療養の際、切嗣はアイリスフィールの勧めで以前ほど露骨にセイバーを無視しないことを決めた。切嗣はまだ身体が十全ではない。加えて敵も、言峰綺礼や『死徒殺し』を始め、彼の予想を超えた猛者ばかりである。これを勝ち抜くためには、さすがに少しは対話の必要があると判断したらしく、セイバーへの指示も彼自ら行うことを約束した。最も、普段彼から話しかけることはせず、何か聞かれたら最低限受け答えするというだけだが。

それでも、あの切嗣が曲がりなりにもセイバーと連携をとることを選んだのだ。アイリスフィールはそのことが嬉しかった。この聖杯戦争で勝つために最も重要なことが実現しつつあるのだから。

（今は反発してても……話が出来るようになった以上、きっといつかは……ッ！？）

唐突な胸の動悸に、アイリスフィールは顔を強ばらせる。森の結界と同調した彼女の魔術回路が、全力で拍動し主に危機を伝えていた。

「来ましたか？」

彼女の異変に気づいたセイバーも、何が起きたのかを悟る。その顔は既に戦士としての硬さを取り戻していた。

「えぇ、早かったわね。セイバー、切嗣と舞弥さんに連絡して。ランサーたちが来たって」

無言で頷いたセイバーは、既に使い方を学んだ電話機を操作する。人里から隔絶したこの地で、再び騎士たちが相見えようとしていた。

## 第十七話　神童の敗北にて（前書き）

お待たせしました。十七話です。
あと一話続くんですが、早めに投稿することにしました。

# 第十七話　神童の敗北にて

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトがアインツベルンの森に侵攻したのは必然だった。

切嗣の爆破テロによって、拠点と時計塔から持ち込んだ多くの礼装を失った彼は、現在は郊外の廃工場にソラウと共に身を寄せており、仮の隠れ家としていた。

当然、ハイアットホテルの最高級スイートすら、ただ闇雲に飾り立てただけの豚小屋と断ずるケイネスが我慢できる環境であるはずがなく、許嫁のソラウの機嫌もすこぶる悪い。

同時に、彼女の自分を見る目も以前よりさらに辛辣になったため、ケイネスはこの現状を打破するべく行動を起こした。

令呪、拠点、礼装の損失というこの失態を挽回するには、やはり戦いしかない。敵を討ち取り、華々しい勝利を持ち帰れば、自陣営の士気が上がるのだから。

方針が決まったケイネスの動きは速かった。まず彼が狙いを定めたのが、恐らくあの卑劣な爆破の犯人であろうセイバー陣営である。事前の調査で冬木の近隣にアインツベルンの所領があるのは聞いていたため、彼はまずランサーを侵攻させ、自身も後から森へと踏み込んだ。

作戦は簡単。まず先行したランサーが迎撃に出てくる敵のサーヴァントと交戦し足止め。そしてケイネスが本丸を単独で攻略するとい

うものである。キャスターのマスターは置いといても、敵がサーヴァントでないなら誰であろうとも打倒する自信が彼にはあった。

無論ケイネスとて、千年の歴史を重ねるアインツベルンの所領の守りを軽視してなどいない。だがそれが何だというのだ。罠があっても噛み破ればいい。時計塔筆頭たる自分にはそれだけの力量があるのだから

それにもしこの戦いであの不愉快なトラブルを引き起こした不届き者の首級をあげることが出来れば、少しは溜飲も下がるというものだ。実際森には魔術によって結果や罠も張られていたが、ロードの名を冠するケイネスにとっては抜けるのは造作もない障害ばかり。作戦の都合上別れたランサーの存在も降霊科(ユリフィス)随一の神童には全く必要のないものであった。これなら一人でも充分やれる。

侵入者を惑わす魔の森を難なく突破したケイネスは、早くもアインツベルン城の扉の前に到着した。本国からの出城としては明らかに度が過ぎた規模でそびえ立つそれは、余人なら間違いなく圧倒されるであろうが、彼とて名門アーチボルト家の御曹司である。千年の魔導の名家の威風にも、鼻で嗤う程度の感慨しか湧かない。

”悪くない。アインツベルンを仕留めたらこの城を乗っ取って新たな拠点にするのもいいな……。”

これなら代替の拠点としても申し分ない。ソラウも満足するだろう。思わぬ拾いものにケイネスの唇がいびつに歪む。

そうと決まれば、城の破壊は最小限に留めるとしよう。既に彼の脳内では、全てが上手くいった輝かしい未来の光景が出来上がっていた。喜びを噛み殺せないとばかりに笑いながらケイネスは抱えてい

た陶器製の瓶を地面に置いた。途端に瓶が重さで地面にめり込む。実際は百四十キロの重量を持つそれを、ケイネスは魔術によって重量を軽減して持ち歩いていたのだ。

「Ｆｅｖｏｒ，ｍｅｉ　ｓａｎｇｕｉｓ（沸き立て、我が血潮）」

起動の呪文が唱えられると、瓶の中身がボコボコと波打ちながら溢れ出る。金属特有の光沢を放つその液体の正体は、１０リットルほどの水銀であった。

「Ａｕｔｏｍａｔｏｐｏｒｔｕｍ　ｄｅｆｅｎｓｉｏ（自律防御）：Ａｕｔｏｍａｔｏｐｏｒｔｕｍ　ｑｕａｅｒｅｒｅ（自動索敵）：Ｄｉｌｅｃｔｕｓ　ｉｎｃｕｒｓｉｏ（指定攻撃）」

ケイネスが続ける詠唱に呼応し、水銀は意思を持つかのように主の後をついて行く。『水』と『風』の魔術属性を有するケイネスが得手とする流体操作。これを応用し作り上げたのが、彼が数多持つ礼装の中でも最強の一品『月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）』である。

「Ｓｃａｌｐ（斬）！」

ケイネスの一喝と共に鞭のような形状をとった水銀の一部が、城の大扉に叩きつけられた。水銀は常温で液状を保つ物質の中で最も重く、これを高圧、高速で駆動させることによって生まれるエネルギーは下手なレーザーをも凌ぐ。鋼鉄はもちろん、ダイヤモンドすら切り裂くこの超威力の斬撃の前には、いかなる防御も意味をなさない。無論自身の魔力が篭ったこの礼装を、ケイネスは自由自在に形を変えて操ることができるため、攻防一体の用途に使えるという何とも芸達者な代物なのだ。

あのホテルの崩壊からケイネスとソラウを無傷で守ったと言えば、その性能のほどは語るべくもないだろう。

進行を妨げるものを排除したケイネスは悠々と城内に足を踏み入れる。隅々まで清掃の行き届いたホールには、明らかに人がいた気配が残っているが、出てくるものはいない。

「アーチボルト家九代目当主、ケイネス・エルメロイがここに推参仕る！　アインツベルンの魔術師よ！　求める聖杯に命と誇りを賭して、いざ尋常に立ち会うがいい！！」

元よりこの城にいるのがあの悪辣な奇襲の下手人であるなら、この程度の挑発に応えたりしないだろうが、それでも敢えて魔術師のルールに則り決闘を申し込んだ。出てくるなら良し。出てこなくとも良しだ。

挑発の口上が終わると、ザー、ザーというノイズ音がホール内に響き、続いて判断のつかない不明瞭な声が反響する。

『ようこそロード・エルメロイ。歓迎しよう』

男か女かも判別出来ないその音声は、港場でケイネスが使った変声魔術によるものにも似ていた。まさか本当に応えてくるとは思わなかったので、ケイネスの表情が軽く驚きに満ちる。

『私が今回セイバーを擁するアインツベルンのマスターだ。君が魔術師として闘争を臨む、というなら是非もない……が、生憎私は君と正面切って戦えるだけの力量をそなえていなくてね。残念ながら姿を見せることはできない。そこでだ……ここは一つ別のルールを設け、決着をつけないか？』

感情のこもらない声音が響き渡る様は不気味だ。訝しみながらケイネスは相手が語るに任せる。

『お気づき思うが、既にこの城の中は無数のトラップ要塞と化している。たとえロードたる君でも攻略は容易ではないほどに、ね。ではルールを説明しようか。私はこの城の階層のどこかに身を潜めている。だがこの城にはある条件を満たさないと上の階に上がれないよう仕掛けを施している。君はまずそれを見つけ、進む手段を確保した後、同じ要領でそれぞれの階を探索し私を探し出して倒す、というものだ。無論、探索中君に隙があれば私は暗闇から君を狙い打つ。君が私を見つける前に私に殺されれば私の勝ち。殺されずに私を見つければ君の勝ちということだ。如何かな？』

「……」

予想外の事態にケイネスは沈黙する。また妙な勝負を持ちかけられたものだ。相手がケイネスの予想通りならやはり何か企んでのことだろうが、彼の頭脳が判ずるところによれば、この提案自体は大して意味があるものではない。ＹＥＳ、ＮＯどちらで答えても結局やることは変わらない。ならば……

「よかろう。そのルールで構わない。提案を受諾する」

『宜しい、ならば精々頑張って私を見つけたまえ。健闘を期待する』

ブツンッ、という音と共に音声が消える。少々イレギュラーな事態ではあるが、なんてことはない。相手が自分より格上というなら、真っ向勝負ではなく計略を用いて背中から刺すのが道理だ。そういう意味では、敵はこのケイネス・エルメロイ・アーチボルトと己の

差を弁えていると言ってもいい。

隠れ潜む鼠を小馬鹿に嗤いながら進軍を始めたケイネスだが、ホール中央に達すると同時に、四隅に置かれていた花瓶が一斉に破裂した。花瓶の中には、切嗣が用意した対人用設置型地雷クレイモアが仕掛けられていたのだ。総数２８００発もの鉄球の雨が四方からケイネスに襲いかかる。

だがケイネスが傷を負うことは無かった。降り注ぐ死の雨の脅威に対し、彼の水銀が一瞬で変形しケイネスの周囲に展開され、鋼鉄の硬度を持つ壁となり彼を守ったのだ。

月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）の『自律防御』。先程ケイネスが設定しておいたこの術式は、彼に危害を及ぼそうとするおよそ全ての事象に反応し、ケイネスを守護する。その展開速度は今見た通り、銃弾の速さにも先んじるのだ。

だが自慢の礼装が見事な働きをしたこの結果を、ケイネスは冷めた目で見ていた。今の罠が魔術ではなく軍用兵器によるものだということは、いくら専門外のケイネスにも分かる。間違いない……この城には、先日ケイネスが精魂こめて作り上げた工房を卑劣な手段で破壊した忌々しい犯人が潜んでいる。

その事実にケイネスは、怒りよりもむしろ嘆きを感じていた。押しも押されぬ北の名家アインツベルンが、よもやここまで下劣な手段に訴える者を雇ったことも、それを容認したことも誇りある魔術を尊ぶケイネスには信じられなかった。

「……そこまで堕ちたか、アインツベルン」

深々と嘆息するケイネス。ならば是非もない。どれだけ卑賤であっても戦いは戦い。せめて自らの手で自分たちがどれほど恥知らずな選択をしたのか後悔させてやらねばなるまい。

「――――宜しい。ならばこれは決闘ではなく誅伐だ」

外道に天誅を下すべく、決意新たにケイネスは歩を進めた。

――――――――――――――――――――

ランサーの迎撃のため森の中をセイバーは疾駆する。切嗣の命を受け、城に向かってくるランサーを迎え撃つべくこうして打って出た彼女の心には、既に余計なものない。ひとたび戦場に降りれば、どんなことがあっても彼女は曇りなき剣として戦える。

彼女が命じられたことは二つ。ランサーの足止めと、必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇の破壊である。

前者は今の自分の状況から見ても妥当な命令と言えるのだが、後者については不明瞭なところもある。今の彼女にあの槍を破壊するなど、まともなやり方では到底無理だ。切嗣は宝具を破壊するチャンスを作るとだけ言って、詳しい概要は教えてくれなかったのだ。

だがそれで良かったかもしれない。切嗣が何を考えているかは不明だが、きっと碌なものではあるまい。それこそ自分が聞けばすぐ激昂するような容赦の無い方法なのだろう。恐らく詳しく知れば、迷

いが生じてセイバーは戦えない。
風に乗るように駆け続けるセイバーだが、ふとその足が止まった。
彼女の魔力探知力が、”敵”の魔力を捉えたのだ。
立ち止まったセイバーの前に現れた一人の稲妻は、港場でも再戦を誓った好敵手。ランサーのサーヴァント———ディルムッド・オディナである。
「また会えたな、セイバー」
「あぁ、貴公も健在なようで何よりだ」
戦場においても相変わらずの涼しさで二人の騎士は再会を祝う。
「貴様とは尋常な一騎打ちで決着をつけたいと願っていたが、よもやこれほど早く実現するとはな」
「それは私も同じだランサー。が、残念ながら今の私は、貴公ほど潔くは戦えない」
苦い表情で語るセイバーに、ランサーは怪訝な面持ちになる。
「今回私は貴方を此処に留める命を、マスターより仰せつかっている。その隙に、我がマスターは貴方の主を仕留めるそうだ……」
「フム、セイバー、一つ聞かせてくれ。先日我らの拠点を襲ったのは、貴様のマスターか？」

その問いかけに益々苦しそうに地面に視線を落としたセイバーを見て、ランサーはようやく得心がいった。どうやらこの騎士王も、自身の主とあまり上手くやれていないらしい。そしてセイバーの反応を見る限り、恐らく別行動をとったケイネスは、ホテルを襲った下手人に狙われているのだろう。

「見縊るなよセイバー」

意気消沈するセイバーを叱咤するようにランサーは言い放つ。

「わが主がその程度でやられると考えているなら、見当違いも甚だしい。俺が今、こうして一人で対峙出来るのはケイネス様の力量を信じているからだ」

「ランサー……」

宿敵の宣誓でセイバーの目に光が灯る。やはり、この男は最高の相手だ。

「お前こそ自分の心配をしたらどうだ？　油断するなら、あっという間に討ち取ってくれるぞ」

言うやいなやランサーはその独特な二槍の構えを取った。

「それはこちらのセリフだランサー。今の私が手負いだからといって油断するなら、大火傷をするぞ」

それを見届けたセイバーも、輝く宝剣を晒して応じた。既に心から逡巡の類は完全に消えていた。こうして再び巡り合えた以上、自分に出来るのはただ死力を尽くして競い合うのみ。

「フィオナ騎士団が一番槍、ディルムッド・オディナ――――推して参る」

「応！　ブリテン王アルトリア・ペンドラゴンが受けて立つ。――――いざっ！」

裂帛の気合で踏み出した両雄の激突は、森を大きく揺らした。

――――――――――――――――――――――――

「あれが噂の”呪操水銀”か。クレイモア地雷の速度よりも速く防御できるとは……厄介だな」

アインツベルン森の一角。セイバーとランサーの決闘とは逆方向の位置で衛宮切嗣は城から持ち出したノートパソコンの画面を見ながら呟く。いつもふかしている煙草も、電子機器への悪影響を懸念して今は吸っていない。

あの後、アイリスフィールからランサーとケイネスが攻めてきた旨を聞いた切嗣は、すぐに舞弥にアイリスフィールを避難させ、セイバーをランサーの迎撃に向かわせた。二人の戦闘は、舞弥が操る使い魔に仕掛けた小型カメラを通して、パソコンのモニターで把握している。

そして自身は城に入ったケイネス・エルメロイ・アーチボルトを、

城内に設置した監視カメラを通して監視しているのだが、標的の礼装の力は切嗣の予想を超えて強力だった。恐らく魔術を使えない今の自分では、万に一つも勝ち目はない。城から出たのはやはり正解だった。

実際こうしている間にも、城内を進んでいくケイネスには切嗣が仕掛けた地雷やら手榴弾やらがひっきりなしに襲いかかっているのだが、依然ケイネスにはかすり傷一つ負わせられてない。あのホテルの倒壊を生き延びた彼の力量は、伊達では無かった。

だがこの展開は、切嗣にとっては実に望ましいものだった。城に仕掛けておいた録音テープのおかげで、ケイネスは現在虱潰しに一階を探索している。索敵用と思われる水銀も時節放っているが、肝心の獲物はあの城にはいない。いくら探しても無駄である。

そしてケイネスがこのまま探索を続ければ、間違いなく彼にも効くであろうアレを設置した部屋に辿り着く。そうなれば今度こそチェックメイトだ。万一討ち取れずとも、当面の脅威は間違いなく除ける。

城のトラップを操作しながら、切嗣は唯一の懸念――――第三者の姿を警戒しながら、キーボードを叩き続けた。

――――――――――――――――――――――――

城の中を進むに連れて、ケイネスのフラストレーションは増してい

った。

ホールでの案内に従い、こうして馬鹿正直に全ての部屋を調べてはいるが、魔術師として礼を尽くすケイネスを迎えるのは、いずれも彼が嫌悪する醜悪な現代火器ばかり。

ふざけるな、と言いたい。ケイネスの月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）は、こんなものを防ぐために存在しているのではないのだ。彼の礼装が相手をするにふさわしいのは、ガンドなり霊刀なり炎なりと歴史を積み重ねた魔術の神秘でなければならない。ケイネスとてこの程度で怒るような狭量な性格ではないが、さすがに苛立ちは抑えきれず、彼の鬱屈を敏感に感じ取った月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）が、主のストレスを発散するように少々荒っぽく障害を吹き飛ばしていく。

だが、ケイネスの余裕は次に入った部屋で全て消し飛んだ。

彼にとっては何気ない……それこそ今までと同じ要領で足を踏み入れたその部屋は、ある特徴を持っていた。それは部屋を囲む四方の壁が、他の部屋と一切繋がっておらず、極めて分厚いということである。そしてケイネスの入室と同時に、彼の退路となる出入口が仕掛けられていた爆弾による崩落で塞がれ、部屋の信管にスイッチがはいった。

次の瞬間、ケイネスの視界に入ったのは”白”だった。さらに彼の鼓膜をも破裂させかねない程の轟音と共に、ケイネスの周囲は炎熱地獄と化した。

エレクトロン焼夷弾――――マグネシウムとアルミニウムの軽合金を利用した焼夷弾の一種であり、今回切嗣が対魔術師用に用意した殺傷兵器の一つ。

その燃焼温度は摂氏２０００～３０００度という、かのナパーム弾の９００～１３００度を大きく上回る超高温に達する。ナパームに比べれば効果範囲は狭いが、テルミット反応によって生み出されるこの高熱は、燃焼に酸素を必要としないため、たとえ空気の少ない密室の中でも、一旦燃え始めたら自然に燃え尽きるまで消すことはほぼ不可能である。さらに化学反応によって発生する激しい光は、間近で直視すればスタングレネードなみのダメージを視力に与える。

その危険性から１９８３年の特定通常兵器使用禁止制限条約付属議定書３によって人口密集区域への使用を禁止されたいわくつきの代物なのだ。

東京大空襲においても、後から来るＢ２９たちのために攻撃目標をマーキングする役目を果たしたこの超絶物騒な兵器を一人の人間に使うというイカれっぷりは、ある意味『魔術師殺し』衛宮切嗣の面目躍如と言えるのかもしれなかった。

銃弾の音速にも対応できるケイネスの礼装も、さすがに光の速さまでは間に合わず、彼は叫び声をあげる暇もなしに視力にダメージを負った。幸い、襲いかかる爆風は月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）が防御したが、それでも膜越しに伝わる凄まじい高熱まではどうしようもなかった。

目を潰されながらも、このままでは自分は蒸し焼きになることを確信したケイネスは、必死で膜内の温度を魔術で下げ続けるが、月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）を全力で展開しつつさらに別の魔術を発動し続けるというのは、いかに神童と謳われる彼にも厳しすぎる作業だった。さらに下げても下げても一向に冷えない膜内の高温が、ケイネスの意識を奪う。

”このままでは死ぬ”

迫り来る死神の顔を脳裏に浮かべながら、ケイネスはついに窮地に陥ったことを認めた。このままでは脱水症状で意識を失い、自分はリタイアだ。現状打破のため彼は右手をかざした。

## 第十八話　新しい局面にて（前書き）

遅くなりすいません。ちょっと忙しくて手間取りました。

## 第十八話　新しい局面にて

十合、二十合。いや、既に百合は打ちあったのかもしれない。

人の目の届かぬ森の奥深く、邪魔するものなど一切ない舞台でセイバーとランサーは踊る。

セイバーの剛剣が振るわれる度に大地が抉れ、ランサーの魔槍が音速を超える度に木々が薙ぎ払われる。それは正に倉庫街で再戦を誓った二人の望みが叶った、決闘の延長だった。

死力を尽くして鎬を削る両者だが、足止め役のセイバーの顔には当惑の色があった。

「ランサー、貴方は――――」

彼女は見逃さなかった。今のランサーの槍捌きは、僅かながらだが港場の時より明らかにキレがない。どう考えてもそれはランサー自身が消耗しているのではなく、片腕を使えないセイバーへの手心だった。

恐らくランサーは騎士として、手負いとなっているセイバーの負傷につけ込むことを善しとせず、敢えて手加減しているのだろう。その潔癖さは見事としか言いようがないが、セイバーからすればそれは心底から歓迎できるものではなかった。自分の不覚が、この誇り高い男にいらぬ配慮を決心させてしまったのだとすれば……。

「――――勘違いしてもらっては困るぞ、セイバー」

そんなセイバーの心中を察したのか、ランサーは澄ました面持ちのまま、小さくかぶりを振る。

「今このハンデにつけ込めば、間違いなく慚愧の念が我が槍の冴えを鈍らせる。他の連中ならともかく、お前とだけは尋常に雌雄を決したいからな」

「ランサー……」

「故に騎士王よ。全力で貴様を倒すための、これが俺にとって最善の”策”だ」

毅然と言い放つランサーの曇りなき闘志を感じたセイバーは敵の心意気に、改めて感銘を受けていた。この男の強さを支えている最大の要因は”心”。騎士という生き物は、いかにその純粋な意思を戦場で貫けるかによって、発揮できる強さはまるで違ってくる。自身がそうであるように、ランサーもまた正真正銘の騎士であったのだ。

「……ディルムッド・オディナ。貴方と出会えて良かった」

好敵手の尊い在り方に感嘆しつつ、セイバーまた全霊でもって応じる。左手の傷も、引き留めの命も最早彼女にとっては瑣末事だった。

――――だが、突如その均衡は崩れた。

「な――――ッ！？」

凝然とアインツベルン城の方角に振り向いたランサーの行動に、セイバーもまた仰天した。サーヴァントは令呪によって契約を結んだマスターとは密接な繋がりを持っており、どちらか一方が命の危機

に関わるほどの窮地に陥った場合、もう一方に気配として伝えられる。マスターたるケイネスが城内でかかった灼熱の罠。それが彼の命を脅かしていることを、ランサーは伝播してきた警鐘によって感じ取ったのだ。

だがそれは最高潮を迎えたこの勝負の狭間において、余りにも致命的な隙だった。

『令呪をもって命ずる。セイバー、必滅(ゲイ・ボウ)の黄薔薇を破壊しろ』

経路(パス)を通じて流れ込んできた令呪の膨大な魔力に、セイバーは瞬時に理解した。あぁ、これがあの人の言っていた”チャンス”か……。

本人の意思とは関係ない強制力により振るわれた渾身の剣戟は、咄嗟のことで混乱しているランサーにとっては追い打ちとなり左腕から黄の魔槍を弾き落とす。さらに令呪の効力で連続して繰り出された『風王鉄槌(ストライク・エア)』の暴風が、宙を舞った宝具を完膚なきまでに破壊した。

その行動にランサーはまたもや驚愕の面持ちになりセイバーを見据えるが、彼もまた自身を呼び出す令呪の効力によってその姿を消していった。

全てが終わり、一人その場に取り残されたセイバーは我知らず虚空を仰ぐ。そんな彼女の背中に近づいてくる気配が一つ。振り向いた先にいたのは、舞弥の使い魔からの映像を通してこの戦いを監視していた衛宮切嗣だった。

「卑怯だ、と。そう言いたげな顔だな」

沈黙を続けるセイバーの瞳を切嗣は真っ直ぐ見据え、そして語り始めた。彼の策を、仕掛けた罠を、それによってランサーのマスターがどんな目にあったのかを。懇切丁寧な切嗣の説明は一部の隙もない。それ故に完璧に理解できてしまったセイバーにとっては苦しいものであった。

普段の彼女なら、静かに切嗣を批判したかもしれない。だがその目に何かの決意を宿し、自分からセイバーに話し続ける切嗣を彼女は止めようと思わなかった。

一通り話し終えた切嗣は懐から愛用の煙草を取り出すと、流れ作業のように口にくわえ、火をつける。

「君が何を考えているかは、僕にも自ずと想像がつく」

「……」

紫煙をふかす己がマスターに、セイバーは黙って耳を傾ける。

「だがセイバー、これだけは言っておく。僕は必ず聖杯を勝ち取り、世界を救う。その為ならどんな外道の行いも、僕は辞さない。悪辣だと、卑怯だと詰(なじ)るのなら好きにすればいいさ。だが僕は、この冬木で流す血を、人類最後の流血にしてみせる」

キッ、と鋭い眼光で己を射抜く切嗣。それを見てセイバーは思い出した。あの氷の城で聞いた、切嗣の悲願。世界の救済のために、誰よりも冷酷になるという切嗣の偽りなき本心。今までは拒絶され、ほとんど意識すらしなかったが。

全てを聞き終えたセイバーの心には、怒りや憎悪の類は湧いてこな

い。既に彼女は切嗣の決意が、紛れもない本物だと分かってしまっていた。あぁ、この人はこんなにも強い信念で聖杯を求めているのだと。

「セイバー、城に戻れ。今ならまだ燃えている部屋を塞げば、城の全焼は免れる」

「……了解しました」

踵を返しアインツベルン城に走り去っていくセイバーを切嗣は静かに見送り、ドッと吹き出した汗を拭いながら近くの木にもたれかかった。呼吸が乱れ、疲労困憊の様子がありありと出ている。セイバーとの会話で追い詰められた精神に負担が掛かったのだ。

妻の勧めに従い、こうしてあの少女にちょっとだけ話してはみたが、それなりの効果はあったようだ。あの誇り高い英霊と分かり合えるとは思ってないし、分かり合うつもりも無いが、それでも勝つために必要というなら仕方ない。味方と連携がとれないチームなど崩壊するためにあるようなものだ。それぐらいは切嗣も弁えている。

たとえ精神に限界が来ようとも、それが一体何だと言うのだ。その程度のことで根をあげてリタイアするほど自分は半端な覚悟でこの戦いに臨んではいない。妻すら犠牲にすることを決めたのだ。ならば己の心の一つや二つ如き、いくら壊れようが構わない。

胸の動悸を抑え、決意新たに覚悟を決め直した切嗣は、戦闘の終了を相棒に伝えるべく無線機を取り出した。

アインツベルン領での戦闘の翌朝、とある魔術使いが用意したこのアジトでも、一つのことに決着がついた。

「一日に二回この錠剤を服用すること。怠れば肥大化した蟲が暴走してアンタの身体を食い尽くす。くれぐれも注意してくれ」

「あぁ、すまない」

やや血色の戻った顔で薬を受け取った間桐雁夜は、静かに恩人に頭を下げた。あれから本人の希望通り刻印虫を間桐臓硯ではなく、間桐雁夜を主人として改造し、色々と手を加えた。間桐家から持ち去った多くの魔道書の情報を参考にし作り替えられた刻印虫は、今や雁夜の肉体にかつてよりも更に強力な魔術師としての力を与えてはいるが、その代償として寿命は既にカウントダウンを始めている。

「それにしても、本当にいいのか？　アンタたちの隠れ家を貸してもらって……」

「間桐家の資料とアンタの令呪の礼だ。これの御陰でよりプランが円滑に進みそうだからな。それに、教会が遠坂と組んでいる以上避難は出来ないだろう？」

そう言ってフォックスは雁夜から移植した右腕の二画の礼呪を見せる。本来雁夜の右手にあるべきこの聖痕は、昨日一画をバーサーカーの譲渡に使用され、残りの二画を間桐の資料を解析したフォックスとキャスターによってフォックスの手に移っていた。元々令呪は

間桐が考案したシステムだったので、それを移す手掛かりが奪ってきた魔道書の中にあったのは僥倖であった。

「いつ遠坂に仕掛けるかはアンタの好きにするといい。だが最低でもあと二日は待たないと駄目だ。でないと馴染みきっていない刻印虫の反動でアンタは死ぬ」

「分かってる。それまでは俺も桜ちゃんもおとなしくしてるよ」

既にバーサーカーと令呪を手に入れたフォックスとキャスターのペアは新たな局面を迎えようとしているため、別の拠点に移るつもりだ。そのためこのアパートは、行き場を無くした雁夜と桜の仮の住居としてフォックスが提供したのだ。

「それじゃあ俺はもう行く。いつまでも新居に従者を待たせておけないからな」

「あぁ、本当にありがとうフォックス。感謝してもしきれない。キャスターにもよろしく言っておいてほしい」

「分かった、じゃあな。頑張れ」

にこやかに去っていくフォックスを見送り、雁夜は笑った。笑顔など魔術師になって以来本当に久しぶりだ。そんな自分自身にも苦笑しながら部屋のリビングに戻った雁夜は、ベッドですうすうと寝息をたてている桜の横に座った。既にこの子も自分と同様、あの主従の治療を受けて完全に体内から蟲は取り除き、間桐との縁は切れた。もうこの子はあのおぞましい魔術とは関係ない。

「もう……後には引き返せないな」

安らかに眠る桜を撫でながら雁夜はこれからの死闘に思いを馳せた。おそらくあと一週間もしないうちに自分は死ぬ。たとえ死ななくともこの身体は長くない。

「桜ちゃん、約束……一つは守れそうだよ。でも、もう一つの方は……」

そこまで言って雁夜は自嘲気味にかぶりを振る。死を目前にしているというのに、その心と表情は何故か穏やかだった。

―――――――――――――――――――――

雁夜と別れたフォックスは新しいアジトがある住宅街へと向かった。売り出されていた一般住宅であるこの拠点は、魔術工房としての利点は殆どないが、『大聖杯』が眠っている柳桐山に近い位置にあるため、色々と作業がしやすいのだ。

「キャスター、今着いたぞ～。……また本読んでるのか？」

新拠点のソファーで読書に興じているのはキャスター。真名は「玉藻の前」。フォックスに忠誠を誓う良妻狐にして聖杯戦争史上歴代最強のキャスターである。雅絶世期の平安時代出身な彼女は、召喚されてからというもの、現代の書物に興味を持ち、仕事の合間をぬっては買ってきた本を読みあさっているのだ。そのジャンルは小説や伝記、果ては絵本に漫画と多岐にわたる。夢中なのか今はまだフ

ォックスに気づいてない。

「ううっ！　グスッ……ごん。おまいだぁったのかぁ～」

ちなみに今読んでいるのは「ごんぎつね」。何だか凄く納得いかないものが感じられるのは気のせいである。本人は涙腺崩壊の名作だと言っていたが……。いや、否定はしない。

「おいキャスター。ハロー？」

「わっ！　ご主人様（マスター）！？　おかえりなさい」

ようやく気づいたか、とフォックスは悪態をつく。

「キャスター、別に休憩するなとは言わんがもう少し気を配ってくれ。俺が敵だったらどうするつもりだったんだ？」

「テヘ！」

「テヘ！　じゃない！　……まぁいい。雁夜のことは済んだよ」

「そうですか……。上手くいくといいですけど……」

「そうだな……」

何しろ刻印虫を再び使えるようにしろと言われたときは、二人して正気を疑ったほどだ。虫自体はおとなしくさせれば、取り除くことは出来なくとも、主人である雁夜への負担を抑えることは出来るというのに。作戦の概要はそれなりに望みがあるとしても、その代償はとてつもなく大きい。だからせめて使わなくなったあのアパート

を貸した。偽装は完璧なので、おとなしくしていれば二日や三日では特定されないだろう。

「まぁこれ以上は俺たちが気にしてもしょうがない。こちらはこちらの仕事をしよう。ところで、『大聖杯』の方はどうだった？」

「はい、”地脈の変更”は可能みたいです。あと二、三回仕込む必要がありますけど」

「それは良かった」

今回キャスターが有している固有スキルの一つに、「信仰：A」というものがある。これは彼女の故郷である日本に限り、その土地の霊脈、地脈をある程度優先的に操れるというもので、魔術師的に見れば奇跡とも言える能力である。

そしてフォックスはこのスキルを『大聖杯』の解体に利用することを思いついた。元々冬木の聖杯戦争には二つの聖杯が存在しており、一つはアインツベルンが用意する願望器としての聖杯である『小聖杯』。もう一つは柳桐山の地下にある、冬木の地脈の魔力を六十年かけて吸い上げサーヴァントを召喚するための魔力を蓄える役目を持つ『大聖杯』。早い話が、この『大聖杯』が魔力を蓄えられなくなれば、六十年周期で聖杯戦争を行うことが出来なくなるのだ。

『大聖杯』自体は、既に『冬の聖女』ユスティーツァの魔術回路と融合しているため手が出せないが、魔力を吸い上げる”道”である地脈の方は、キャスターのスキルをフル活用すればその流れに手を加えることが可能であった。要は地脈（パイプ）を切って魔力（ねんりょう）がいかなくなるようにするという発想である。フォックスの計画では『大聖杯』も破壊する予定ではあったのだが、自分たちが途中で敗退することも

ありえるので、少なくとも二度と聖杯戦争がおきないよう布石を打っておくことにしたのだ。

「ところでご主人様（マスター）、町に出かけませんか？」

ふとそんなことを言い出したキャスターにフォックスは訝しむ。

「どうして？」

「はい、実はですね。先日町に放っていた使い魔がとんでもないものを見つけまして……」

珍しくシリアスな己がサーヴァントの様子にやや困惑しながら、フォックスは喉を鳴らして言葉を待つ。

「なんと！　征服王とそのマスターさんが町で遊んでたんです！」

ちなみに実際は遊んでいるのはライダーだけで、ウェイバーの方は引っ張り回されているだけという真実は、彼の無罪を証明するために記しておく。

「……はぁ、だから？」

「思えば私たち、聖杯戦争が始まってからというもの仕事漬けです。それでも私はまだご主人様（マスター）が色々娯楽をくださいますけど、ご主人様（マスター）ってばずっと働き詰めでしょう？　それで征服王を見て思いついたんです！　せっかくだから私たちもたまには息抜きをしようって！」

ガッツポーズで語るキャスターを見てフォックスが浮かべた表情は

呆れ……ではなく何故かとても神妙なものだった。

「それもそうだな。なら出かけようか。今からでいいかな？」

「えっ！？　いいんですか？」

思わず素っ頓狂な声を上げるキャスター。てっきりこの役目には割とシビアなご主人様は断ると思っていたのだから無理もない。

「キャスターもせっかく故郷に召喚されたのに、観光一つ出来ないんじゃ詰まらんだろう？　それに俺たちが白昼堂々と市中を歩けば、間桐桜を探しているだろうアサシンの目を雁夜から離せる。遠坂時臣は俺があの子の行方の手掛かりだと考えているだろうからな」

「あぁ、成程……」

「そういうわけでだ、折角だし思いっきり羽目を外そう。勿論アサシンの存在を考慮した上で、な。夜は温泉でも行こうか？　確かキャスター行きたがってただろう？」

「いいんですか！？　ヤターッ！　何かいい感じになってきました～！！」

楽しげに笑い合う主従の光景は、傍から見れば非常に和むが、この時はまだ誰も気付かなかった。まさかこの提案があんな混沌（カオス）な事態を招くなどとは……。

## 第十九話　出会ってしまった者達にて（前書き）

お久しぶりです。少々難産となってしまいました。

## 第十九話　出会ってしまった者達にて

「ご主人様（マスター）あの桃色の建物は何ですか？　綺羅綺羅（キラキラ）してて可愛いです」

「ハイハイあれは関係ないから先に進みましょうね～」

興味津々に『ラブホテル』を指さすサーヴァントの手を引いてシルバー・フォックスは繁華街を歩く。

今彼が着ているのは、下はジーンズに上は黒のミリタリージャケットと完全な私服であり、いつも共にある”愛刀”も、今は持っていない。銃刀法違反でしょっぴかれたりしたら目も当てられないのだ。

対するキャスターもまた、普段の藍色のきわどい和服とは違い、主が揃えてくれた現代服に身を包んでいた。ブラウンのフリル付きロングブーツにベージュのダブルコート、巨大な尻尾と耳は『変化』のスキルで隠し、いつも結んでいるピンクの髪は、ロング状におろして白のニット帽をかぶっているその姿は、彼女の愛らしい容姿の魅力を余すところなく引き出していた。

そんな二人の取合せは、否が応にも衆目の目を集めた。何しろピンクという現実なら違和感ありまくりな髪色がこの上なく自然に似合っている可憐な美少女を、ビシッとした背筋の長身イケメン外人がエスコートしているというのだから無理もない。

カップルとして見ても、およそ一地方都市などではなかなかお目にかかれない光景だろう。

だがそれでいいのだ。こうしてショーウィンドウを眺め、カフェテラスでパイを食べる何気ない行動が、他の勢力の目にとまれば狙い通り。存分に目を釘付けにするがいい。
何しろ主従でデートするサーヴァントとマスターなど真っ当なマスターが見れば何をトチ狂っているのかと訳がわからないに違いない。

「ん？」

「あら？　今日はサンタクロース風の登場じゃないみたいですね？
それにしても、折角私とご主人様（マスター）の休日なのに～」

だがそんな二人さえも釘付けにする光景が市街地の向こうから歩いてきた。

５０ｍ先からでも分かる。およそＮＢＡのバスケ選手でも滅多にいそうにない褐色の巨躯が、のっしのっしという擬音がよく似合いそうな歩き方で先程のフォックスとキャスター以上に周囲の視線を浴びている。　２０ｍぐらいの距離まで近づくと、どうやらこちらの姿に気づいたようで、その筋肉の塊は、本人とは真逆の小柄なマスターを摘みあげて駆けてきた。

「いよぉ！　キャスターにそのマスター……いや、シルバー・フォックスであったな。奇遇ではないか」

「あぁ……ほんとに、いやまったく」

狼狽露に返すフォックスは、実際少なからず驚きに駆られていた。
この二人が街に出たのをキャスターの使い魔が発見したのは先日のことであって、精々一回きりの気分転換だと思っていたのに、こ

うも連続して昼間から遊んでいるというのは予想外だったのだ。思ったよりこの凸凹コンビは暇なのだろうか？

「ふむ、こうして再び相見えることができようとは実に重畳。しっかしその格好、もしやお主らも余たちと同じ遊覧か？」

「何言ってんだライダー！　お前はともかく、僕は街の地理を検(あらた)めるためなんだからな。　ていうか何でアンタらも堂々と昼間から歩いてるんだよ！？」

「その通り。キャスターが町で見かけたアンタらを見つけて、自分も行きたいって言われてな。いい機会だから出てきたんだ。それにしてもライダー……そのシャツは？」

必死に主張するウェイバーをさらりと無視し、フォックスはライダーの出で立ちを見ながら呟く。

現在ライダーが身に纏っているのは、どう考えてもＸＬサイズ以上はありそうなどデカイウォッシュジーンズに、これまたＸＬサイズと思しき冬には寒そうな半袖Ｔシャツである。胸には『アドミラブル大戦略ＩＶ』というタイトルロゴが、世界地図と絡めてデカデカとプリントされていた。

「おう、これか？　いや、騎士王の奴が”すーつ”を着て町を出歩いているのを見て思いついてな。余も当代風の衣装(ファッション)を着れば外に出ても問題はあるまい？　故に、この時代にある『通信販売』とやらを試してみたのだ！」

満面の笑みで自慢するライダーにフォックスは合点がいった。たしか原作ではライダーが通販で注文した（勿論ウェイバーには無断で）荷物を受け取ってウェイバーが被害にあうというシーンがあっ

たはず。
　しかしこうして間近で見ると、何となくウェイバーの気持ちがわかる気がした。明らかに特大のサイズにも関わらずまったく隠しきれていない褐色の筋肉達磨が、実体化して街に出ようというのだから苦労するはずである。よく原作のウェイバーは胃潰瘍にならなかったものだ。いや、描写されてないだけで実際はなったのかもしれない。

「ちょっと征服王！」

「ム、何だキャスター？」

　唐突に今まで黙っていたキャスターが口を開き、三人の視線が集まる。

「その服が、出歩くのに相応しいと思ってるんですか？」

「応とも！　この胸板に世界全図を載せる。実に小気味良いではないか。余はこの服の柄が気に入った。覇王の装束として申し分ない」

　揚々と宣言するライダーに、ウェイバーはげんなりと脱力するが、会話しているキャスターは妙に真剣な表情だった。

「私はそうは思いませんね。確かに世界を制するのが夢だから地図を服の柄にするという着眼点は悪くないと思いますけど、その服には重大な欠点があります！」

「ほう？」

　ビシィッと指さすキャスターを、ライダーはさも興味深気に見つ

め、二人のマスターも黙って聞きに徹する。

「貴方の服の欠点……すなわち、威厳がない！」

ドドーンッと某特撮物のような爆発音を背中に響かせたキャスターにライダーは愕然とする。

「威厳……だと？　そりゃ王には必要なもんだろうが、キャスターよ。この格好ではダメだというのか？」

「そうですよ。そんな格好じゃ人はついてきません。第一折角召喚されたのに、この国伝来の衣装を着ないなんて、それでも征服王イスカンダルですか？」

糾弾するキャスターに、ライダーは「ムゥ……」と唸る。確かにかつてアジアを席巻したライダーは、征服した国の衣装を好んで身に纏った。そういう意味では、この洋服はミスマッチだったかもしれない。

「いいことを思いついたぞ」

不意に、今まで会話を見守っていたフォックスが発話した。

「ライダー、ウェイバー。少し付き合わないか？」

―――――――――――――――――――――

そもそもウェイバーが街に出たのは、ほんの気分転換だったのだ。事の発端は彼がライダーに未遠川の水を汲みに行かせたところまで遡る。

魔術師の所在を突き止めるにあたって最もオーソドックスなのが水を利用した探索法である。常に上流から下流へ一定の法則で流れる水は、長い時間をかけねば判明しない地脈や、時と共に変わる風の流れに比べて読み取るのが遥かに容易なのだ。そこでウェイバーは、冬木の中央を流れる最も巨大な川である未遠川の水を何箇所かライダーに汲み取らせ、水の中に含まれる魔術の名残から敵マスターの拠点を見つけようとしたのだ。

結果は見事に空振り。なけなしの錬金術による探索行為も何一つ身を結ばず、結局徒労に終わったウェイバーはまたまたショックで部屋に引き篭こもってしまったのだが、そんな彼を引っ張り出して町まで連れてきたのが何こそライダーである。最初は渋々ながらついてきたといった感じだったが、それでも失敗した自分を励まそうとするライダーの気遣いはありがたいと思っていた。そう……思っていたのだ。

「わっはっはっはっは！！　こりゃあいい！　おい坊主、見よ。皆が余の偉容に目を奪われておるぞ！」

弾けるように笑うライダーにウェイバーは頭を抱えた。今ライダーが着ているのは所謂”羽織袴（はおりはかま）”。あの後フォックスが全員を率いて繁華街の端にある呉服屋へと赴き、ライダーに買い与えた特大の一品である。

外出用としてポピュラーなシルクウール製の灰色袴に、腕が出る

程度の長さの黒中羽織。ここまでならまだ男の着物として通じるだろうが、ライダーが背中に羽織っているマント状の着物……これが問題だった。

それは呉服屋で買った適当な品を、フォックスとキャスターが物質操作の魔術で染め上げたもので、全体が甲冑時のライダーのマントと同じ朱色一色に染められ、背中にはシャツと同様世界地図。更に地図に絡める形でデカデカと『征服王・偉巣漢陀瑠』のロゴが刻まれた、渾身の芸術品だった。道行く人々は「何事！？」と足を止める。

「くそぅ、どこでこんなにおかしくなったんだよぅ……」

頭痛を通り越して偏頭痛一歩手前のウェイバーだが、無理もない。何しろ其処らの力士よりも余程屈強な体格を誇っているライダーなので、シャツの時よりも目立ちまくることこの上ない。どこかの傾奇者の様である。勿論半分遊びでチョイスしたキャスターとフォックスによる故意の犯行である。

「ウェイバー、気持ちは分かるがそう悲観するな……ププッ」

「そうですよ。征服王のマスターならこの程度のこと、鼻で嗤うぐらいの器を見せないと……ププッ」

癇に触る笑い方で励ます目の前の元凶二人にウェイバーは言いようのない怒りを感じ、あらん限りの激情をぶつける。

「あぁそうか、分かったぞ。こうやってライダーに派手な格好させて他の連中の目印にしようってんだなコンチクショウ！」

「成程！　それは思いつかなかった。ウェイバー、君は頭が良いな。さすがは征服王のマスターだ」

「……馬鹿にしてるだろ？」

「分かるか？」

ニヒルに唇を歪める目の前の魔術師が憎くて堪らない。この男、明らかに自分の窮状を楽しんでいる。

当のライダーの方は心底気に入った様で無駄に着物を翻したりして、これでもかと言うほど周囲の注目を集めていた。

「いやぁ、これがこの国の民族衣装か。うむ、実にゆったりとして心地が良い。礼を言うぞキャスター、フォックス」

「気に入ってくれたなら何よりだライダー」

「ええ、良く似合ってますよ」

「フム、余も何か返したいところだが……おお！！」

急に何かを思いついたかのように手を打ち鳴らすライダーは満面の笑みを浮かべて二人を見る。その様子にウェイバーは本能的に危険なものを感じた。途轍もない程嫌な予感を……。

「二人とも、余の開く酒宴に参加せんか？」

この日の夜、聖杯戦争史上前代未聞にして、戦いを一気に終息へと導く宴が開かれようとしていた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3045x/

二人の狐の聖杯戦記

2011年11月20日14時27分発行